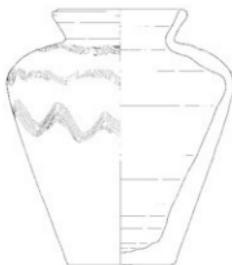


惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告

—能越自動車道建設に伴う
埋藏文化財調査報告IX—

第二分冊



2010年

財團法人 富山県文化振興財團
埋藏文化財調査事務所



惣領野跡遺跡 A地区 全景（北から）



惣領野跡遺跡 B地区 全景（南から）



惣領野跡 遺跡 弥生土器・土師器



惣領野跡 遺跡 中世の土器

惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告

—能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財調査報告IX—

第二分冊

2010年

財團法人 富山県文化振興財團
埋蔵文化財調査事務所

目 次

第IV章 惣領野際遺跡	1
1 基本層序	1
2 遺構と遺物	3
(1) 繩文・弥生時代	3
A 自然流路	3
C 包含層出土遺物	5
(2) 古墳時代	6
A 溝・自然流路	6
C 包含層出土遺物	9
(3) 中世	10
A 掘立柱建物	10
C 溝・自然流路	12
E 土坑	15
B 構	12
D 井戸	14
F 包含層出土遺物	17
3 まとめ	84
(1) 繩文・弥生時代	84
(3) 中世	84
(2) 古墳時代	84

自然科学分析

I 自然科学分析の概要	87
II 惣領浦之前遺跡	
1 木製品の樹種同定, 種実遺体分析, 微細物分析, 昆虫同定, 骨同定	89
2 槽の樹種同定	126
3 漆器・漆製品の科学分析	128
4 放射性炭素年代測定	138
5 石材鑑定	146
6 和同開珎の螢光X線分析	152
7 鉄鍋の金属学的調査	154
III 惣領野際遺跡	
1 木製品の樹種同定, 土壌分析, 骨同定	158
2 槽の樹種同定	169
3 漆器の科学分析	170
4 木製品の年輪年代	175
5 放射性炭素年代測定	177
6 石材鑑定	182
7 鉄製品等分析	186

写真図版

卷首図版目次

- 卷首図版 1 惣領野跡遺跡A地区全景 B地区全景
卷首図版 2 惣領野跡遺跡弥生土器・土師器 中世の土器

挿図目次

第149図	惣領野跡遺跡	基本層序	2
第150・151図	惣領野跡遺跡	遺構全体図	18・19
第152・153図	惣領野跡遺跡	縄文・弥生時代遺構実測図	20・21
第154・155図	惣領野跡遺跡	古墳時代遺構実測図	22・23
第156・157図	惣領野跡遺跡	遺構全体図	24・25
第158～168図	惣領野跡遺跡	中世遺構実測図	26～36
第169～201図	惣領野跡遺跡	遺物実測図	37～69

表目次

第17表	惣領野跡遺跡	建物一覧	70
第18表	惣領野跡遺跡	柱穴一覧	70
第19表	惣領野跡遺跡	溝・自然流路一覧	72
第20表	惣領野跡遺跡	井戸一覧	73
第21表	惣領野跡遺跡	土坑・柱穴一覧	73
第22表	惣領野跡遺跡	土器・陶磁器・土製品一覧	74
第23表	惣領野跡遺跡	木製品一覧	81
第24表	惣領野跡遺跡	石製品一覧	83
第25表	惣領野跡遺跡	金属製品一覧	83

写真図版目次

図版116	惣領野跡遺跡	(縄文・弥生時代)
図版117	惣領野跡遺跡	(古墳時代)
図版118	惣領野跡遺跡	掘立柱建物・溝(中世)
図版119・120	惣領野跡遺跡	掘立柱建物(中世)
図版121	惣領野跡遺跡	掘立柱建物・溝・井戸・土坑(中世)
図版122・123	惣領野跡遺跡	土器(縄文時代)
図版124・125	惣領野跡遺跡	土器(弥生・古墳時代)
図版126～132	惣領野跡遺跡	土器(古墳時代)
図版133～136	惣領野跡遺跡	土器(中世)
図版137・138	惣領野跡遺跡	土器・陶磁器(中世)
図版139・140	惣領野跡遺跡	金属製品(中世)
図版141	惣領野跡遺跡	金属製品(中世・近世)
図版142～144	惣領野跡遺跡	石製品(縄文時代)
図版145	惣領野跡遺跡	石製品(縄文～古墳時代)
図版146	惣領野跡遺跡	石製品(中世)
図版147～151	惣領野跡遺跡	木製品(弥生時代)
図版152～159	惣領野跡遺跡	木製品(古墳時代)
図版160～164	惣領野跡遺跡	木製品(中世)

第IV章 惣領野際遺跡

1 基本層序

惣領野際遺跡は、仏生寺川とその支流の鞍骨川に挟まれた谷底平野の中央部に位置する。周囲は水田として利用され、現在の集落は平野部を取り囲む丘陵縁辺に点在する。遺跡が立地する谷底平野は、二つの河川の流路が時と場所を変え、浸食と堆積を繰り返して形成されていった様子がうかがえる。

発掘調査は、耕作土を機械掘削で除去した後、調査区内周間に排水溝を掘削し、調査区内の排水を確保するとともに、その壁面の土層を記録した。また、サブトレンチを南北に1箇所、東西に数箇所設定して層序の観察記録を行い、確認調査の記録との照合を行った。これらを参考にしながら、中世の遺物包含層であるⅡ層の掘削を進めて行き、概ねⅢ a層上面で当該期の遺構を検出した。

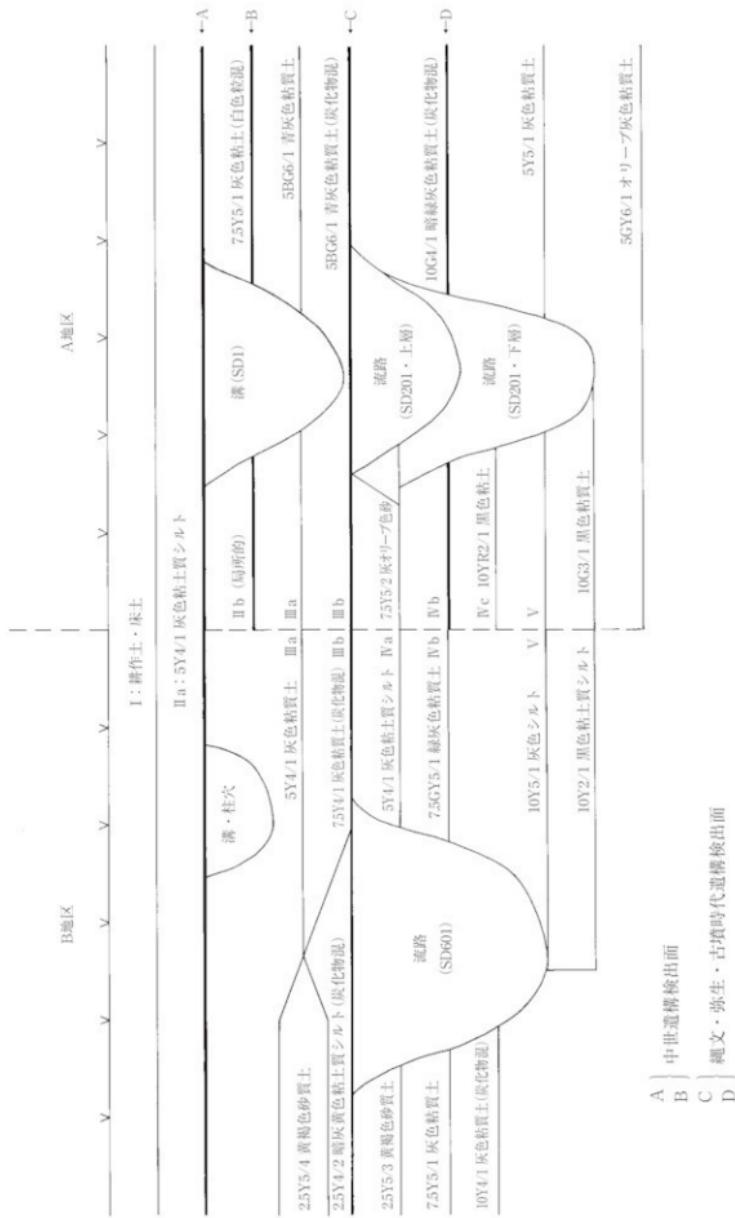
基本層序は、Ⅱ層までは遺跡全体に共通した堆積状況を示している。Ⅱ層の特徴は、直径5mm～2cmの白色粒が混入していることである。特にⅡ b層で顕著に認められるが、この層は遺跡全体に均一に堆積しているものではない。白色粒は不定形で、ある程度硬度があり、当初骨片かと見誤るものであった。この白色粒と層の生成との因果関係を知るために土壤鑑定を実施したが、白色粒はⅡ層を形成している火山灰質シルトの母材と同種類の碎屑片、基質から構成されており、母材の未風化部分であることがわかった^①。下層の堆積層には白色粒の混入は見られないことから、堆積してから下層に比べて時間の短いⅡ層に母材の未風化部分が残っているものと推察される。氷見市内の他の遺跡で見ることもあるので、沖積低地のグライ土壤の特徴の一つと考えられた。

中世面の調査終了後、再度Ⅲ層・Ⅳ層の堆積状況を知るためにサブトレンチを設定し、場所によつては小型重機による掘削を実施した。その結果、Ⅲ層の上層のⅢ a層が無遺物層であると判断し、調査の省力化を計るべく、Ⅲ a層が広範囲に堆積するA地区全体とB地区の北側において重機によるⅢ a層の掘削を行った。Ⅲ b層は人力によって掘削し、下層の調査を実施した。しかしながら、調査を進めていく中で、地盤が軟弱であったためか、予想以上に重機の重量が下層包含層と検出層に与えた影響が大きく、今後の調査における反省材料の一つとなった。

Ⅲ層以下の堆積状況は、隣接するA地区とB地区でさえ、層序に大きな違いが見られるようになる。A地区南側では、Ⅲ b層の下にⅣ b層（暗緑灰色粘質土）、Ⅳ c層（黒色粘土）が堆積しているが、これらの層は局所的な堆積状況を示しており、A地区的自然流路S D201北側でも既に異なる。また、B地区で確認できたⅣ a層はここでは確認できず、Ⅳ b層上面で縄文時代晚期～弥生時代後期後半の自然流路を検出している。

B地区的北側、及び東側は、Ⅲ b層下はⅣ a層（灰色粘土質シルト）、Ⅳ b層（緑灰色粘質土）、Ⅳ c層（黒色粘土）の順で堆積し、比較的安定した様相を示す。特に北側を中心に堆積するⅢ b層からは一定の量の遺物が出土し、Ⅳ a層上面で古墳時代初頭の遺構を検出した。これに対し、当期の自然流路S D601以南では、Ⅲ b層下は黄褐色砂質土と灰色粘質土とそれに炭化物を含む層が約10cmの厚さで互層となり、別の流路の堆積状況を示している。実際に、B地区南側はトレンチの最終確認面まで掘削したが、付近からは遺構・遺物は見られず、北側の古墳時代の遺物を包含するⅢ b層に対応するような層も認められなかった。似たような色調や性質をもつ地層が繰り返し堆積する沖積平野の調査において同時期の遺構面を検出することの難しさを痛感したのである。

注1 第二分冊：自然科学分析 バリュ・サークル株式会社「木製品の樹種同定、土壤分析、骨同定」



第149図 物領野際遺跡 基本層序

2 遺構と遺物

(1) 繩文・弥生時代

遺構には不定形の落ち込みと自然流路、土坑がある。いずれも、人工的に手が加えられたものではないが、落ち込みからは縄文時代晚期、及び弥生時代中期～後期の土器が、自然流路下層からは縄文時代晚期の土器・石器、弥生時代中期～後期の土器、上層からは弥生時代後期後半の土器が木製品や流木などとともに見つかっている。

A 自然流路

201号自然流路（S D201, 第150・152・169～176図, 図版116・122～125・142・147～151）

A地区中央を東西方向から北に向かって屈曲し、逆「L」字形に流れる流路である。屈曲部でやや膨らむが流路幅はほぼ一定である。堆積状況を見ると流路は大きく2時期に分かれ、規模が大きく変わる。初期の段階は幅が約6.5～10m、深さも約1.4mと大きい。最下層には植物の腐植層、その上に、腐植層と砂層の互層が堆積し、短いサイクルで浸食と沈殿が繰り返されたことがうかがえる。また、最下層の腐植層の厚みは下流の方が厚くなってしまっており、流路の屈曲後に水勢が衰えたと推察する。しかし、この層中には流木が幾本も混じっており、一時的にせよ洪水に匹敵するくらいの一定以上の水量と水勢があったことがわかる。また、遺物が出土する位置はちょうど屈曲部に集中する。これは遺跡内で当該期の遺構が検出できなかったことを考え合わせると、近辺の上流の遺跡を浸食した流路の堆積物が流れを阻む屈曲部で堆積したと推察できよう。そして、流路は堆積の最終段階になると、その幅は約2.5m、深さは60～88cmと小規模になる。埋土は砂層と腐植層の互層となり、最下層には砂利の混じる砂層が堆積する。砂より粒子の粗い砂利が堆積することから、一過性の短期間の流路であったことがうかがえる。この最終段階の流路からの遺物の出土はほとんどない。

出土遺物には、縄文時代晚期の土器・石器、弥生時代中期～後期の土器・木製品・石製品がある。

縄文土器は深鉢と蓋形土器がある。深鉢は口縁部が外傾するもの（I）と、粗製深鉢（3～13）がある。Iの口縁部外面には縄文が施され、端部は先細る。頸部には連続押引き刺突文と沈線を施し、肩部にも1条の沈線を巡らし区画する。体部は無文（ナデ）である。粗製深鉢は破片が多く、全形を知り得る個体は少ないが、直線的な口縁部で、筒型のものとやや外傾するものがある。口縁端部の形態から、丸くおさめるもの（4～6・9・13）、器壁が厚く内端に面をとるもの、内面に斜めに押圧を巡らすもの（8）、先細りのもの（3）、やや外側に屈曲するもの（10・11）がある。体部外面には継ぎまたは、横位の条痕が施されるが、ほとんどが横位の条痕である。内面はほとんどがナデ調整で、横位の条痕を施すものもある（9）。12は棒状具による矢羽根状の平行沈線文が施される体部片で、胎土や色調が他の破片と異なる。時期は他の土器より古く、後期初頭頃のものかと考える。2は蓋形土器で、口縁部は沈線文と連続押引き刺突文で区画され、変形した鍵手文と縄文で加飾される。底部（15～21）外面は多くがナデ調整であるが、網代痕が残るものもある。多くの土器は縄文時代晩期中葉中屋式併行期の特徴をもつ。

石器は打製石斧2点（25・26）と磨製石斧3点（27～29）が出土している。いずれも、刃部または、基部を欠損し、完形のものはない。打製石斧は2点ともにローリングを受けて表面が摩耗し、特に25が著しく、28の磨製石斧も表面の剥離が著しい。27は変質閃緑斑岩製、29は透閃石岩製である。

弥生土器には大きく分けて弥生時代中期後葉～後期前半に属するもの（32～39・45・48）と、後期後半（40～44・46・47）に属するものがある。

32~39・45は屈曲が緩やかな「く」の字口縁の甕で、口縁端部に面を取るものと、丸くおさめるものがある。面を取るものの中には櫛状工具による連続刺突文が施されるもの（32・34）がある。体部の調整は内面はハケメ調整、外面は口縁端部までハケメ調整するものと、口縁部をヨコナデするものがある。39は端部内面に櫛状工具による斜格子文が巡らされる。40は長頸の直口壺の口縁部で、外面は縱方向のハケメ調整後ナデ調整、内面は横方向のハケメ調整で粘土接合工痕の表面には指押さえの跡が残る。41は器台。受部が大きく外反し、端部は上下方向に肥大する。端部外面には円形浮文が3個施される。42は高杯で、口縁部は欠損する。脚部は棒状脚で、裾端部は折り返して水平を取る。外面には丁寧に縱方向のミガキが施される。裾部には4箇所に透かし孔が穿たれる。43・47・48は鉢。43は、逆「U」字形の把手が付けられる鉢の体部である。47は有段口縁鉢で、短く外反する口縁部をもつ。体部外面と内面は横方向のミガキ調整である。48は口縁部が直線的に斜め上方に伸びる鉢で、端部は丸く收める。44は有鉗蓋で、鉗の窪みは浅い。

木製品には剣物桶、杓子形木器、鞘、円形板、舟形容器、槽、杭、部材、用途不明品、原材がある。樹種はほとんどが、加工が容易なスギである。

49は結束孔付の剣物桶で、口径は約17cm、高さ約16cmである。口縁上端の1段下を四角く把手状に削り出し、上下に孔が貫通している。内面には底辺から約4.5cmの所に、幅約1.5cmの浅い圧痕が巡っており、底板を装着していた痕跡と推察する。50は把手付の剣物桶で、一部であるため口径までは復元できない。側板の高さは25.9cm、把手を入れると30.7cmとなる。把手はわずかに内傾し、側板の上方を四角く造り出し、中央に長方形の穴を抉って作る。内面には底辺から5.5cmのところに段が造り出され、底板の受けとなっている。また、内面には中位からその段にかけて黒色塗彩される。51は直径29.3cmの円形板で、断面が台形状であることから、何らかの底板であったと見られる。表裏面には明瞭に加工痕が残る。52は杓子形木器。扁平な板状を呈し、柄も身も厚みは同じ約1.5cmである。身の側面は直線的で身幅は広く、端部は直線であったと推定する。53は組み合せ式の剣物の鞘である。先端が丸く仕上げられた鞘尻の部分で、表面に黒色の光沢がある。54は長さ約1m、高さ14cmの槽の一部である。大きさから見ると、田舟の可能性もあるが、田舟と槽の形態分類がはっきりしないので、ここでは方形の大型の容器はすべて槽として記述する。底部は平坦で、口縁は面を取る。55は舟形容器の縁辺の一部である。

56~58・60~66は部材、又は用途不明品である。56は等間隔に3cm×7cmの長方形の貫穴がある板材である。57は上部に小孔が穿たれ、下端に向かって細く加工された板状の木製品である。59は幅7.7cm、厚さ1.6cmの板杭である。60は棒状の用途不明品で、長さ142.4cm、直径約2cm、上端を切り込んで傘状の突起を造り出している。61は中央に長円形の孔がある部材である。表裏面には丁寧な加工痕が残り、縁辺は薄くなるよう加工されている。62~66は目途穴や欠込をもつ部材である。62は両端の一方の角が落とされた形状の板材で、両端よりの2箇所に長方形の孔がある。孔の周辺の一部には表面に線状痕が残る。65・66は共に長さ約75cm、幅約20cm、厚み約2cmの板材で、下端が欠損する。形状の類似から同じ用途の部材と考えられる。上端より中央には不整形な孔が穿たれる。屋根材であった可能性がある。67~70は原材である。67~69は板材で、67・68の表面には顕著な加工痕が残る。69の断面では工具による切離痕が観察できる。70は約40cmの長さに切断した芯持ち材をみかん割にした材である。樹種はサクランボ属で、緻密で堅い材質である。表面は一部焦げている。

235号自然流路（S D 235, 第150・153・177図, 図版124・125）

A地区南西隅から、S D 201の屈曲部方向へと向かい、そこで切られる不整形の落ち込みである。周辺に位置する不整形の落ち込みも調査時は別個の遺構として取り扱ったが、その形状から同一遺構と考える。平面形は不整形のアーメバー状を呈し、中層にはIV c層に酷似するオリーブ黒色粘土が堆積し、最下層の暗灰色粘土から遺物が出土している。出土遺物には弥生時代中期後葉の土器がある。71は凹線文系の壺で、断面三角形の口縁に3条の擬凹線が施される。体部外面はハケメ調整である。72はゆるやかに口縁部が開く壺。口縁部と底部が出土しているが、全形を復元できなかった。表面の荒れのため調整は不明瞭であるが、底部外面には擬方向のハケメ痕が残る。

250号自然流路（S D 250, 第153・170図, 図版116・122・123）

S D 201の南岸に平行し、最後にそれにつながる浅い自然流路である。埋土はIV c層とV層が混じり合う单層である。流路内を中心一帯からは縄文時代晩期の破片がまとまって出土した。S D 201との合流点にはS D 201の肩に平行して流木が横たわり、S D 250の流れを遮るような状態であった。このことからS D 201はS D 250より新しいと判断した。出土遺物は縄文土器（22～24）がある。22は粗製深鉢で、口縁部と底部が判明したが、全形の復元にまで至らなかった。体部上位に最大径があり、底部に向かってすぼまる器形になると推察される。口縁端部は膨らみ、上端で水平に面を取る。体部外面には縦位の条痕、内面には横位の条痕が施される。胎土には多量の砂粒を含む。23・24は深鉢の底部で、底部に網代痕が残る。

B 土 坑

264号土坑（S K 264, 第150・152・153・171図, 図版143）

S D 201とS D 250の間に位置する、直径約65cmの円形の深い土坑である。穴の中には三角形状を呈する自然石が重なって出土した。30・31の石材はシルト岩で、表裏には直径5～8cmの丸い窪みがある。表面には擦痕が認められるが軟質な石材なので、古い使用痕かははっきりしない。形状はやや安定感に欠くが、凹石として利用されたと考える。性格は不明であるが、縄文時代の遺構と判断する。

C 包含層出土遺物（第177・178図73～85, 図版122～125・144・145）

遺物包含層のⅢ層からは縄文時代晩期中葉の土器・石器、弥生時代中期後葉～後期前葉の土器が出土している。量は少なく、当該期の遺物はほとんどがS D 201から出土している。

79・80は縄文時代晩期中葉の粗製土器である。79は直線的に口縁が延びる器形で、端部がわずかにくびれる。表面の調整は不鮮明であるが、貝殻による条痕文が施される。底部には簾状圧痕が残る。80は外反する口縁部をもつ器形で、端部は面を取る。外面には横方向の貝殻条痕が残る。

73～77は弥生土器の壺である。緩やかに口縁部が開き、口縁端部に櫛状工具、又はヘラ状工具によつて連続刺突文を施すものがある。74・75は頸部上方まで縦方向のハケメ調整が施される。78は高杯の杯部。直線的な体部と短くわずかに外反する口縁部をもつ。端部は先細に仕上げられる。調整は器面が荒れていて不明である。

石器は打製石斧（81・82・84）、石錘（83）、砥石（85）がある。打製石斧は所謂短冊形と撥形がある。撥形は厚みが薄く、ともに基部を欠損する。83は扁平な自然石であるが、3箇所に敲打痕が残る。85は表裏2面に砥面をもつ砥石である。石材はシルト岩で、用途は仕上げ用であろう。側縁には整形した時の痕跡と思われる剥離痕が残る。

(2) 古墳時代

遺構には溝、自然流路、土坑がある。B地区北側の溝と遺物包含層を中心に、古墳時代初頭頃の土師器が出土している。包蔵地確認調査の段階では堅穴住居の存在も予測され、包含層掘削時には炭化物が多く混じるⅢb層からまとまって遺物が出土したが、遺構は浅い溝状の落ち込みを検出したに止まる。自然流路からは土器の出土は皆無であったが、埋土下層の腐植層に混じって槽や部材など多様な木製品が出土している。

A 溝・自然流路

601号自然流路（S D601, 第151・154・182~187図, 図版117・152~159）

B地区中央をやや北へ湾曲しながら東西に流れる流路である。平面図で示した流路の幅は最終段階に埋没した流路の幅で、残務の段階で重機によって流路幅の確認をしたところ、北側へ約4.5m、南側へ約3m広がることが判明している。流路の堆積は大きく2段階に分かれる。それは植物の腐植層のレンズ状の堆積によって明瞭に判別できる。最終段階の流路は大きく暗灰黄色粘質土、暗オリーブ褐色粘質シルト・灰色砂質シルト・腐植層の互層、腐植層の順で堆積する。下層の流路も概ね同じような堆積を繰り返している。土器の出土はなかったが、下層の腐植層から木製品が多く出土している。木製品は建築部材、用途不明品が多いが、の中には槽などの容器も混じり、完形の槽（130）が伏せた状態で見つかっている。これらの木製品は当遺跡内から廃棄されたというよりは、上流から流れてきて沈殿堆積したという状況を示していた。

木製品には、槽、杭、梯子、部材などがある。大型容器や建築部材、杭等大型の製品の割合が多いが、部材には机、琴、鞆、輶台などがある。材質はほとんどがスギである。

130~133は方形の例物の槽である。大型の槽については田舟に分類する例もあるが、ここでは一括して槽として扱う。130は長辺113.1cm、短辺68.7cm、高さ20.5cmの方形の大型の槽である。短辺中央には両側に7cm×8cmの板状の把手がつく。厚さは底部が2cmと薄く、側面が4~6cmと厚い。樹種はスギで、底面は柾目となっている。内外面には明瞭な削り痕が残る粗製品である。この削り痕から仕上げ段階の製作順序がわかる。内側は底面と長辺を長軸方向に削り、その後短辺を短軸方向に削り、最後に上端部や突起を仕上げる。外側は底面、長辺を長軸方向に削り、短辺を斜めの上下方向に、最後に突起を仕上げている。131は長方形の四脚槽である。高さは9cmと低いので、四脚盤ともいって良いかもしれない。器壁の厚さは約1cm強である。脚は底部と接する所で10cm、接地面で5cmと台形を呈する。樹種は同じくスギで、底部が柾目となる木取りである。132も槽の底部である。133は短辺に小さい板状の把手をもつ槽である。平面形は長辺は直線的であるが、短辺は曲線を描き、上端面には角がない。推定で長さ91cm、幅45cm、高さ16cmである。平面形は130に比べ、長さの比率が大きい。厚みは底部が薄く、側縁が厚く残されている。把手は130と同様板状であるが、2.5cmと張り出しが小さく、造り出しも上端面と水平ではなく、一段下がる。樹種はやはりスギで、木取りは底部が柾目である。134~141は杭である。材質はすべてスギである。分割材の先端を加工した角杭（134~136・138）、板杭（137・139・140）、削り出し丸木を加工した杭（141）に分けられる。135・138には表面の一部に抉った跡が残るものがある。139は幅2.8cmと小型であるため、他の用途も考えられよう。141は加工先端部が部分的に炭化している。142~168は部材または、用途不明品である。142は長方形の板材で、長辺の両側縁には目途穴と思われる大小不整形な穴が穿たれる。4cm×2cmの大きい方の穴は左右に分かれるが間隔はほぼ同じであるが、小穴の方は規則性が認められない。壁板のようなものか。143は板状の用途不明品で、上下が欠損しているため本来の形状が不明である。方形の中央部には表

面が焦げた跡が残る。144は長方形の板状の指物部材で、短辺の一方は端に向けて薄くなるよう仕上げられ、その端面近くにはそれに平行して浅く溝状に長方形に抉る。机の天板だろうか。145は長方形の角材で、一面は敷居のように浅く2本の溝状に削られている。147は両端に枘を有する部材で、断面は山形を呈する。148は琴の部材である。槽作りの琴の上板の一部で、尾部の突起が2個確認できる。長辺の2箇所の2個1対の孔は共鳴槽の装着孔である。

149は端部両角造出材である。ミカン割にしたスギ材の一端に両角を造り出し、もう一端は斜めに切り落としている。151は端部に向けて薄く加工してある指物部材で、幅が同じの144と関連する部材の可能性がある。152は梯子の一部である。材はキハダである。154は端部に枘を有する部材である。155は両端の枘を作り出した鞘装具の部材である。156は長辺片側に3箇所の深い抉りを有する。編台の目盛板と推定する。157は上端に溝状の抉りを有する板材である。下端は欠損しているが、長方形の穴が削り抜かれているようである。158～160は刺突具の一種か。各々、削り出し角材、削り出し丸木、板目材と材が異なる。161～166は垂木か。上端は抉りを入れて頭部を造り出し、下端が残っているものは先端を加工して尖らせているものがある。いずれもスギの分割材、または、削り出し角材である。167は棒状の木製品。168は長さ約15cmの芯持丸木の両端を丸く仕上げた木製品で、側面の一部に抉りが入る。木鍤のようなものであろうか。材はコナラ属アカガシ亜属である。

618号溝（S D618, 第151・154図）

B地区北西端で検出した幅約40cmの直線的に延びる溝である。炭化物が多く混じるオリーブ黒色粘土が堆積し、南側のS D642とほぼ平行する。遺物は土師器の甕、高杯が出土している。

642号溝（S D642, 第151・179図、図版117・127・130・131）

S D618と同様の埋土が堆積する溝である。浅い落ち込み状のS D643の中で検出したが、掘形はこれより明瞭な形で検出した。幅は約50cmと狭いが、古墳時代の土師器が出土している。調査区外へと延び、集落に関連する遺構の一部と考えられる。

土師器には甕（86）、器台（87～90）がある。86はくの字口縁の甕で、口縁端部は斜め上方につまみ上げたような状態で、丸く收める。体部は最大径が中位にあり、球胴を呈する。器台の受部は端部を摘み上げて有段を成す。87はそこに縱方向に刻み目を施し、その上位に3本の沈線が巡る。内外面には赤彩が施される。脚部は直線的、または八の字状に開き、端部は丸く收める。

643号自然流路（S D643, 第151・154・179・180図、図版127・130・131）

不整形の浅い落ち込みである。東に向かって広がりながら、掘形が不明瞭となる。炭化物の混じるオリーブ黒色粘土質シルトが堆積し、上面一帯からは古墳時代の土師器が出土したが、建物等の明確なプランは見出せなかった。断面観察からは間層の機械掘削による重機の影響が読み取れる箇所があり、遺構の形状を乱している可能性が大きい。従って、遺物も混在している可能性があり、S D642と分けることにはあまり意味がないと判断した。

土師器は甕（91～95・112）、壺（96・97）、器台（88・98～100）、鉢（101・102）がある。甕は有段口縁甕とくの字口縁甕がある。くの字口縁甕は口縁部が斜め上方に延び、端部を丸く收めるものと、外反するものがある。96は有段口縁壺、97は壺の体部で、小さい底部には板状の圧痕が残る。100は外反する口縁部を有する受部に円形の透かし孔がある器台。裝飾器台の省略形とも言われるタイプである。口縁端部は面を取り、沈線が1条巡る。透かし孔はその間隔から推定して13箇所に穿孔されていたと考える。内外面横方向のヘラミガキで、赤彩される。鉢は有段口縁の鉢と無頭鉢がある。101の外面はヨコナデ、内面は横方向のヘラケズリ調整である。102の口縁部は垂直に立ち上がり、端部

は先細りとなる。

644号溝（S D644, 第151・154・179~181図, 図版126・127・130・131）

弓なりに曲がるや不整形の溝である。当初一帯から土師器がまとまって出土し、堅穴住居の可能性をも含めて、サブトレチを入れながら調査を進めた。しかし、掘形が次第に広がっていき、遺構のプランが確認できる面がより下であることが判明し、最終的には溝の形状となった。また、冬期の悪天候での調査となり、溝の全容をすべて掘り切れたかは確信がない。埋土は炭化物が多く混じる灰色粘土質シルトで、他の溝類の埋土とはやや異なっていた。

土師器は甕（103~115）、壺（116・117）、器台（118~120）、高杯（121~124）、鉢（125~128）がある。甕は有段口縁甕とくの字口縁甕があり、くの字口縁の割合が高い。103は有段口縁甕で、口縁端部は外反する。口径と体部最大径がほぼ同じで、体部中位に帶状に煤が付着する。くの字口縁は端部を面取りするものが少なく、口縁部がゆるやかに外反し、屈曲があまくなつたものが目立つ。106は口縁部が大きく外反し、頸部の屈曲が曖昧で、肩が張らない器形である。口縁部内面には横方向のヘラミガキ、体部内外面はハケメ調整である。109は口縁部が斜め上方に立ち上がる。頸部のくびれもあまく、体部の肩の張りも少ない。口縁部と体部中位に帶状に煤が付着する。体部下半はヘラケズリ調整され、底部外面も同じである。壺は小型の丸底壺で、116は口縁部の内外面が丁寧にヘラミガキが施されている。器台は所謂小型器台で、120の受部は口縁端部を引き出して有段になるものである。高杯は、受部が内湾気味の楕形の高杯である。受部に比べ脚部は低く小さい。123は2段に穿孔される。鉢は有段口縁とくの字口縁の鉢がある。125・126は体部内外面ヘラケズリ調整、127は口縁端部を面取りし、体部外面はハケメ調整である。128は台付鉢の脚部である。

B 土 坑

610号土坑（S K610, 第155図）

円形の浅い土坑。埋土に炭化物が多く混じるが、遺物の出土はない。

613号土坑（S K613, 第155図）

梢円形の断面皿状の土坑。灰色粘土を主体に炭化物やオリーブ黒色粘土質シルトが混じる土がレンズ状に堆積する。出土遺物には土師器がある。

615号土坑（S K615, 第155図）

調査区西境に位置する円形の浅い土坑。上面から土師器が出土している。

616号土坑（S K616, 第155図）

円形の浅い土坑。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトの単層で、底面はあまり平坦ではない。土師器が出土している。

617号土坑（S K617, 第155・181図, 図版130）

S K616に隣接する三角形状の不整形の土坑。埋土は灰色粘土に黒色粘土と炭化物が混じる層で、S K616同様底面が乱れており、性格は不明である。出土遺物には土師器の甕がある。129は頸部にくびれが無く、肩の張らない器形で、口縁端部はわずかに摘みあげられる。全面に煤が付着する。

620号土坑（S K620, 第155図, 図版117）

B地区北東部で検出した不整形の土坑。埋土の灰色粘土には直径1cm前後の大きめの粒子の炭化物が混じる。深さは浅いが、南側でまとめて土師器が出土している。体部の破片がほとんどで、図化できるものはなかった。

C 包含層出土遺物（第188～190図169～219、図版128・129・131・132・145・159）

包含層からは土師器（169～217）、木製品（218）、石製品（219）などが出土している。土師器には、壺（169～186）、壺（187～198）、高杯（199・206～208）、器台（200～205）、鉢（209～212）、蓋（213～215）、椀（216・217）がある。

壺は有段口縁壺とくの字口縁壺があるが、全形を知り得る個体はほとんどない。有段口縁壺は有段の内面の屈曲が緩くなってしまっている。くの字口縁壺は口縁端部を斜め上方に摘み上げるタイプ、面取りするタイプ、丸く仕上げるタイプがある。また、頸部の屈曲は明瞭なものと緩やかなものがあり、体部は最大径が中位にある個体が多い。175は、頸部の屈曲が無く、口縁部が大きく外側へ引き伸ばされる。182は小型のくの字口縁壺で、口縁部は斜め上方に立ち上がる。体部はあまり張らず外面ハケメ調整である。

壺には直口壺（189・191・192）、小振りの球胴の短頸壺（193）、短頸広口壺（194）、二重口縁壺（195・196）、有段口縁壺（198）がある。体部は球胴化している。

高杯は杯部が直線的に開き、口縁部が斜め上方に伸びるもの（206・208）と、外反するもの（199）、杯部が椀形で、口縁部が外反するもの（207）がある。206の脚柱部は下に向かってやや膨らみ、端部で外展する。時期は古墳時代中期か。207の脚部は短く、直線的に開く。透かし孔は4箇所に穿たれる。

器台はいわゆる小型器台で、受部が椀形のもの（200・203）と口縁部が直線的なもの（201）がある。受部の穿孔は短いものが多く、筒状を呈するのは201だけである。

鉢はくの字口縁鉢と、台付鉢、有孔鉢がある。

蓋は鉢部分ばかりで、全形を知り得る個体はない。

216・217は椀で、時期は古墳時代中期に下る。

218は、B地区南西寄りで見つかったもので、遺存状況は悪いが、蹴放しか。

219は、荒砥石。砥面は一面で、背面は敲打によって整形される。

(3) 中世

中世前期の遺構には掘立柱建物、柵、井戸、溝、自然流路、土坑がある。掘立柱建物は9棟、この他にも柱根や礎板の残る柱穴を多数検出しており、建物数はこれを上回っていたと考えられる。建物は棟方向と区画溝との関係から大きく3時期に分けられるが、概ね中世前半に収まる。この時期の建物の特徴の一つに柱穴の多くに礎板を敷設していることがある。井戸は素掘りのものが2基、水溜めに曲物が残るもののが1基ある。溝は断面逆台形の幅約2mの溝が2条、それに直行する溝が2条検出されており、区画を目的としたものと考えられる。土坑には曲物を埋置したものや、底部に筵を敷いた跡が残る方形の土坑などがある。出土遺物は13~14世紀のものが主体で、中世土師器、珠洲、輸入陶磁器、木製品、石製品、金属製品などがある。包含層からの出土ではあるが、A地区からは青磁人物像（燭台）が出土している。近世の遺構には浅い落ち込みなどがあるが、主たる遺構を構成するものではないので本書の記述では割愛する。

A 掘立柱建物

1号掘立柱建物（SB 1, 第158図）

A地区北側中央で検出した2間×1間の側柱建物である。桁行4.11m、梁行3.67m、主軸がN-83°-Eの東西棟である。北西角の柱穴は検出できなかった。柱穴の埋土はすべて単層で、柱痕跡は残らない。周辺は遺構がまばらで、耕作痕に関係すると思われる溝状の遺構が散見するのみである。

2号掘立柱建物（SB 2, 第158図）

SD 1とSD 30・SD 40に区切られた方形区画の中で検出した2間×1間の側柱建物である。桁行3.87m、梁行3.35m、主軸がN-87°-Eの東西棟である。規模はやや小振りであるが、SD 1に酷似する。SD 40に近接するが、主軸方向がSD 1と併行することから考えて区画に伴う建物と考えている。ただ、区画の中にはSB 2以外は主だった遺構は検出されず、大規模な区画に比して、建物は貧弱である。これらの建物以外ではSD 30の東側から調査区境周辺で何基か柱穴が検出されているので調査区外へ向けて建物が延っていた可能性がある。

3号掘立柱建物（SB 3, 第158・191図、図版118・146・160・163）

3間×2間以上の総柱建物で、北に向かって調査区外へ延びる。主軸はN-3°-Eで、柱間はほぼ約2mである。重複するSB 4とは主軸方向が同じで、柱穴の切り合いがないので前後関係は不明であるが、建て替えに伴うほぼ同時期の建物と推察する。また、SP 317の東側に振て切り合っている柱穴とSP 533も建て替えに関連するものとも考えられる。SP 317・SP 331からは柱が、SP 329からは礎板状の木片が出土している。桁行延長線上にあるSP 341やSP 340、SP 335はこの建物に付随する柱穴と考えている。各柱穴からはSP 318から中世土師器、SP 323からは中世土師器、緑黒色系漆器（223）、SP 330からは板状の砥石（224）が出土している。

SP 331の柱（231）はクリ材で放射性炭素年代測定を実施したところ、1270AD~1380AD（ 1σ 暦年較正年代）の測定結果が得られた³²。測定した建物の柱の中では一番新しい値を示しているが、遺物の時期と比較しても、建物の時期は概ね13~14世紀として大過ないと考える。

4号掘立柱建物（SB 4, 第158図、図版118）

同じく3間×2間以上の総柱建物と推定したが、柱穴が半数近く欠損する。前述のとおり、SB 3の建て替えの建物と考えており、柱間が狭いが軸に沿うる柱穴が他にもあり、それらも建物の構成要素として捉えられるかもしれないが、確信はない。例えばSP 321から柱が出土しており、同一の建物かどうかは別にしても建物を構成する柱穴であったことには間違いがない。柱穴埋土は概ね炭化物が

混じる灰色粘土の单層である。S P 309の埋土には炭化物が多量に混じり、中世土師器が出土している。S B 3・4はその主軸が区画を構成するS D 30と平行することから考えて、区画と同時期のものであり、その主体は調査区外東に広がるものと予測される。

5号掘立柱建物（S B 5, 第158図, 図版118）

S K 44を覆う1間×1間の建物である。小屋的な性格のものと考えている。桁行2.65m, 梁行2.32mの東西棟で、主軸はN-77°-Wである。S B 3・4に比べて主軸が西に振れる。当初S B 3・4に伴う土坑と考えたが、柱穴と土坑掘形に切り合いがあることと東辺が建物主軸とずれるので、別遺構と考えた。柱穴は概して細長く、柱穴埋土はS B 3・4とは大きく異なる。S P 342には柱が残る。S P 312から中世土師器が出土する。

6号掘立柱建物（S B 6, 第159・191図, 図版118・120・136・139・161・163・164）

B地区中央東寄りで検出した4間×3間の総柱建物である。南北に横切るS D 347と柱穴との切り合いはこれより古い。桁行9.89m, 梁行7.58mの南北棟で、主軸はN-8°-Eである。柱間は1.79~3.25mとばらつきがあり、柱間の広い箇所には軸上にのるS P 382・S P 386・S P 388・S P 389があり、これらは補助柱的な役目を果たしているのではないかと考えている。なお、S P 523とS P 524は上層で検出できず、下層掘削時に検出したもので、測量によって位置のみを記録し、平面形はあくまでも概略である。この建物の特徴は、谷底平野の中央部に位置するためか、前述したように柱穴の多くに礎板を敷設している。特にS B 6と後述するS B 7が顕著であり、それはその位置に関係すると考える。検出した23基の柱穴のうち礎板が遺存するものは14基あり、柱がともに残るものはない。断面を観察しても、柱痕跡を残すものではなく、ほとんどが単層である。礎板を残して抜き取られたと考える。柱が遺存するものは4基のみで、S P 388・S P 523はクリ、S P 525はスタジイの芯持丸木を使用している。礎板に利用しているのは板材や角材などの建築材の廃材で、適當な大きさに加工し、底に敷いている。柱の沈下を防ぐ目的であるため、その形態には意味はないと考えられる。北西角に位置する円形の土坑S K 360はこの建物に付随するものと考える。出土遺物は、S P 359・S P 387・S P 393から中世土師器が、S P 382から珠洲の鉢(225)が、S P 387からは箸(227)と金属製品(230)が出土している。230は茎を有する扁平な金属製品である。茎部分の断面は上部に比べて厚めの長方形で、上部は上方に向けて広がる形状を示し、断面は扁平な長方形である。先端が欠損しているためはっきりわからないが、方頭の鉄鋤か、小型の鑿の可能性がある。S P 395からも箸(228)が出土している。箸はいずれも小片で、スギ材である。

S P 388・S P 523・S P 525から出土した柱(232~234)を対象に放射性炭素年代測定を実施したところ、1250AD~1295AD(1σ)の範疇に入る測定結果となり¹³、概ね13世紀後半となった。

7号掘立柱建物（S B 7, 第160・191図, 図版118・120・133・164）

S B 6の1m東に位置する4間×4間の総柱建物である。桁行8.27m, 梁行8.22mを測り、主軸はN-13°-Eである。S B 6とはやや軸方向がずれており、近接していることから同時存在は有り得ない。柱間は平均2.2mで、南辺が1.7m、西辺が1.9mと狭い。特に南辺が狭く庇付きの建物の可能性がある。また、S P 530・S P 531・S P 537・S P 538・S P 541は下層で検出したもので、S B 6の柱穴の一部と同様に、平面形は任意である。北東隅の柱穴はS P 380としているが、S P 541の可能性もある。建物の北側では軸線上にのる柱穴や礎板・柱が残る柱穴を多数検出しており、建物の規模が北に延びる可能性もあるが、ここでは4間×4間の建物として記述しておく。24基の柱穴のうち、礎板が残るものは12基であった。礎板の材もS B 6と同様なものを使用している。礎板を多様するのはこ

13 第二分冊：自然科学分析 株式会社加速器分析研究所「放射性炭素年代測定」

の2棟とS B 9だけで、このことからもこの2棟はほぼ同時期頃のものとわかる。S P410からは中世土師器(220)が出土している。

S P376出土の礎板とS P530のキハダ材の柱(235)について、放射性炭素年代測定を実施している³⁴。S P376の礎板が1270 A.D.~1300 A.D. (1 σ), S P530の柱が1220 A.D.~1265 A.D. (1 σ)の測定結果が得られた。再利用の材を使う礎板のほうが新しい値を示しているが、概ね13世紀後半の年代を示している。

8号掘立柱建物 (S B 8, 第161・191図, 図版119・133・134・136・161)

B地区南東で検出した5間×4間の建物で、北側の柱穴の欠損が目立つが、総柱建物と考える。桁行は10.87m, 梁行は8.25m, 主軸はN-2°-Eの南北棟で、西側(S A 1)と南側(S A 2)に平行する柱列を伴う。南側の柱列と建物との間隔は約1.5mである。建物の柱間はほぼ約2.1mである。柱が残っていたのはS P484・S P497で、S P465・S P472・S P496には柱痕跡が残る。礎板を敷いた柱穴はS P482の1基のみである。S P483では検出面から約20cm下で中世土師器(222)が出土しており、断面観察から柱が抜かれた跡に埋まったものと判断する。意識的に埋置したかは不明である。この他S P483からは珠洲片口鉢(226), 砥石が出土している。また、S P460・S P472・S P473・S P482・S P495の埋土から中世土師器(221), 珠洲, 漆器, 箸(229)が出土している。建物の北方向約1mにあるS E459は水溜に曲物を利用したもので、このS B 8に関連する施設である。また、東側3mに平行する位置にあるS D489は建物と同時期のものであろう。

9号掘立柱建物 (S B 9, 第162図, 図版120・121)

B地区中央やや南寄りで検出した2間×2間の総柱建物である。桁行4.72m, 梁行4.34mの東西棟で、主軸はN-72°-Wである。柱穴は浅く、検出した8基の内3基に礎板が、S P445には柱痕跡が残る。重複する砂礫層のS D401よりは新しい。柱穴に積極的に礎板を利用するには、S B 6・S B 7に似る。建物の構造から小屋的性格のものであろう。この他には柱穴からの遺物の出土はない。

B 橋

1号橋 (S A 1, 第161・191図, 図版164)

S B 8の西側に並列する3基の柱穴で構成する。柱間はまちまちであるが、建物からの間隔が等しく平行することから建物に付随するものと考える。S P519は下層で位置のみを確認したものであるが、柱(236)が遺存していた。236の材はスダジイで、放射性炭素年代測定を実施した結果は、1260 A.D.~1290 A.D. (1 σ)の値を示している³⁴。

2号橋 (S A 2, 第161図)

S B 8の南側に並列する4基の柱穴で構成する。東端のS P499の位置だけはずれるが、建物からの間隔、各柱穴の間隔は等しい。S A 1と同様にS B 8に付随するものである。庇の可能性もある。

C 溝・自然流路

1号溝 (S D 1, 第156・163・192図, 図版134・136・137)

A地区南側を東西に横断する幅約3m前後の溝である。B地区北側で検出したS D301とは平行関係の位置にあり、その間隔は約55mである。この間を南北に区切るS D30との切り合い関係は、断面を観察すると、これを切って溝を掘削している。堆積状況は最下層に腐植した植物が多く混じる黒褐色粘質土、中層には黒褐色粘質土に緑灰色粘質土ブロックと白色粒が混じる土、上層に灰色シルトに緑灰色粘質土ブロックが混じる土が堆積し、その上面にII a層が厚く堆積する。いずれの層にも量の多少はあるが、腐植した植物が堆積し、時折砂の互層が見られることから、ある程度の流れもあるが、

常に水が溜まっている状態のまま、次第に埋没していった様子がうかがえる。この溝が掘削された目的は、規格化された形状を取りつつもその内部、及び周辺に建物等の遺構が少ないとから、区画も目的とはしているが、その立地からかんがい排水に重点を置いたものではないかと考えている。出土遺物は少ないが、中世土師器（237・238）、珠洲（240）、中国製青磁（239）、鉄滓、用途不明の木製品などが出土している。239は龍泉窯系青磁椀の高台部分で、釉薬が豊付きまで施釉され、高台内側は露胎、見込みには草花文が施される。遺物の時期は13世紀から14世紀である。

30号溝（S D30、第156・157・163・192図、図版133・134・136）

S D 1に直交する東側の溝である。S D 1に切られるが、北に向かって溝底が傾斜していることを考えるとS D 1の古い段階で共存していた可能性がある。埋土は暗青灰色粘質土、又は灰色粘土・粘土質シルトに炭化物や白色粒が混じる土が堆積している。南方24mに平行するS D 40も同様な堆積状況で、この2本は同時に存在した区画溝である。東側に隣接するS B 3・S B 4に平行し、同時期と考えている。出土遺物は中世土師器（241～243）、珠洲（244・245）で、数点に止まる。244は頭部の短い中型の壺T種である。タタキの範囲が肩部より下から始まっている。I期か。遺物の時期は13世紀から14世紀である。

40号溝（S D40、第156・157・163・192図、図版136）

S D30と同様S D 1に直行する溝である。幅1.12～1.77mで、規格・堆積状況もS D30と酷似する。S D30と共にS D 1とS D30の間を区画する。S B 2と近接するが併行関係にあり、同時期と考えている。出土遺物は少なく珠洲（246・247）のみである。時期はいずれもⅢ期で13世紀後半か。

50号溝（S D50、第156・164図）

S D 1南方約5m、東西に延びる溝である。交差するS D30・40よりは古く、S D40周辺より東は断面形が逆台形で、区画溝のような形状を示すが、西側は次第に浅くなり、形状も不明瞭となる。埋土は東側で、上層が暗青灰色粘質土、中層が暗青灰色粘質土と緑灰色砂質土の互層、下層が黒色シルトで、西側では下層の堆積が認められない。S D 1の埋土と似るが、それとの間隔は東に向かって徐々に狭くなり、併行関係ではない。切り合ひだけ見れば区画溝の中では一番古くなる。遺物は珠洲の小破片などが出土している。

301号溝（S D301、第157・164・192図、図版118・134・136・138）

B地区北側で検出したS D 1と平行する、東西に直線的に延びる溝である。幅は上面で3.12～3.80m、深い部分で約2.5～3m、浅い段をもつ。埋土はS D 1とはやや異なり、灰色粘質土が主に堆積し、下層には炭化物が多く混じる。出土遺物は、中世土師器（248～253）、珠洲（255～258）、中国製白磁（254）、土錐（259）、木製品などがある。中世土師器は法量は10cm以下と13cm前後の2種類あり、時期は14世紀を中心とする。254は玉縁の白磁椀で、時期は他のものと比べて古い。珠洲はⅣ期の壺と壺がある。256は肩部に櫛描波状文が施され、施文後に串状のもので、記号のようなものを2箇所に重ねて記されている。この他に、ウマの上顎と大型獸類（ヒトの可能性あり）の四肢骨が出土している¹¹⁵。遺構の時期は14世紀か。

304号溝（S D304、第157・164・193図、図版136・160）

S D301に平行する幅約60cmの溝である。トレチと重複し、上面は荒れており、特に東西の両端の形状が不明確であった。S D301と平行することからこれと同時期の遺構であろう。出土遺物には中世土師器、珠洲（260・261）、木製品（262・263）などがある。260・261は鉢で前者はⅡ期、後者はⅤ期と時期差がある。トレチの影響か。262は円形板で、中央寄りに2孔1対の孔が穿たれる。

263は一方が炭化した角材で、1側面に欠込がある。

346号溝（S D346, 第157・164・193図, 図版121・133）

S B 3・S B 4の南側に位置する東西に延びる細い溝である。その位置からこれらの建物と関連のある溝と考えている。幅20cm, 深さ10cm前後の規模であるが上面周辺の炭化物が多く混じる土からはほぼ完形に復元できる珠洲の壺（264）が割れた状態で出土した。264はⅡ期の壺で、肩部から体部上半にかけて3段の櫛描波状文を施す。

347号溝（S D347, 第157・159・164図）

B地区調査区中央を南西から北東に斜めに横切る溝である。幅は0.8~1.6mで、黒褐色粘土、灰色粘土の順でレンズ状に堆積する。S B 6と重複するが、切り合う柱穴よりは新しい。他の溝が直線的なに比して、やや蛇行しており、これに伴う建物も検出できなかった。出土遺物には中世土師器、珠洲がある。

401号自然流路（S D401, 第157・165図）

B地区中央を東西に横切る自然流路である。二条になったり、一条になったりし、幅も一定ではない。埋土は灰色粘土と明黄褐色砂質土が同量混じる土に直径1cm弱の小石が混じる単層で、洪水の氾濫等に伴う一過性のものと判断する。S B 9やS D347より古い。埋土には土師器、中世土師器、珠洲、木製品が混じる。

458号溝（S D458, 第157・165図）

B地区南東壁寄りで検出した南北に直線的に延びる溝である。南側のS D489とは方向がほぼ同じである。出土遺物はない。

488号溝（S D488, 第157・165図）

S D458とは重複する方形に巡る溝である。調査区外へ延びるので、その性格等は不明である。遺物は中世土師器、珠洲、中国製青磁が出土した。

489号溝（S D489, 第157・165図）

南北に直線的に延びる溝で、S B 8と平行し、屋敷地の境界を示すものと考えている。埋土は単層で、底面はやや平坦ではない。出土遺物には珠洲がある。

490号自然流路（S D490, 第157・165・193図, 図版133・134）

調査区隅で検出したので、全体像は不明である。落ち込み状の遺構で、上から黄灰色粘土質シルト、灰色粘土質シルトの順で、低い所には黒褐色粘土が堆積する。出土遺物には土師器、中世土師器（265・266）、珠洲、唐津がある。唐津は暗渠掘削に伴う混入と考える。中世土師器の時期は14世紀である。

501号溝（S D501, 第157・165図）

B地区南端で検出した北西方向に直線的に延びる溝である。埋土はS D489とよく似た単層である。S B 8の関連する柱穴と重複し、これより新しい。出土遺物はない。

D 井 戸

77号井戸（S E77, 第166・193図, 図版134）

S D 1の北側、単独で検出した円形の素掘りの井戸である。堆積状況を見ると、8・9層は炭化物や腐植した植物が混じり、それより上位はⅢ層が粒状に混じっており、廃絶後に埋まった土と考えられる。断ち割りでの下層確認の結果、底はⅦ層まで達しており、その上のⅥ層であるしまりのない緑灰色粘土が帶水層と考えられる。遺物は中世土師器（267）と4層と8層から箸の断片（268）が出土している。

有機物層（8層）から出土した井戸枠部材と推定する木片に対し、放射性炭素年代測定を実施した結果、1165AD～1220AD（1σ）の値となった¹¹⁶。他の出土遺物からも考えて、遺構の時期は13世紀前半である。

123号井戸（S E 123, 第166図）

A地区北西端で検出した円形の素掘りの井戸である。堆積状況は1～3層にⅢ層がブロック状に混じる土が堆積し、最下層には腐植した植物と水分を多く含んだ灰色シルトが堆積する。S E 77に比べ層が単純なことから、これより短期間で埋まったと推察する。下層から珠洲が出土している。

最下層（4層）から出土した種実を放射性年炭素代測定した結果、1165AD～1220AD（1σ）となり¹¹⁶、S E 77と同時期の年代を示した。出土遺物と照らし合わせても、この井戸も同じ13世紀前半頃と考える。

459号井戸（S E 459, 第166・193図、図版121・134・140・160）

S B 8の北方、不整形の土坑を掘削中に検出面から30cm下で底のない曲物を検出した。曲物の設置状況から井戸と判断したが、検出面から非常に浅いこと、井戸側の痕跡がないことなど井戸と決定付ける材料が少なく、別の種類の遺構の可能性がないわけではない。遺物は曲物の中から珠洲、円形板（271）が出土している他、中世土師器（269）、漆器（270）、鉄鍋（272）が出土している。270は絶黒色系漆皿で、材はブナ属である。体部下半が削り込まれ、底部外面は露胎。時期は13世紀。272は鋳鉄製鍋の一部である。底部中央の破片で、外面に湯口痕の突起が残っている。底部外面には全体にベンガラの付着が観察される。

E 土 坑

43号土坑（S K 43, 第167・194図）

S D40の西で検出したわずかに南北に長い方形の土坑である。堆積土は上層が青灰色砂質土と黒色粘土ブロックが混じり合う土、下層はそれに灰色シルトブロックが混じり炭化物や植物質の有機物を多く含む土である。このようなブロック土が混じり合う土を埋土とする遺構は他ではなく、人為的に埋めたような土である。より新しい時期の遺構の可能性もある。出土遺物には中世土師器、中国製青磁、折敷底板（291）がある。291は長さ16.5cm、厚さは4mmである。

66号・68号・76号土坑（S K 66・S K 68・S K 76, 第167図）

いずれもS D 1北側で検出した楕円形の土坑である。長径0.86～1.10m、短径0.62～0.90mで、概ね埋土は緑灰色粘質土と暗青灰色粘土が混じった土と灰色または暗灰色シルトである。S K66の下層には炭化物や樹木片が混じる。性格は不明である。遺物はS K68からのみ土師器が出土している。

316号土坑（S K 316, 第167図）

B地区北側東壁際で検出した円形の土坑である。埋土は2層に分かれ、下層中にレンズ状に炭化物が堆積しているのが観察できた。周囲には遺構はなく、関連する遺構は調査区外にあると考えられ、性格等は不明である。出土遺物はない。

344号土坑（S K 344, 第167図）

S B 5の付属施設である。やや歪んだ方形で浅く掘り窪められている。小屋的性格のS B 5の整地痕と考えている。重複するS B 4の柱穴より古い。出土遺物はない。

360号土坑（S K 360, 第168・194・195図、図版121・133・134・136・160～162）

S B 6の北方に位置する長径2.1mの楕円形の土坑である。検出面から約10cmの深さで曲物（305）の上端を検出した。曲物は土坑の中央よりかなり南西に寄った位置にある。断面の堆積状況を見ると、

当初深さ約45cmの円形の土坑の掘形を持つが、3層で約25cm埋まったか、又は埋められた後に曲物が設置されて2層で埋め、最後に全体が1層で埋まった様子がわかる。曲物の高さは残りの良いところで約15cm前後、1段のみが残る。内部からは曲物底板片（292）、曲物側板片（303・304）、中世土師器皿（273～288）が出土し、その上面からは、珠洲（289・290）、箸（293～302）、漆器などが出土している。この遺構の性格は、当初その位置からS B 6の関連する遺構と考えていたが、曲物がこの土坑に偶然このような状態で遺棄されただけか、それともこのような状態に設置された施設かで全く違うものになってくる。観察用畦の設定位置が不適切で、どちらにでも判断できる堆積状況を示しており、明確な判断は下せなかった。曲物は直径約55cm、高さ14.3cmを測り、これが原形であれば盤のような用途であったのであろうか。曲物の底板は木釘で装着される。中世土師器は法量が9cm代のものと13cm代のものにまとまる。時期は概ね13世紀である。珠洲はⅡ期の鉢が出土している。箸はすべて欠損しており、全形のわかるものはない。

曲物底板（303）を放射性炭素年代測定した結果、1155 A.D.～1220 A.D. (1σ) と周辺の建物の柱のデータより古い値を示したが¹⁷、最新の値を取れば矛盾はない。

400号土坑（SK400、第168・195図、図版134）

S B 6の東縁で検出した円形の土坑である。S B 6又は、S B 7に関連する施設と考えるが、どちらかは不明である。深さは約40cm、丸底風の掘形で、埋土は灰色粘土を中心にレンズ状に堆積し、下層には中央直径約40cmの円形の範囲にのみ炭化物が多く混じるオリーブ黒色粘土が堆積する。何らかの遺物が遺存していた可能性がある。出土遺物は中世土師器（306）などがある。

454号土坑（SK454、第167図）

S B 9の南東で検出した長方形の土坑である。主軸がS B 9の方向に沿っている。埋土は上層が黄灰色粘質土にパックされ、下層には濃淡のある灰色粘土と明黄褐色砂質土が混じり合う土が堆積し、底面近くには既に腐植していたが、編んだ筵状のものが敷かれていた。下層の埋土の状況はSK43に少し似ている。遺構の性格は不明で、農作業等に関連する施設かとも考えられる。出土遺物には中世土師器、珠洲がある。

513号土坑（SK513、第166図、図版121）

S E 459に隣接する不整形な土坑で、切り合い関係で、S E 459に負ける。埋土中からは珠洲がまとまった形で出土しているが、図示できるものはなかった。

542号土坑（SK542、第168・195図、図版121・162）

トレンチ埋土除去中に検出した土坑である。搅乱と思い掘削を進めると、黒色漆の木製品（307）が出土した。従って断面図は残せず、平面図のみの記録である。深さは約16～30cm、平面形は梢円形である。307は内外面総黒色系漆塗りの角盆で、底部外面は露胎である。平面形は入り隔で、周縁を浅く削って縁を作り出している。漆分析¹⁸によれば、当遺跡の分析した漆器類は渋下地の普及タイプのものがほとんどだが、これはその中において上質なものである。材はケヤキ材で、時期は13世紀。

547号土坑（SK547、第168図）

S B 8の西で検出した円形の土坑である。上層では検出できず、下層で検出した。埋土の灰色粘土が斑に混じり合う堆積状況から上層遺構と判断した。その位置からS B 8に関連する施設と考える。

F 包含層出土遺物（第196~201図308~443、図版133・135~141・146）

中世の遺物包含層からは、中世土師器（308~355）、中国製青白磁（362）、中国製白磁（356・357・363・364）、中国製青磁（358~361・365~372・374）、青花（373）、山茶碗（375）、瀬戸（376・377・379）、瀬戸美濃（378・380）、珠洲（381~405）、八尾（406）、石製品（407~410）、金属製品（411~422）、羽口（423）、銅錢（424~443）がある。

中世土師器はやや厚手で、口縁部を強くヨコナデされた口縁部は斜め上方に立ち上がり、断面が三角形となるものと、器壁が薄く、低平で、口縁端部を丸く仕上げるものが多い。前者は口径6.5~9cmの小型のものと、10~12cmの中型のものがある。後者も8~9cm前後のものと、12~13cmのものがある。いずれも13世紀から14世紀代のものであるが、前者のほうが新しい。中国製白磁は椀と小壺・皿がある。椀は玉環口縁の椀（356）と口禿げの椀（357）がある。363は口縁部が直線的に開く小壺か。364は割高台の皿で、見込みには重ね焼きの跡が残る。中国製青磁は椀（358~361・365~370）、皿か（371）、盤（372）がある。358は龍泉窯系の鍋蓮弁文の椀である。369は龍泉窯系青磁碗で、時期は15世紀前半以降である。362は青白磁の皿の小片か。373は青花の皿底部片。外面には唐草文、見込みには玉取り獅子文が描かれる。374は型づくりの青磁人物像の脚部片である。近県の出土例では福井県一条谷朝倉氏遺跡がある¹¹⁹。輸入陶磁器は13世紀~14世紀代のものと15世紀以降のものに分かれる。380は瀬戸美濃の灰釉の皿で、高台内側に「木」の墨書が残る。珠洲は壺（381~385）、壺（386~388）、鉢（389~405）の各種が出土している。ほとんどがII~IV期に収まるが、385や396・401・405はV期以降となる。406は八尾の壺である。

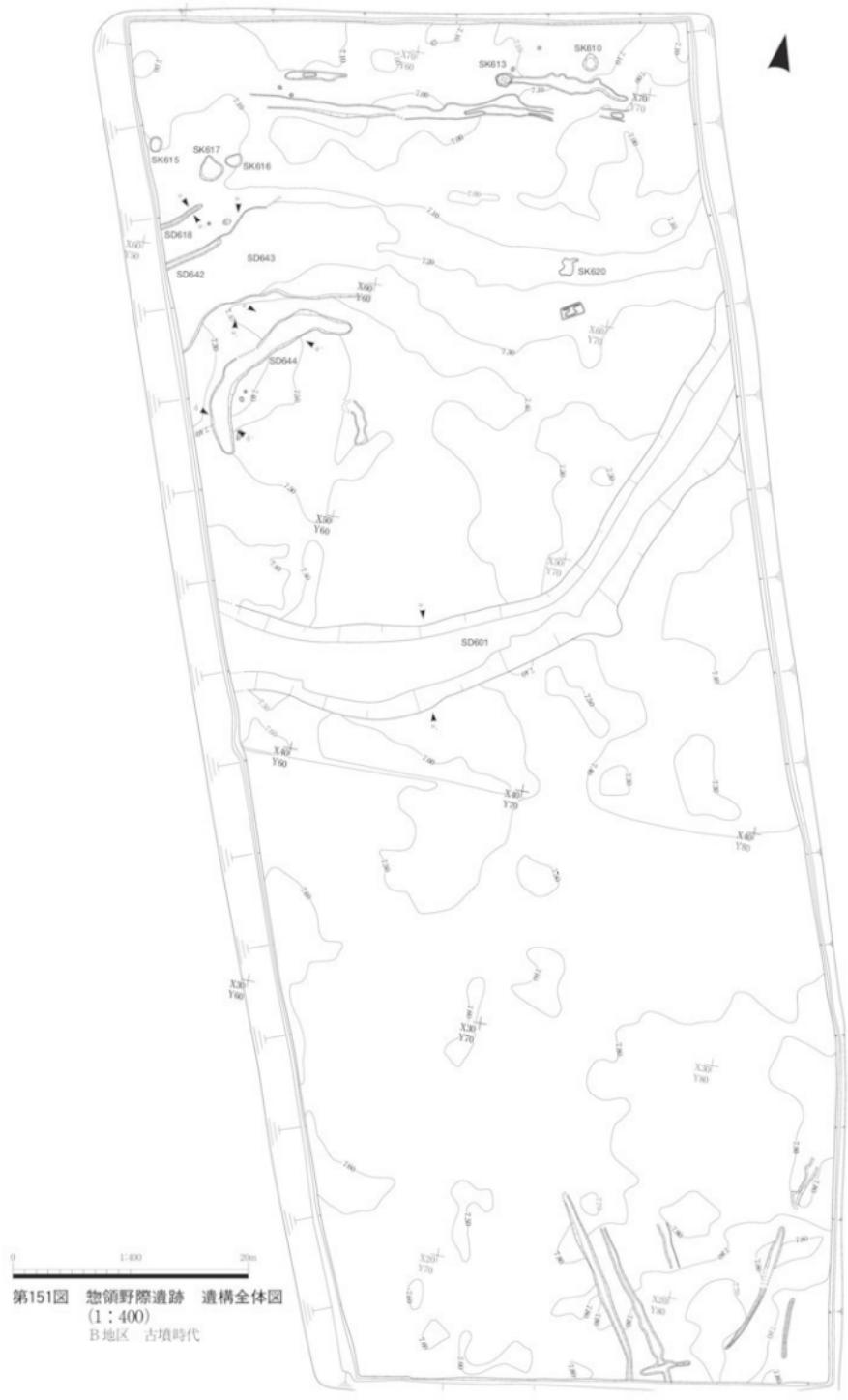
石製品は砥石（407~410）がある。

金属製品は刀子（411・412）、鎌（413）、釘（414）、鉄鍋（418・420）、羽釜（419）、煙管（417）、鉄滓（421・422）、銅錢（424~443）がある。主な金属製品は金属分析を実施している¹²⁰。刀子・鎌・釘は砂鉄原料の鍛造品である。刀子は茎、あるいは刃部が欠損する。415は茎を有する本葉形の金属製品である。片側は中央よりやや縁辺に向かって薄くなっているが、一方はやや厚く刃部を形成していないようである。形状から、槍状の金属製品かと推察したが、両の左右の角度が違うので、両刃の刀子の可能性もある。416は分析結果によれば、基部は厚さ約1mmの板を丸めて筒状にし、尖端部分は丸棒をヘラ状につぶして曲げてある。形状から轆轤カンナの指摘を受けている。先端の曲がった部分を木地に当てる削たと推定しているが、木地椀を削る轆轤砲は強度を必要とする工具であるため、基部がソケット式では強度に問題があると考える。しかし、射水市白石遺跡の出土例¹²¹では中空部分に芯持ち丸木の柄を差し込んだ状態で出土した金属製品を鉢として報告している例もある。417は煙管の雁首である。418~420は鉄鍋・羽釜の破片である。418は底部片で湯口の痕跡が残り、SE459出土鉄鍋と同様に、外側全体にベンガラが観察される。419は羽釜の鋲部分、420は鍋の体部片か。SE459出土のものと合わせてこの4点は、分析結果から共通の素材が使用された可能性が高いとされている。銅錢は「開元通寶」から「寛永通寶」まで12種類出土している。427は南唐の渡来銭で、篆書体の「唐國通寶」である。「淳化元寶」から「紹聖元寶」までは北宋の渡来銭である。443の「寛永通寶」は、背面に「文」の字が鋳込まれた通称「文銭」である。

119 石川中了: 2004「唐宋人物像（櫻）について—整復修復技術上資料の紹介を兼ねて—」『紀要・瀬戸考古学研究』第7号 財团法人瀬戸市文化振興財团
120 第二回 岩谷科学分析、2013テクノリサーチ株式会社「鉄製品等分析」
121 小林町教育委員会: 1994「小林町白石遺跡発掘調査報告書」

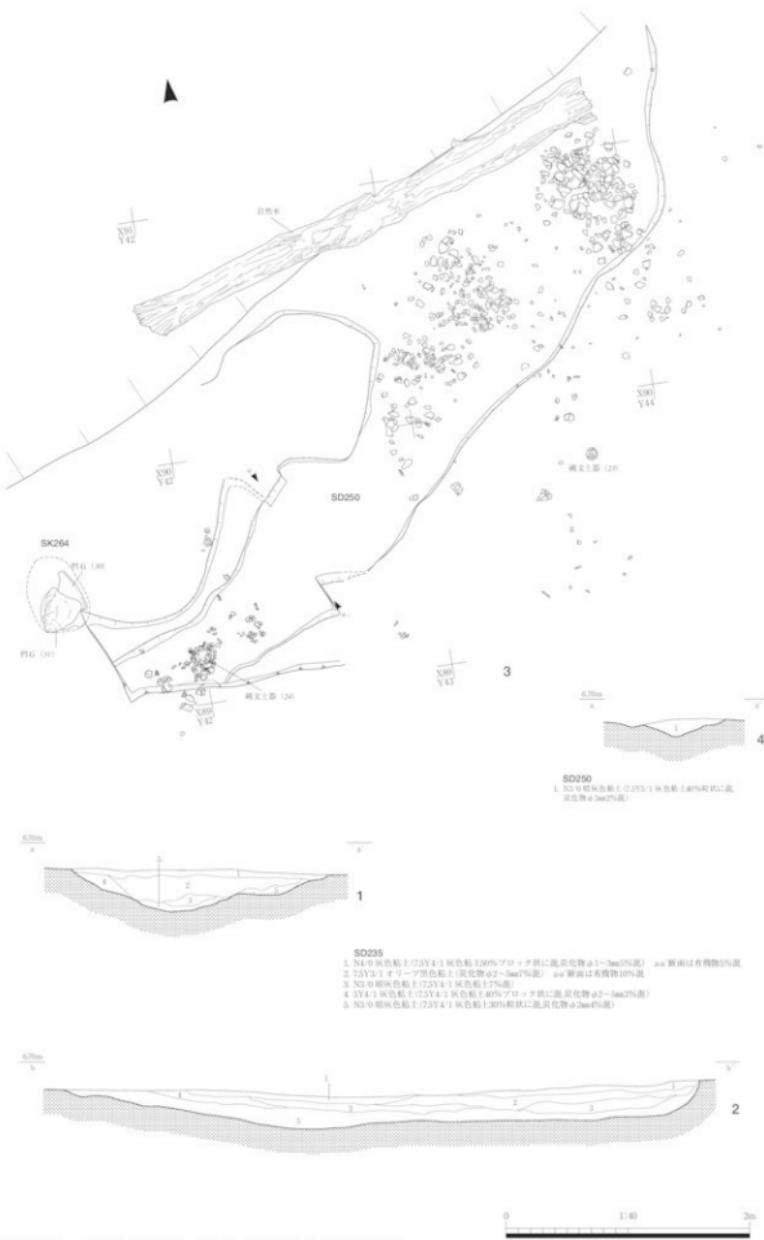


第150図 惣領野跡遺構 全体図 (1:400)
A地区 繩文・弥生時代



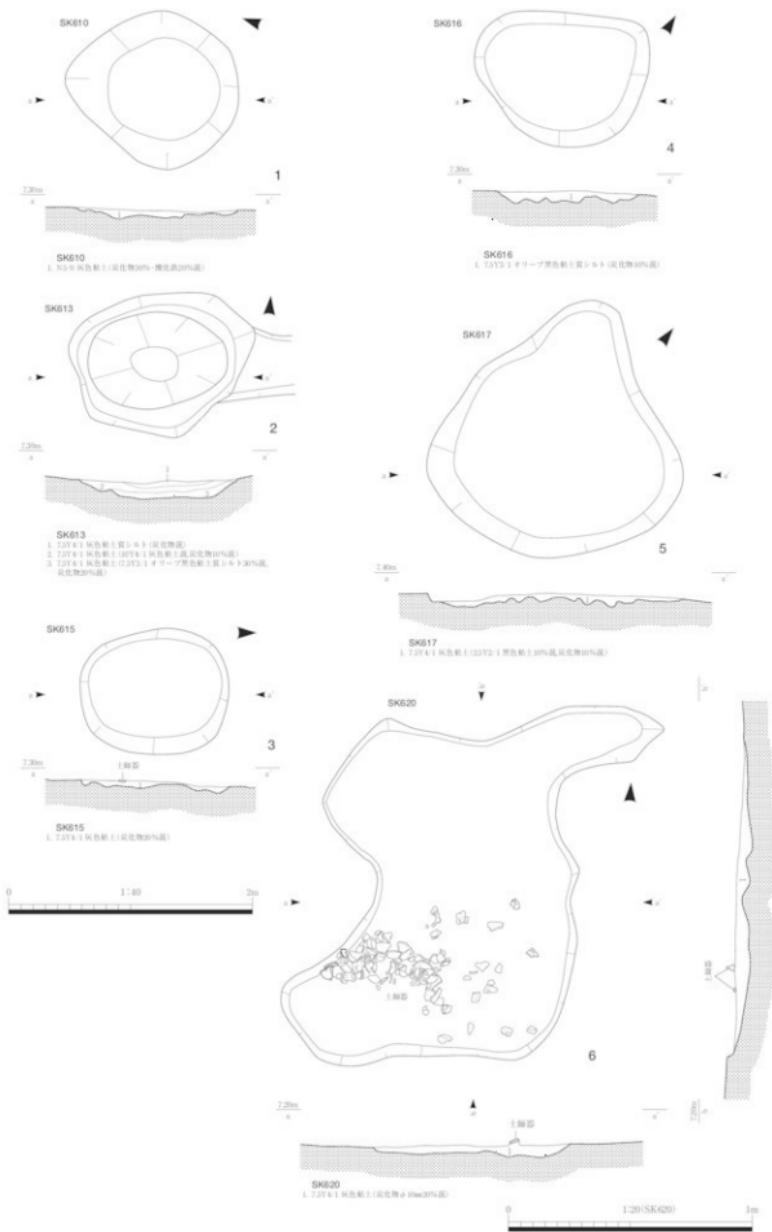
第151図 惣領野跡遺構全体図
(1:400)
B地区 古墳時代

第152図 惣領野際遺跡 繩文・弥生時代遺構実測図
SD201 SK264



第153図 惣領野跡遺跡 繩文・弥生時代遺構実測図
1・2. SD235 3. SD250・SK264 4. SD250

第154図 惣領野際遺跡 古墳時代遺構実測図
1. SD601 2. SD618 3. SD643 4・5. SD644



第155図 惣領野跡 古墳時代遺構実測図

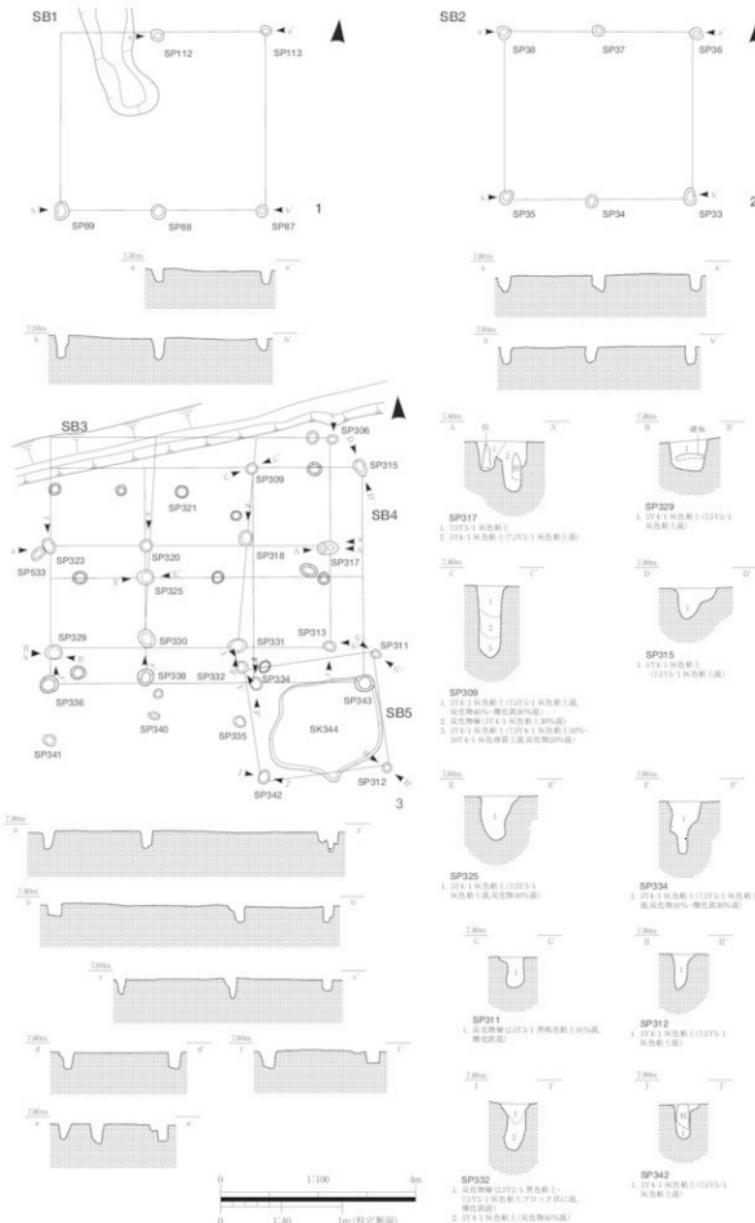
1. SK610 2. SK613 3. SK615 4. SK616 5. SK617 6. SK620



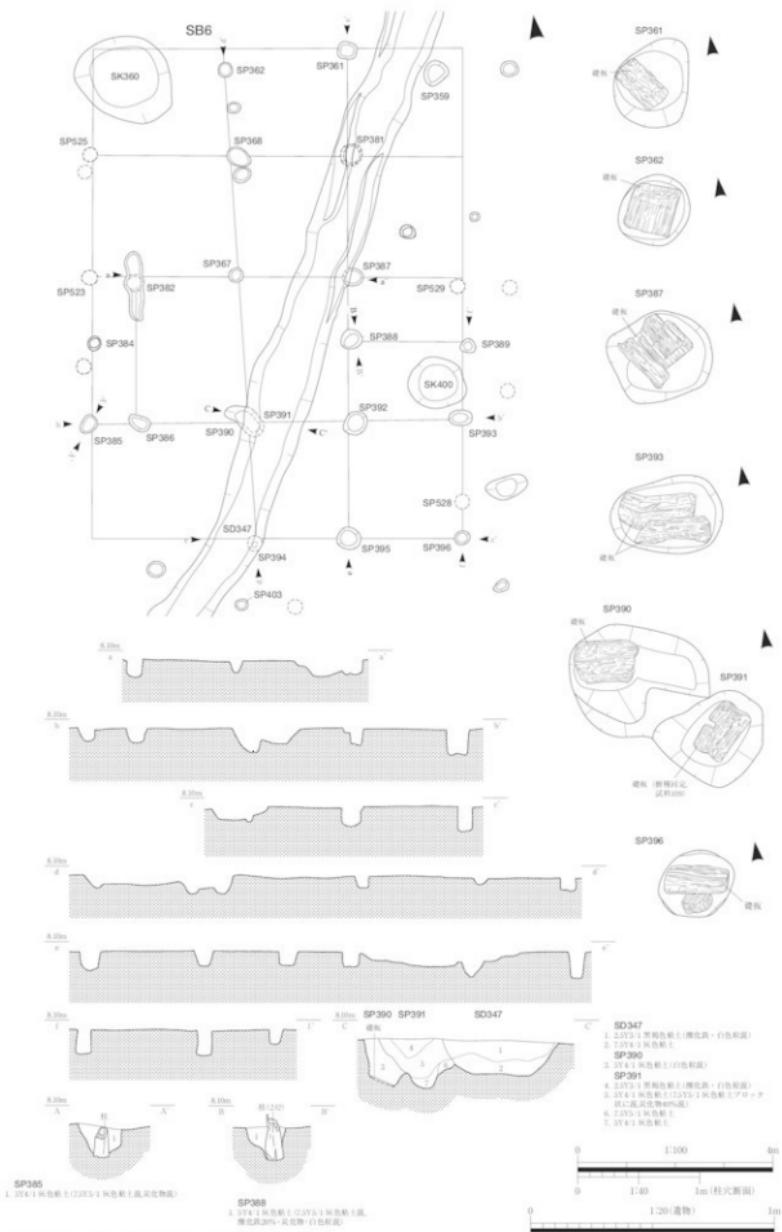
第156図 惣領野跡遺跡 遺構全体図 (1:400)
A地区 中世



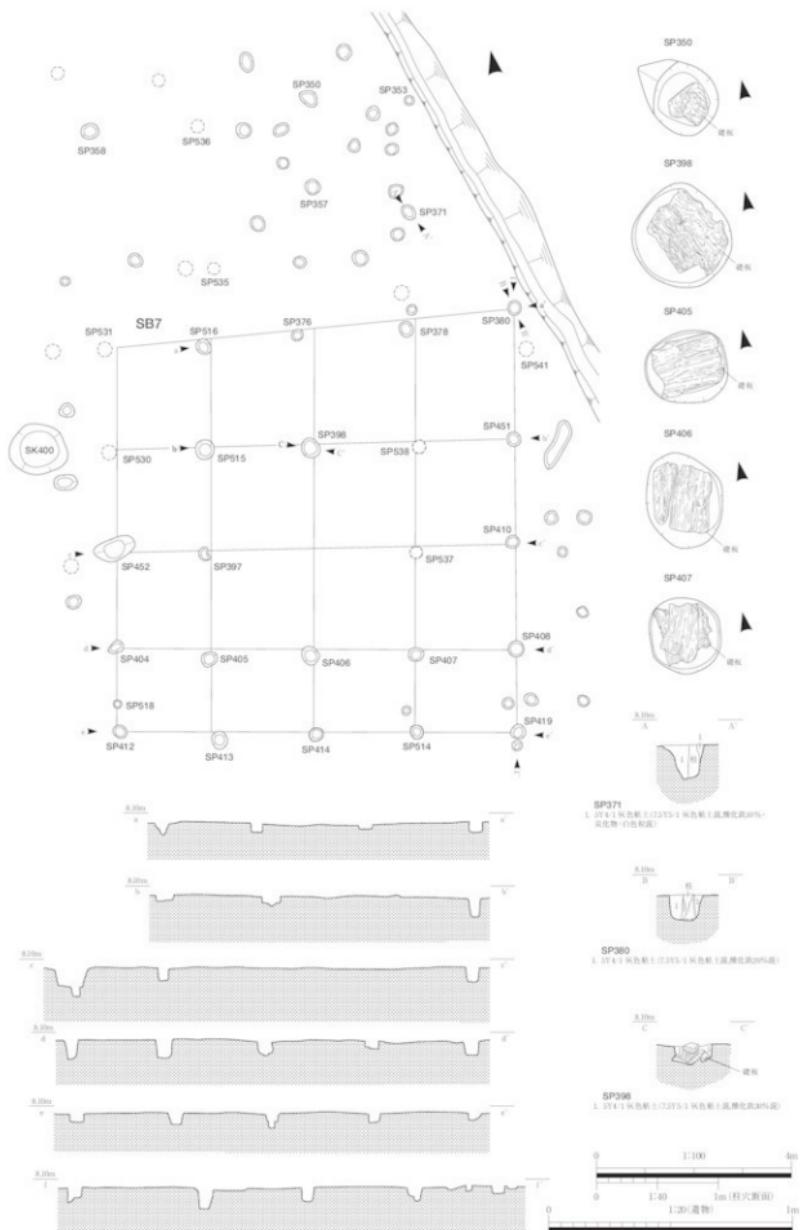
第157図 惣領野際遺跡 遺構全体図
(1:400)
B地区 中世

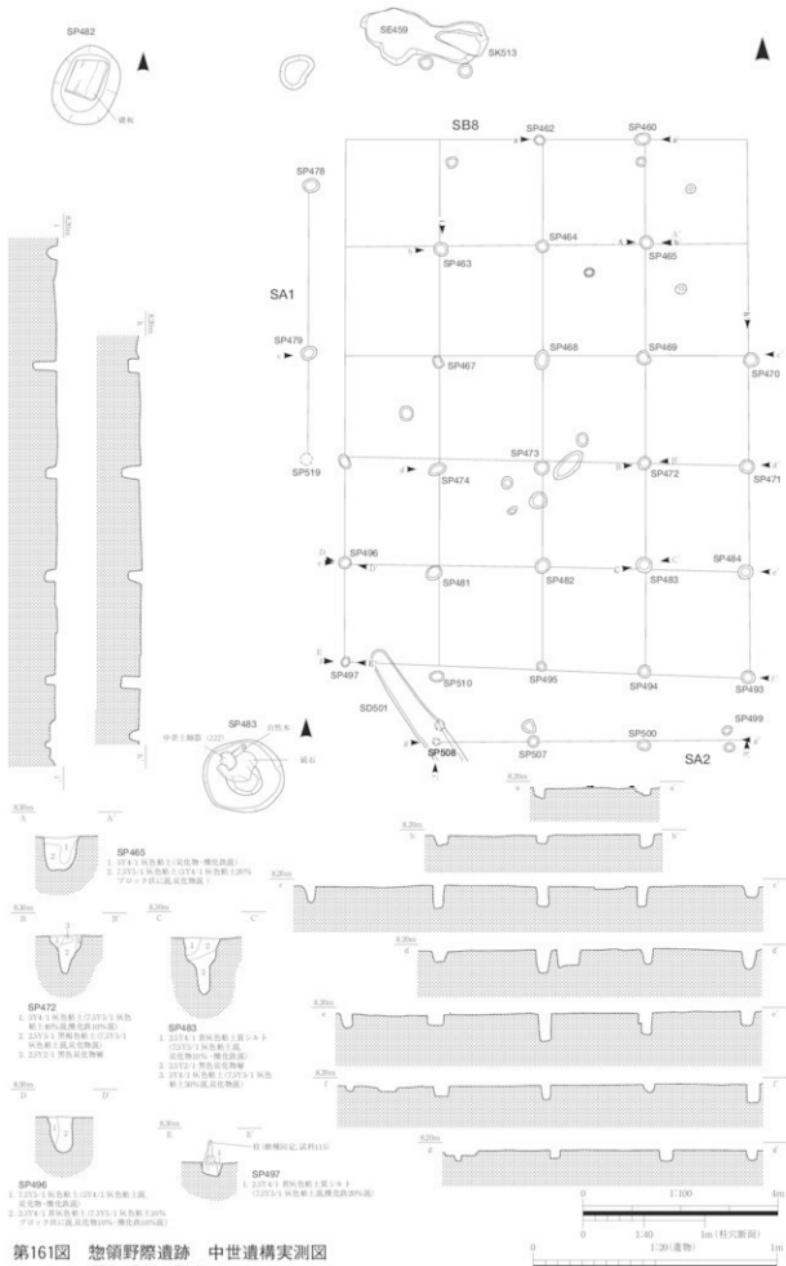


第158図 惣領野跡遺跡 中世造構実測図
1. SB1 2. SB2 3. SB3-SB5

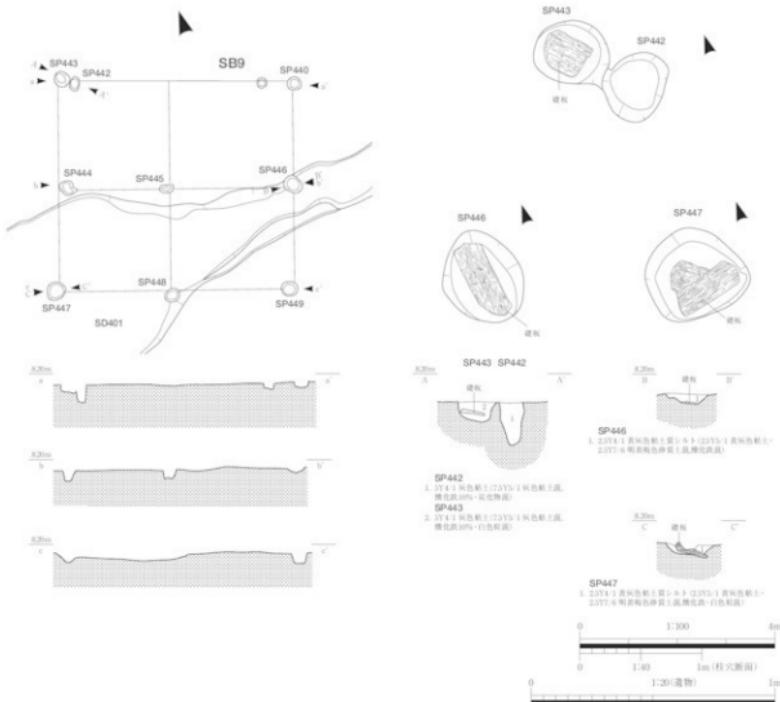


第159図 惣領野際遺跡 中世遺構実測図
SB6

第160図 惣領野跡遺跡 中世遺構実測図
SB7



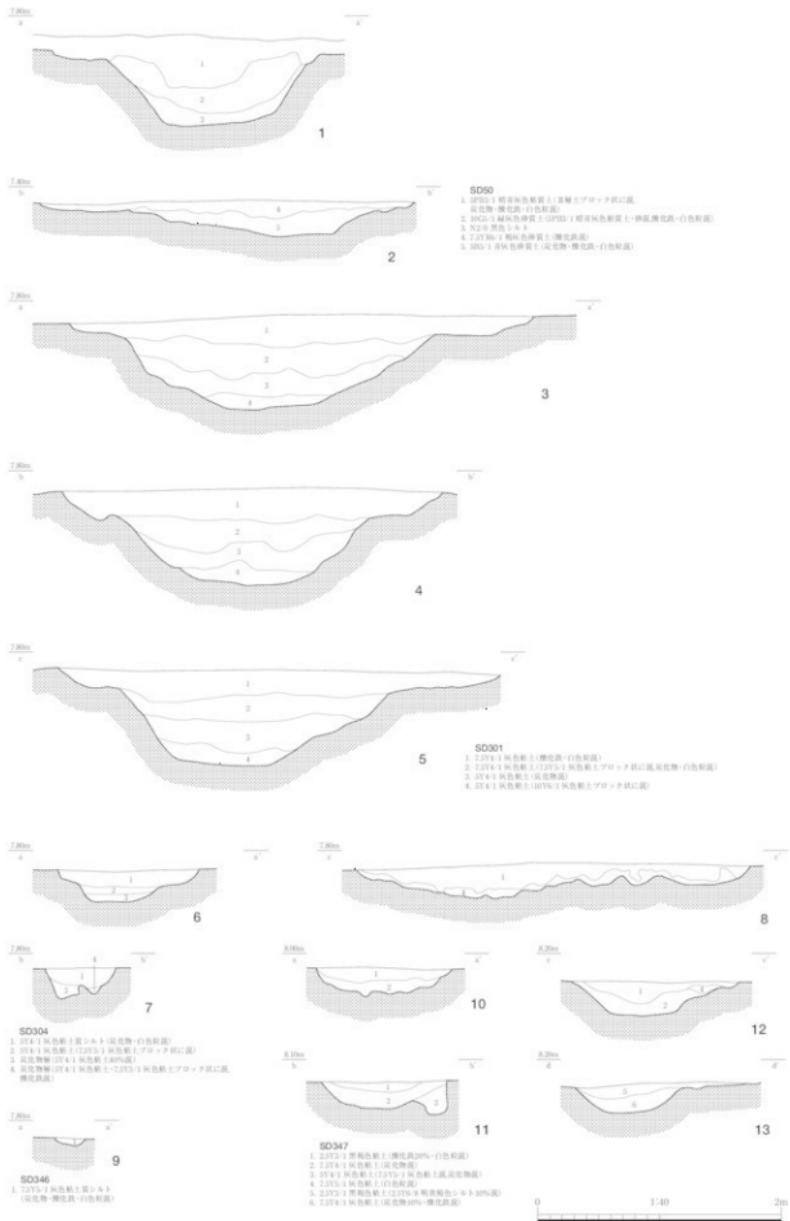
第161図 惣領野際遺跡 中世遺構実測図
SB8 SA1・SA2

第162図 惣領野跡遺跡 中世遺構実測図
SB9

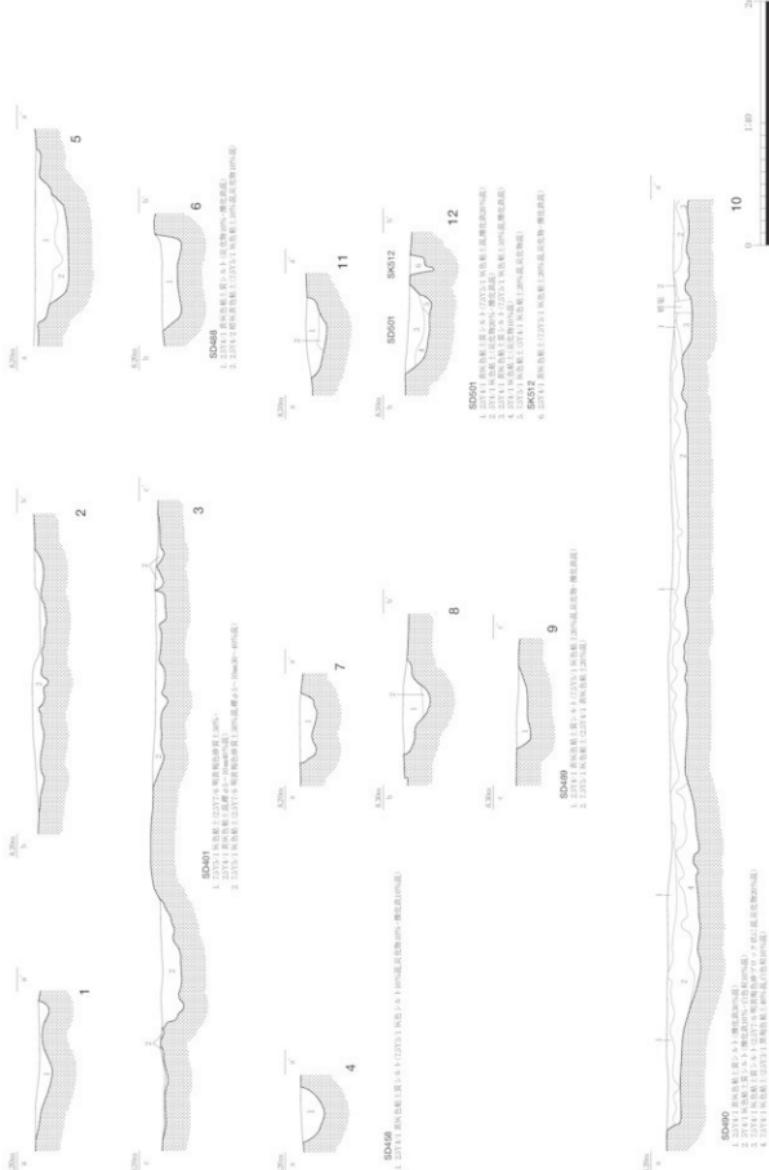
第163図 物領野跡遺跡 中世遺構実測図

1, SD1 · SD30 2 · 3, SD1 4 ~ 6, SD30 7 ~ 9, SD40

2 遺構と遺物

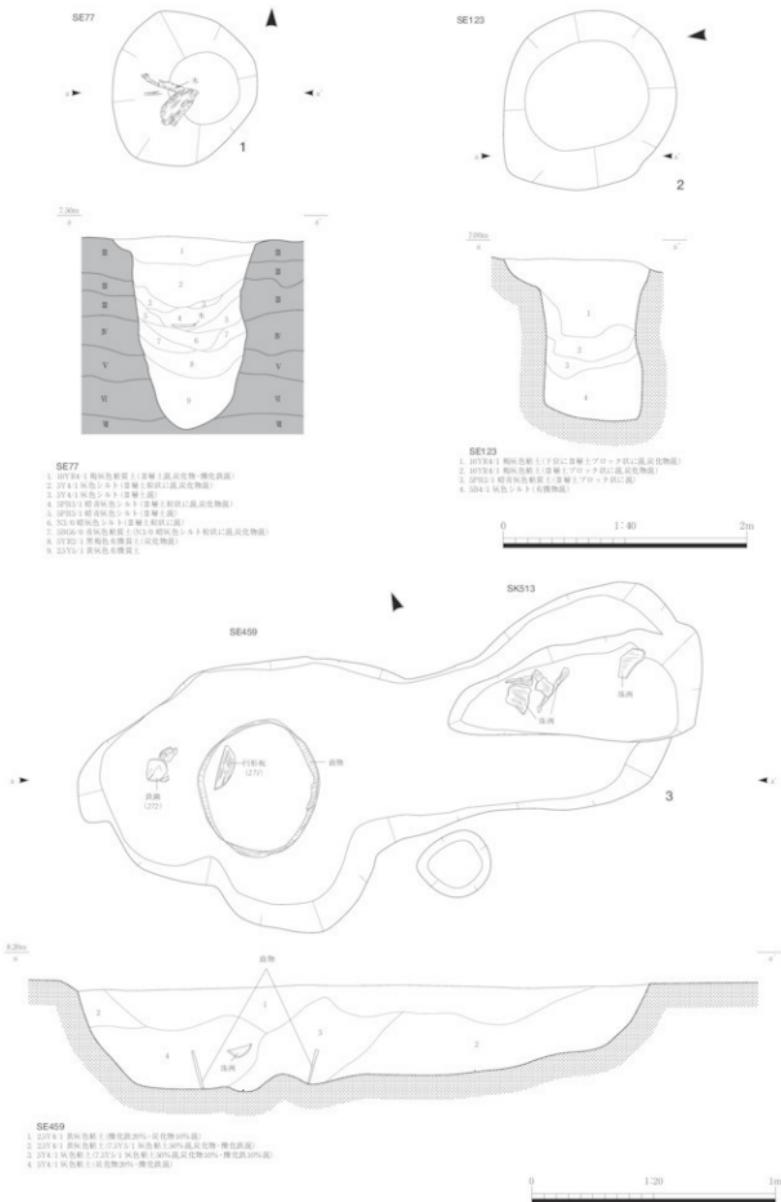


第164図 惣領野跡遺跡 中世遺構実測図
1・2. SD50 3~5. SD301 6~8. SD304 9. SD346 10~13. SD347

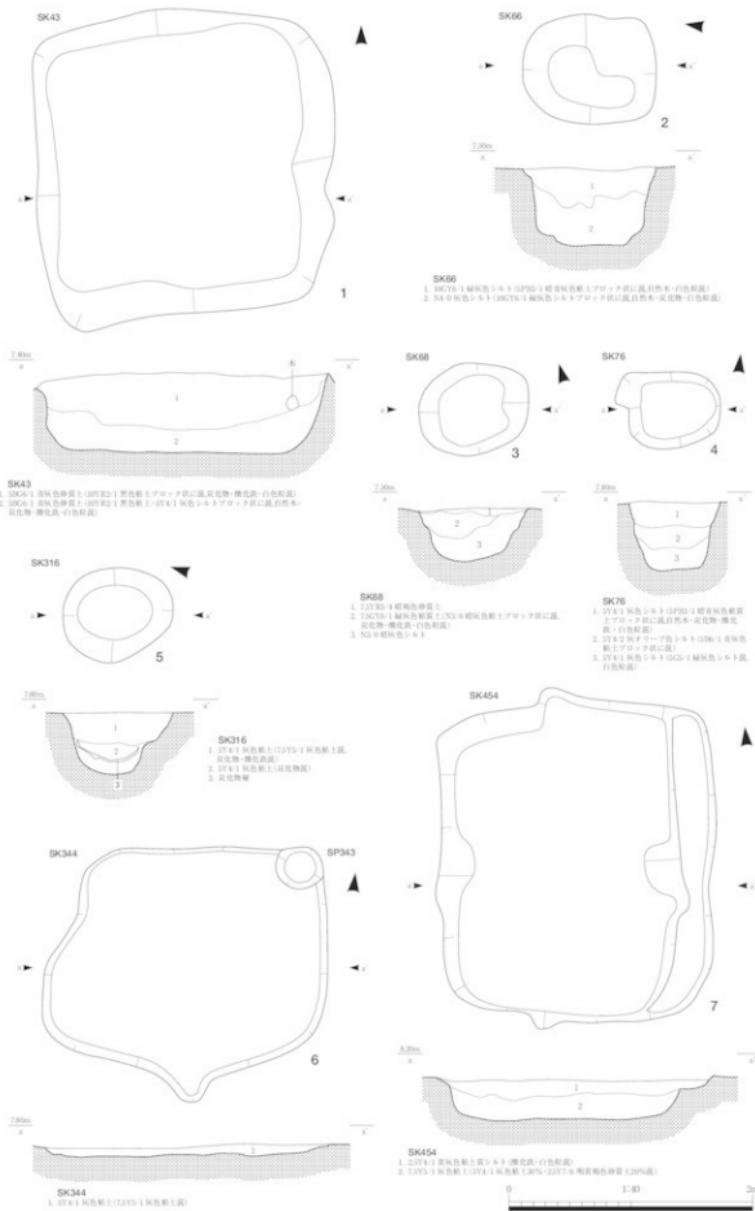


第165図 惣領野跡遺跡 中世遺構実測図

1~3. SD401 4. SD458 5~6. SD488 7~9. SD489 10. SD490 11. SD501
12. SD501・SK512

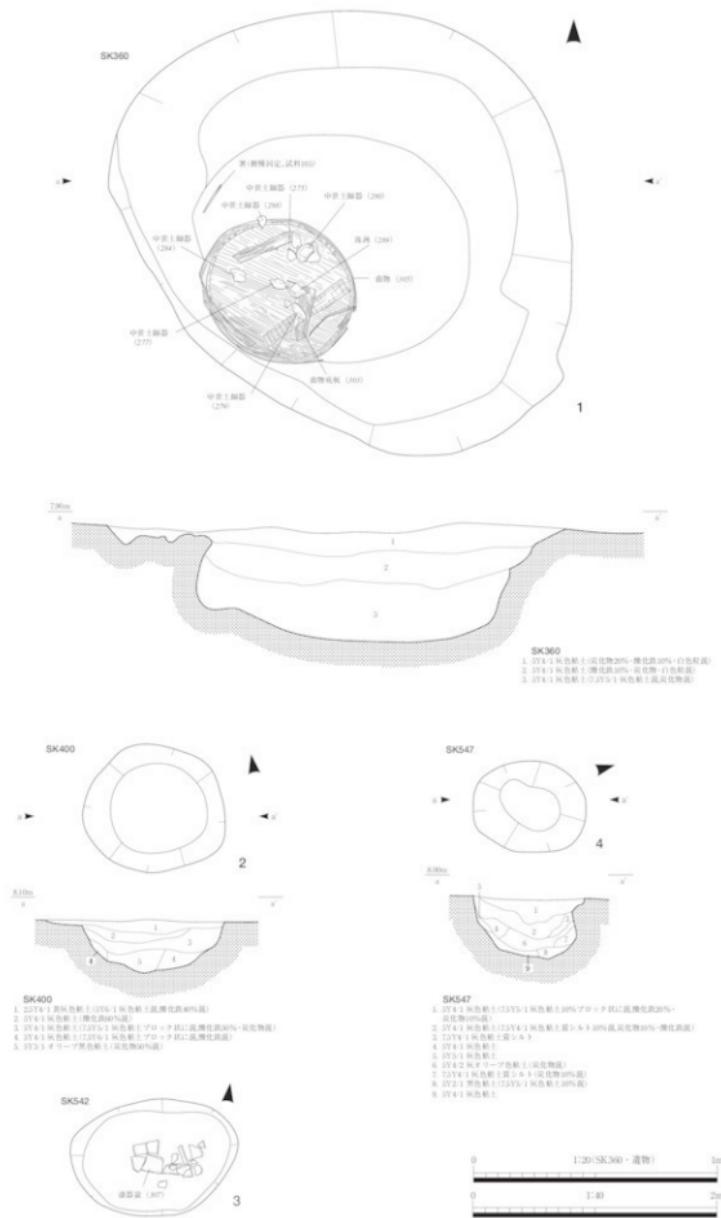


第166図 惣領野際遺跡 中世遺構実測図
1. SE77 2. SE123 3. SE459・SK513

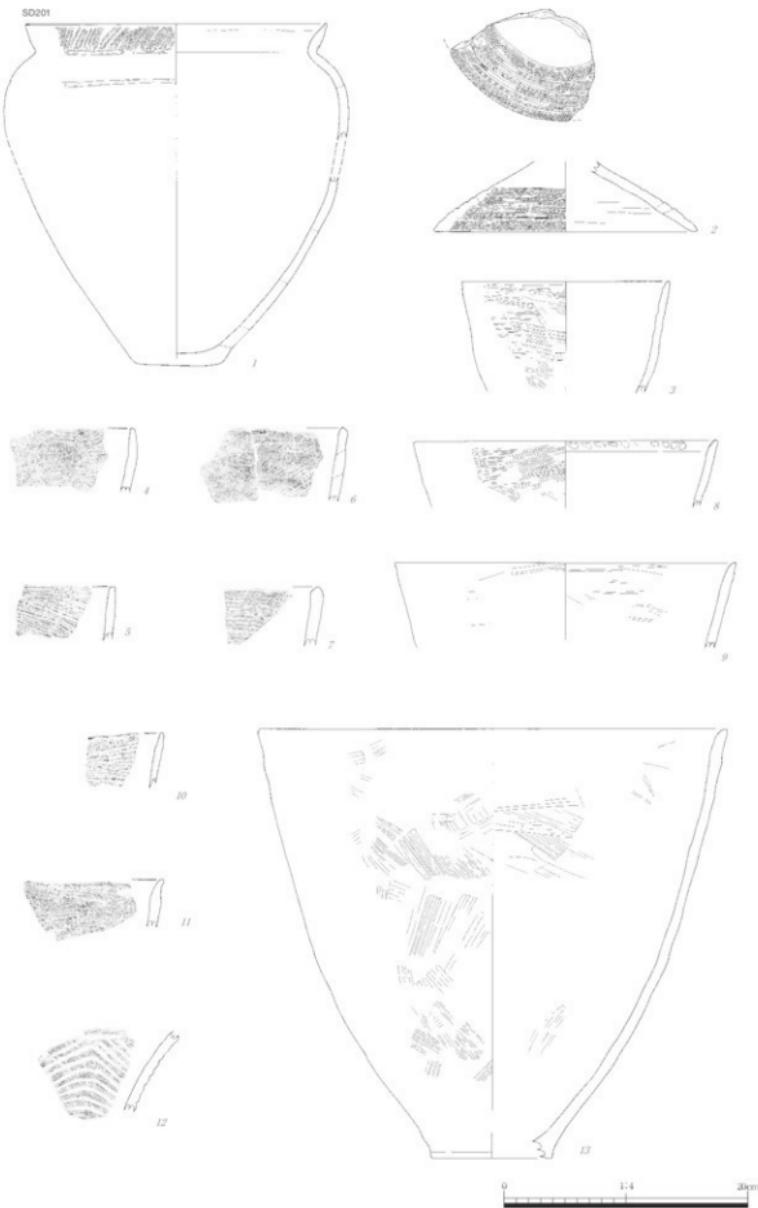


第167図 惣領野際遺跡 中世遺構実測図

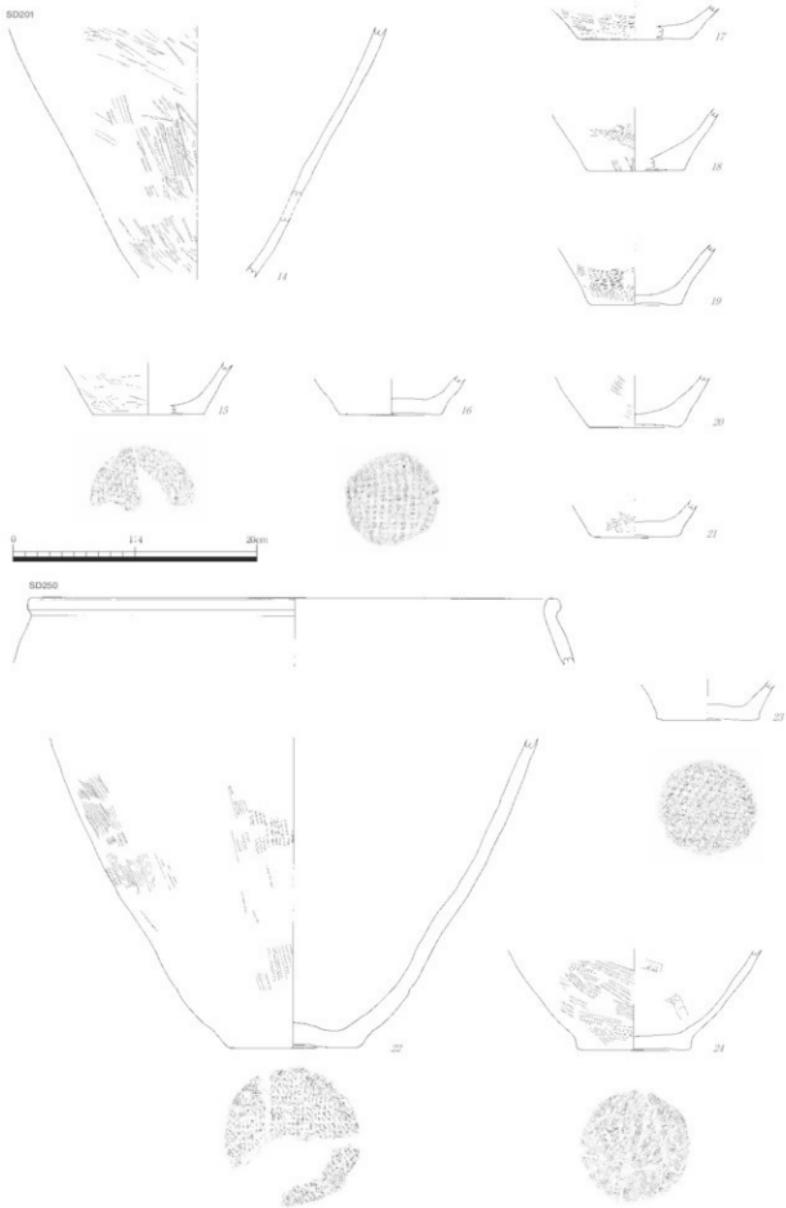
1. SK43 2. SK66 3. SK68 4. SK76 5. SK316 6. SK344 7. SK454



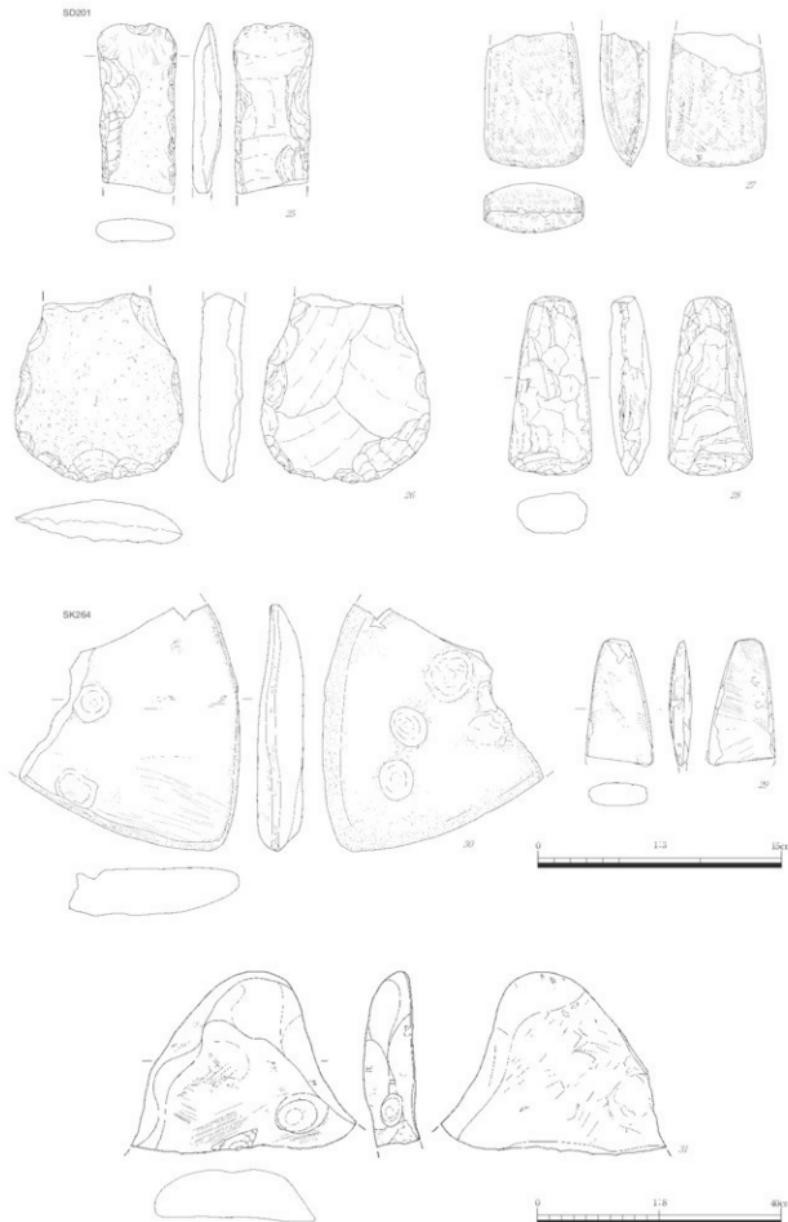
第168図 惣領野跡遺構 中世遺構実測図
1. SK360 2. SK400 3. SK542 4. SK547



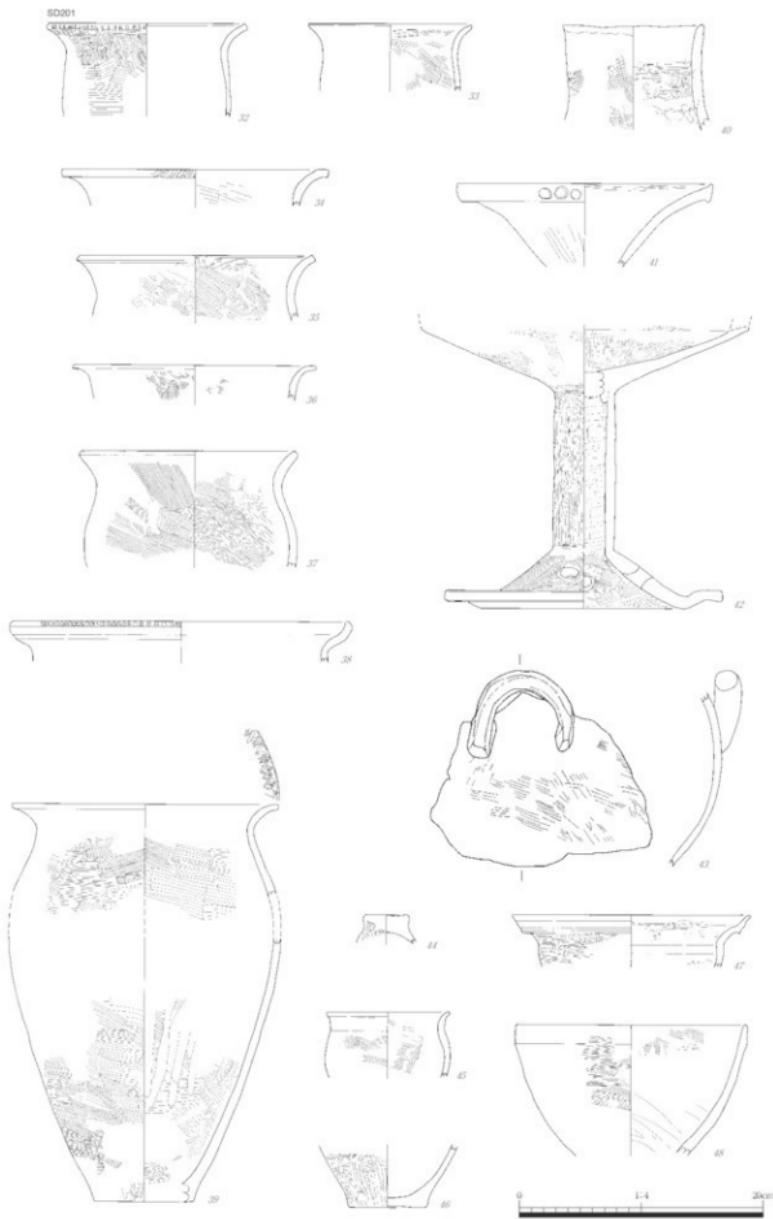
第169図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD201



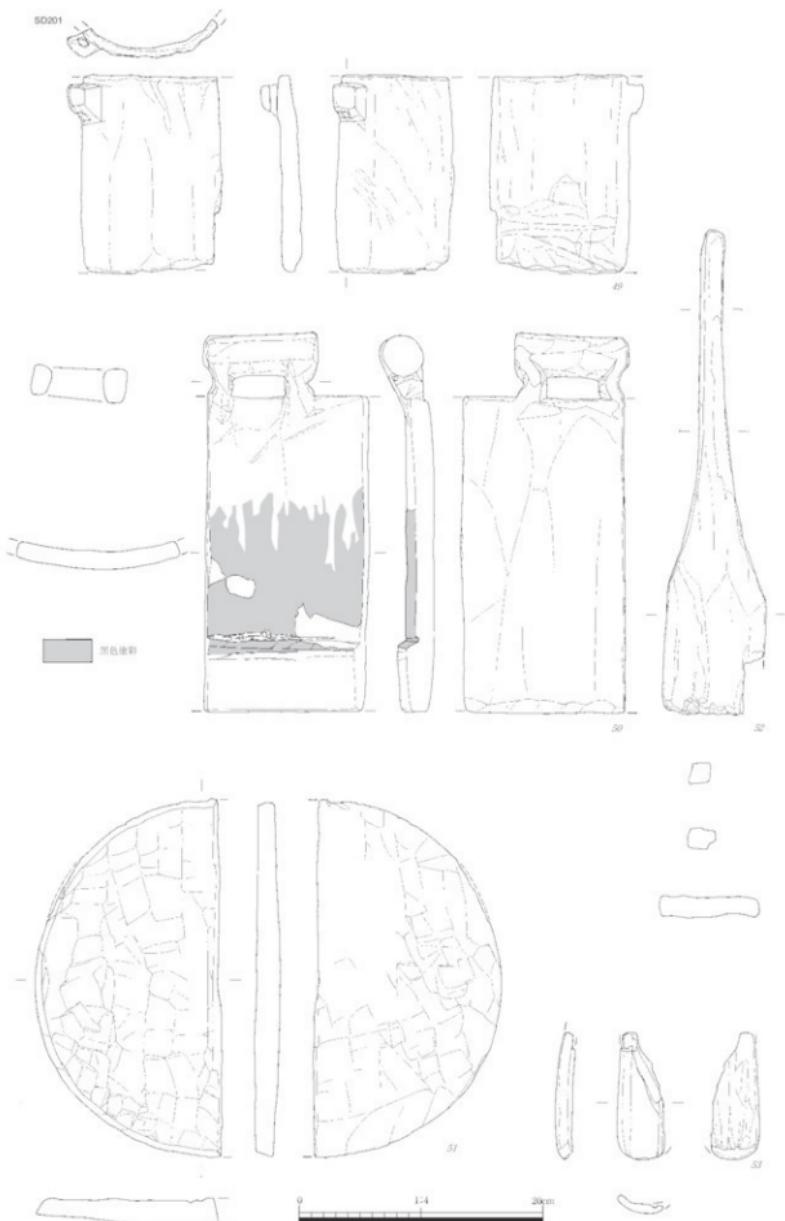
第170図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD201(14~21) SD250(22~24)



第171図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (25~29 1/3, 30・31 1/8)
SD201(25~29) SK264(30・31)

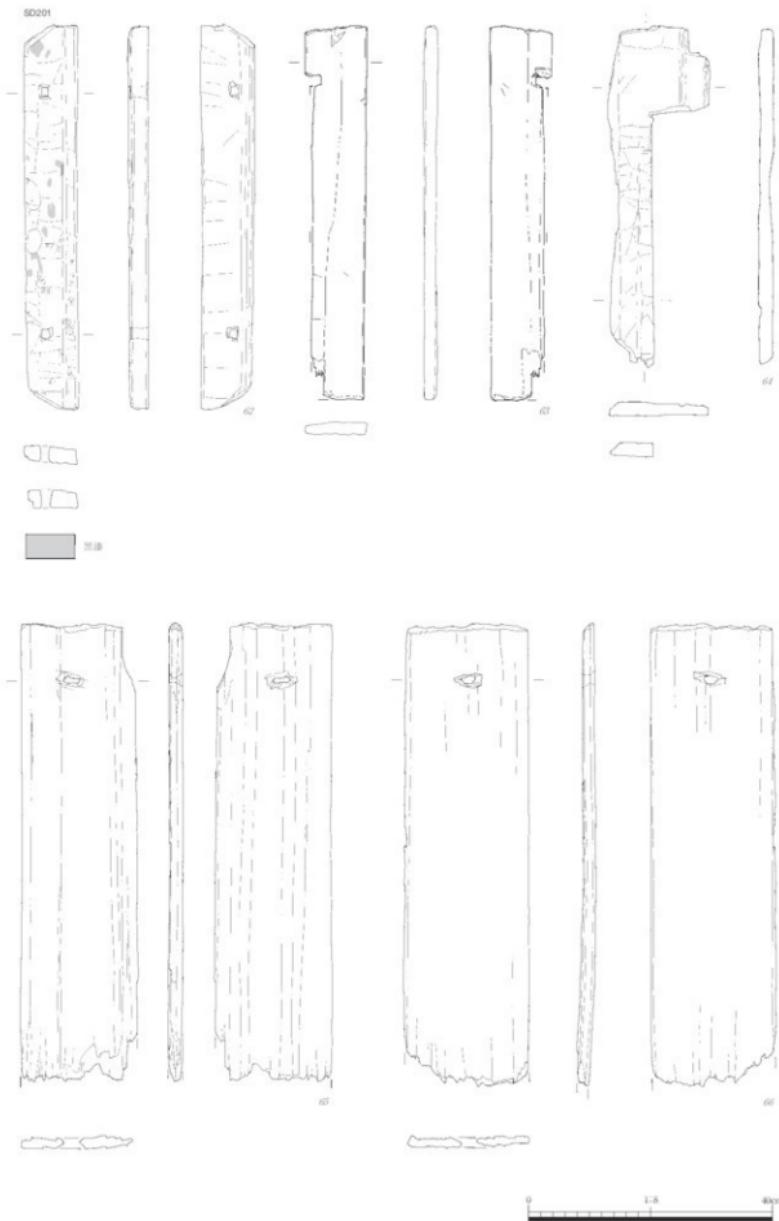


第172図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD201



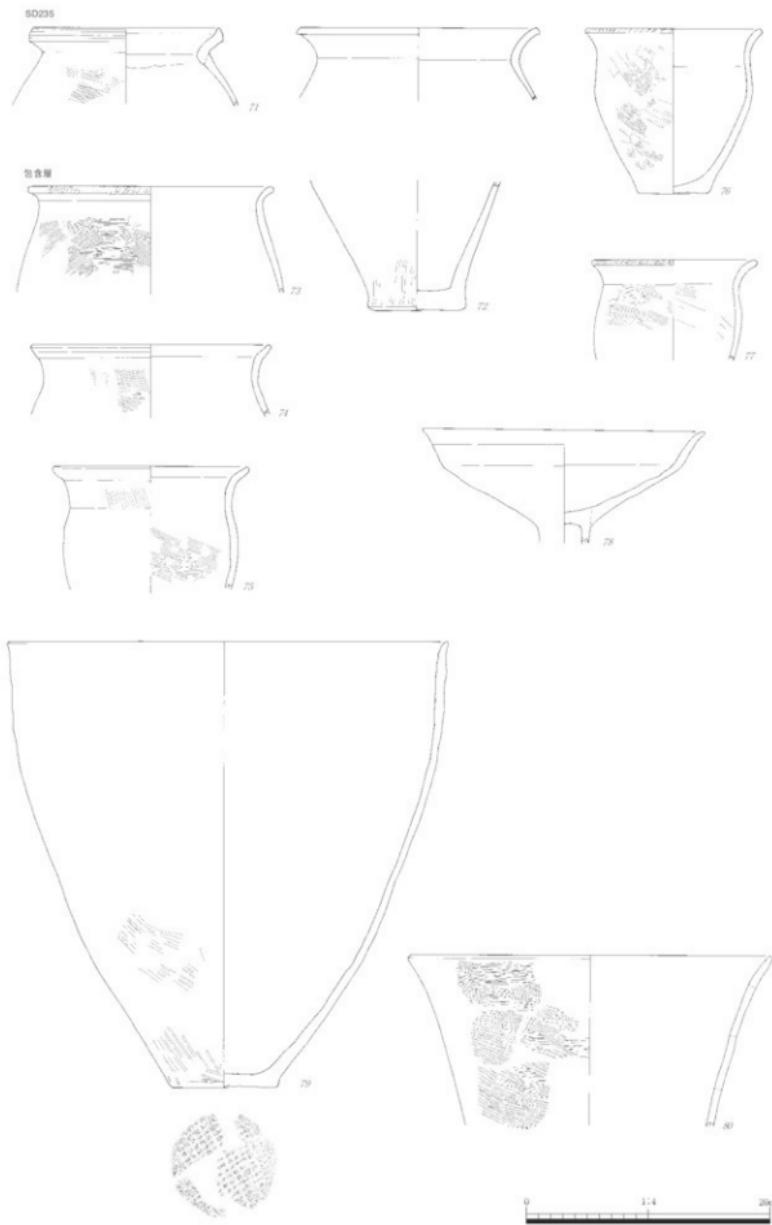
第173図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD201

第174図 物領野跡遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD201

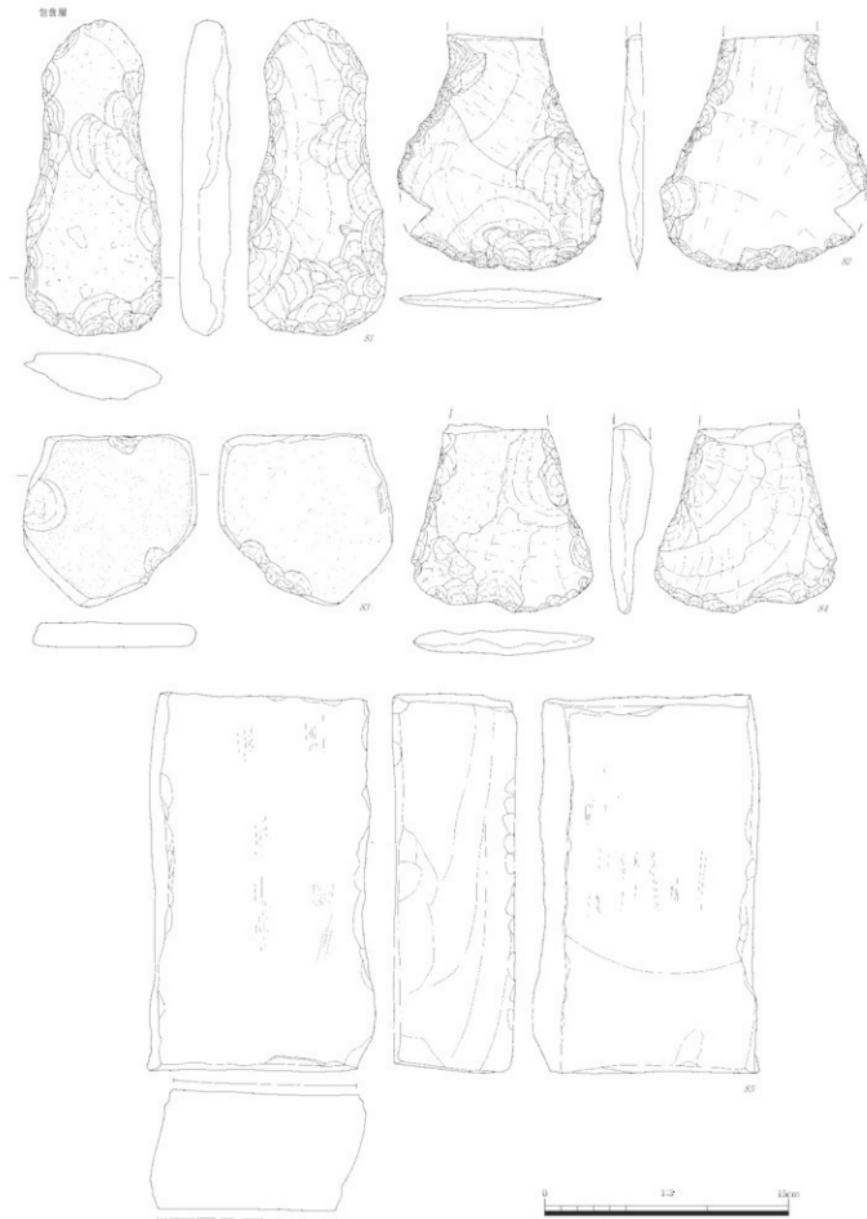


第175図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD201

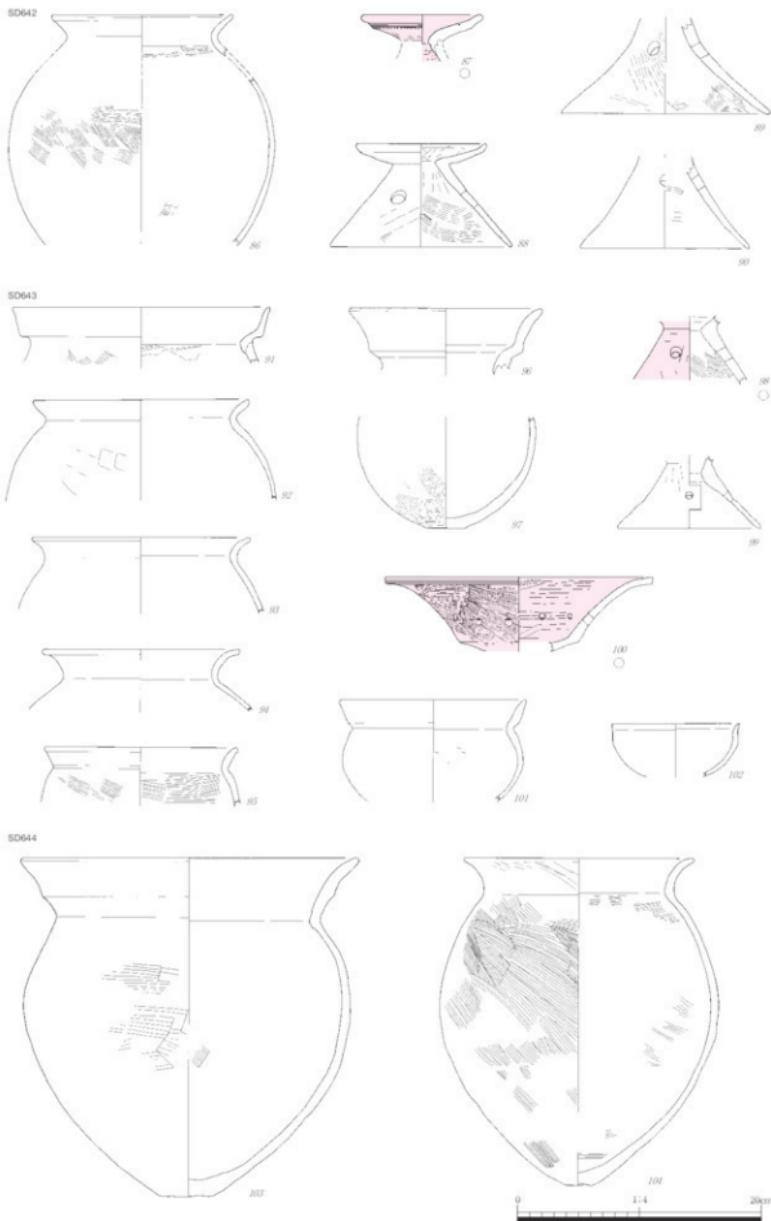
第176図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD201



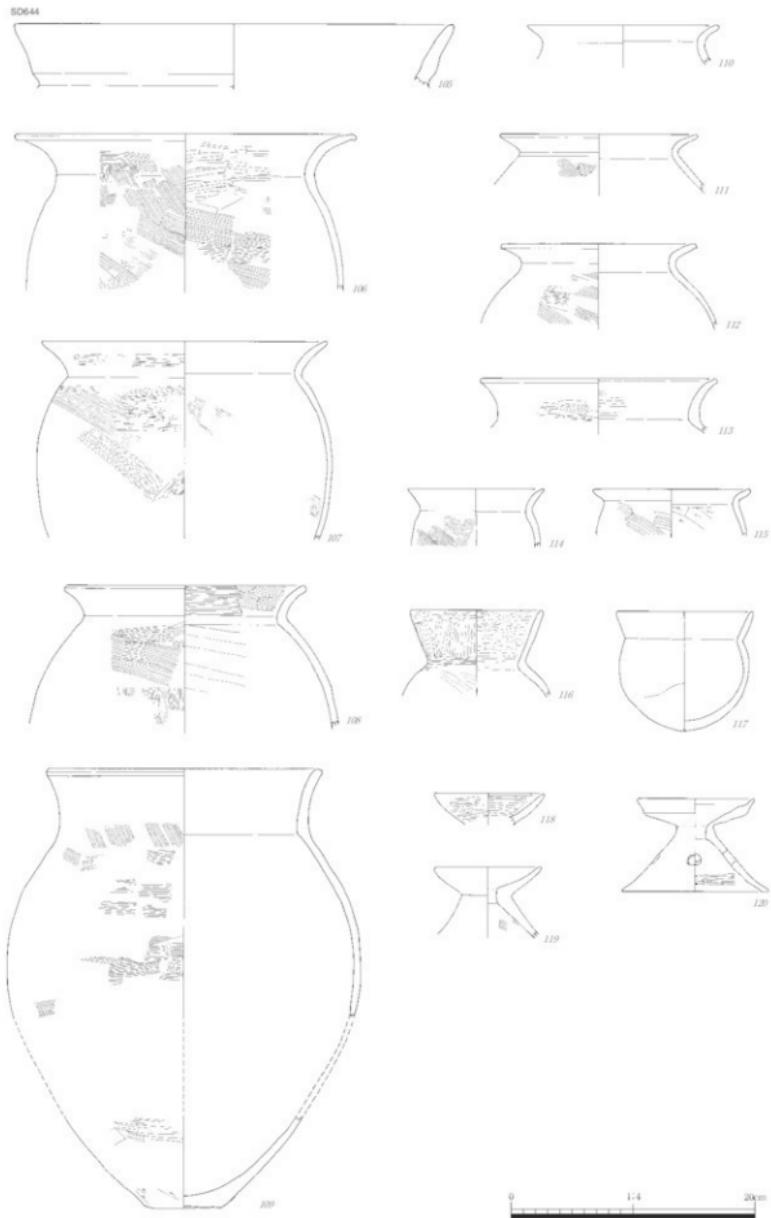
第177図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD235(71・72) 包含層(73~80)



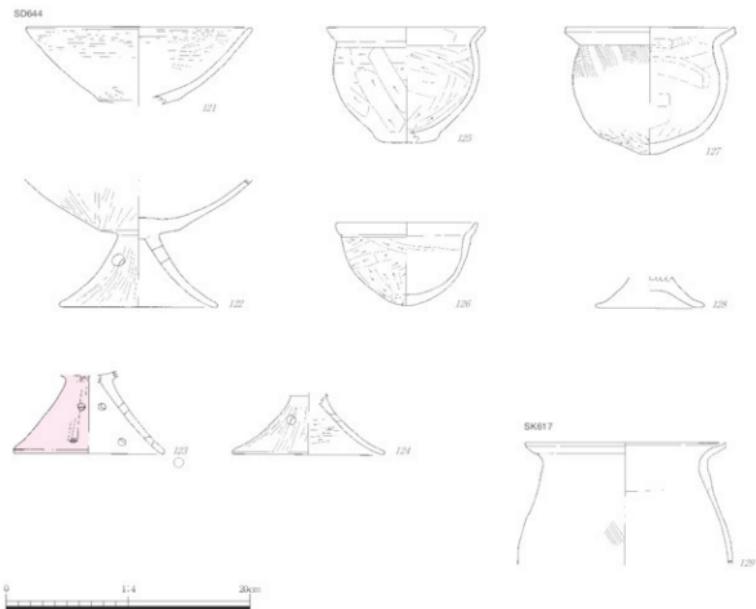
第178図 惣領野跡 遺物実測図 (1/3)
包含層



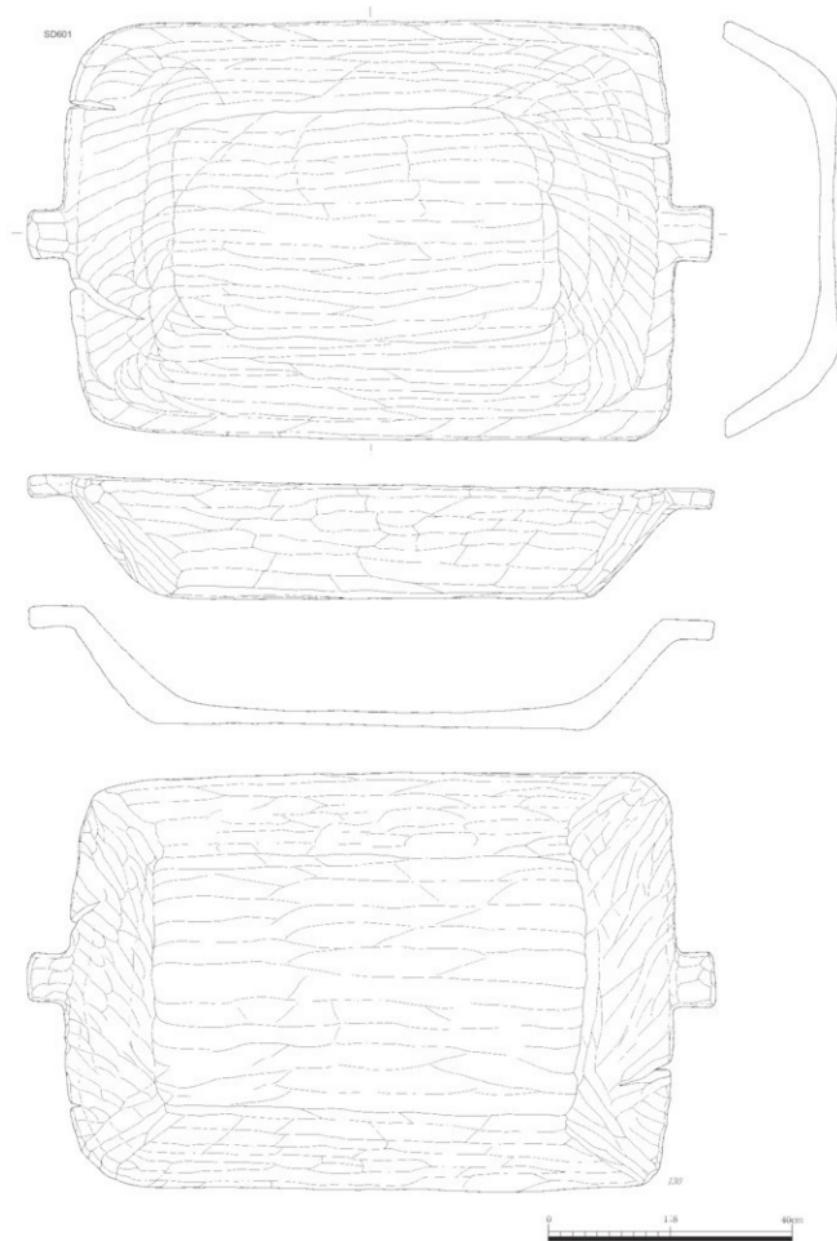
第179図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD642(86~90) SD643(91~102) SD644(103・104)



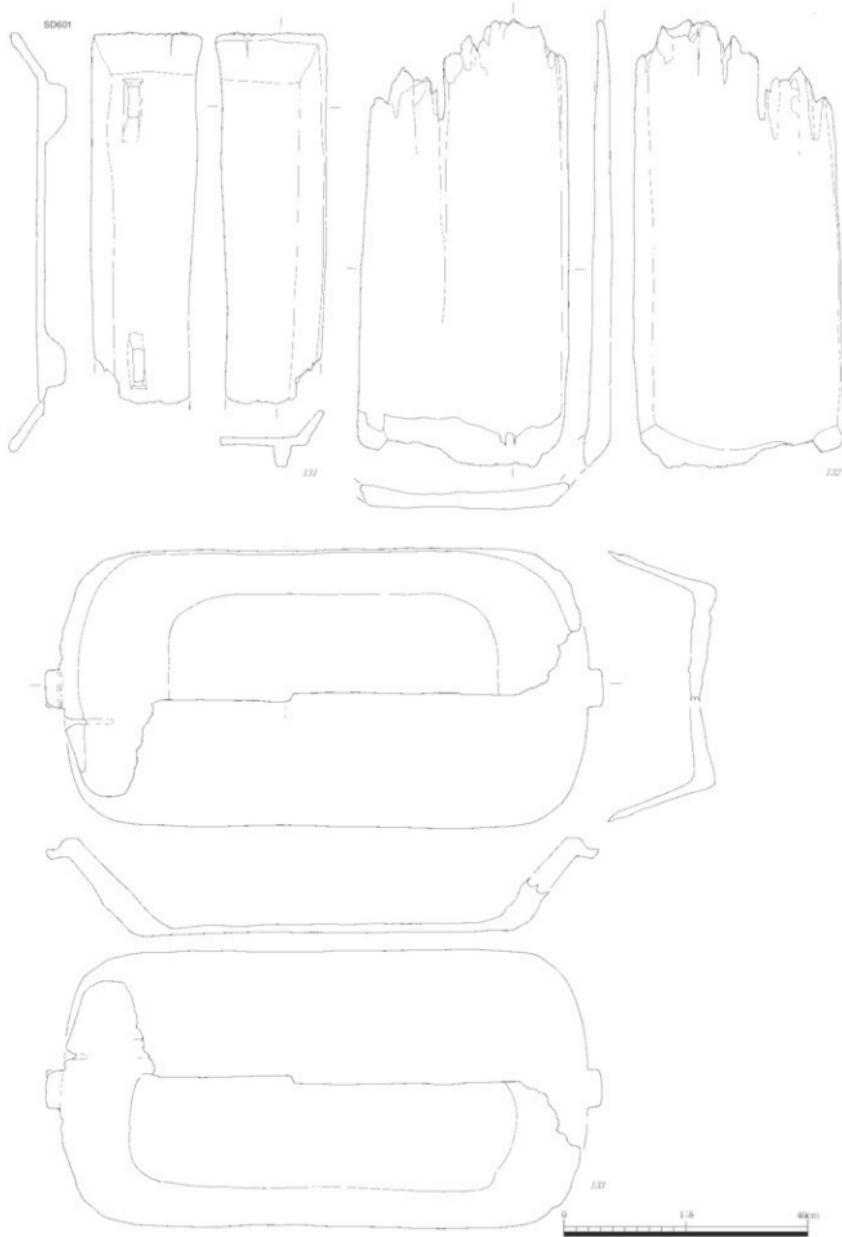
第180図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD644



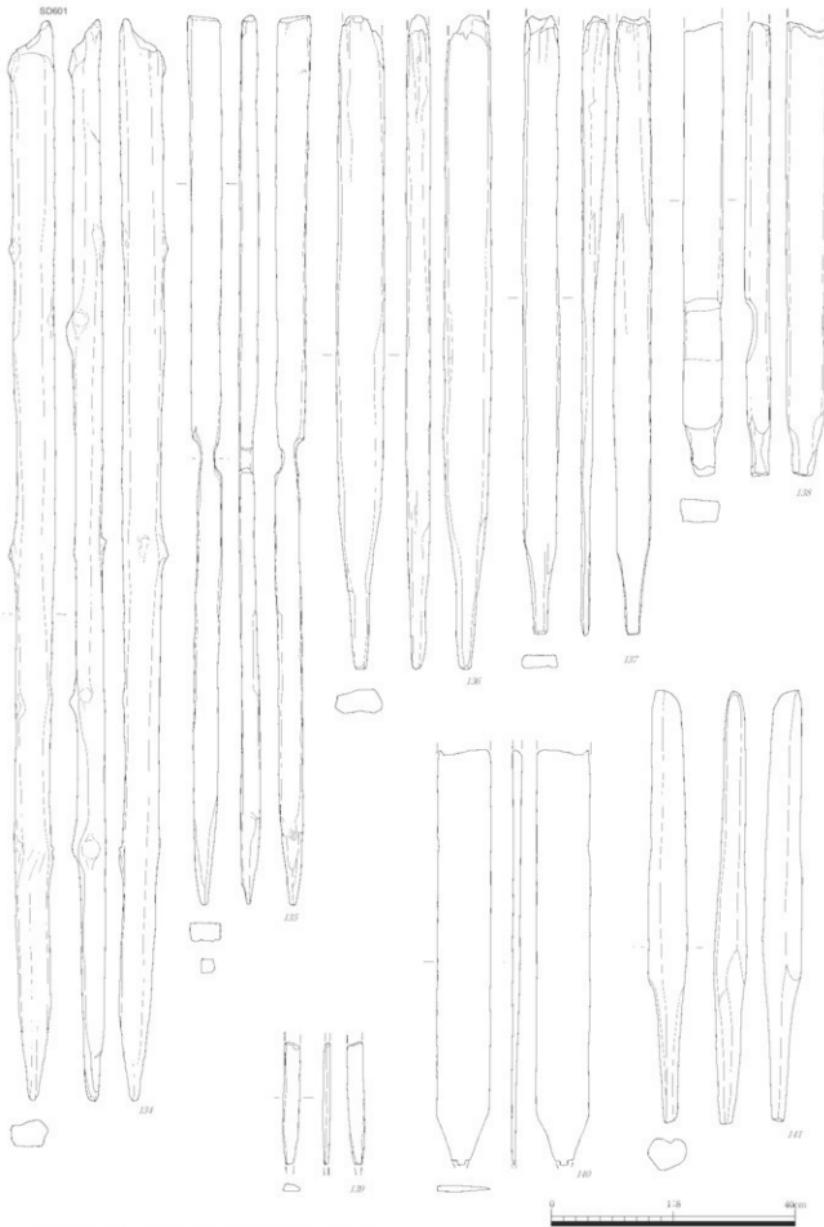
第181図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
SD644(I21~I28) SK617(I29)

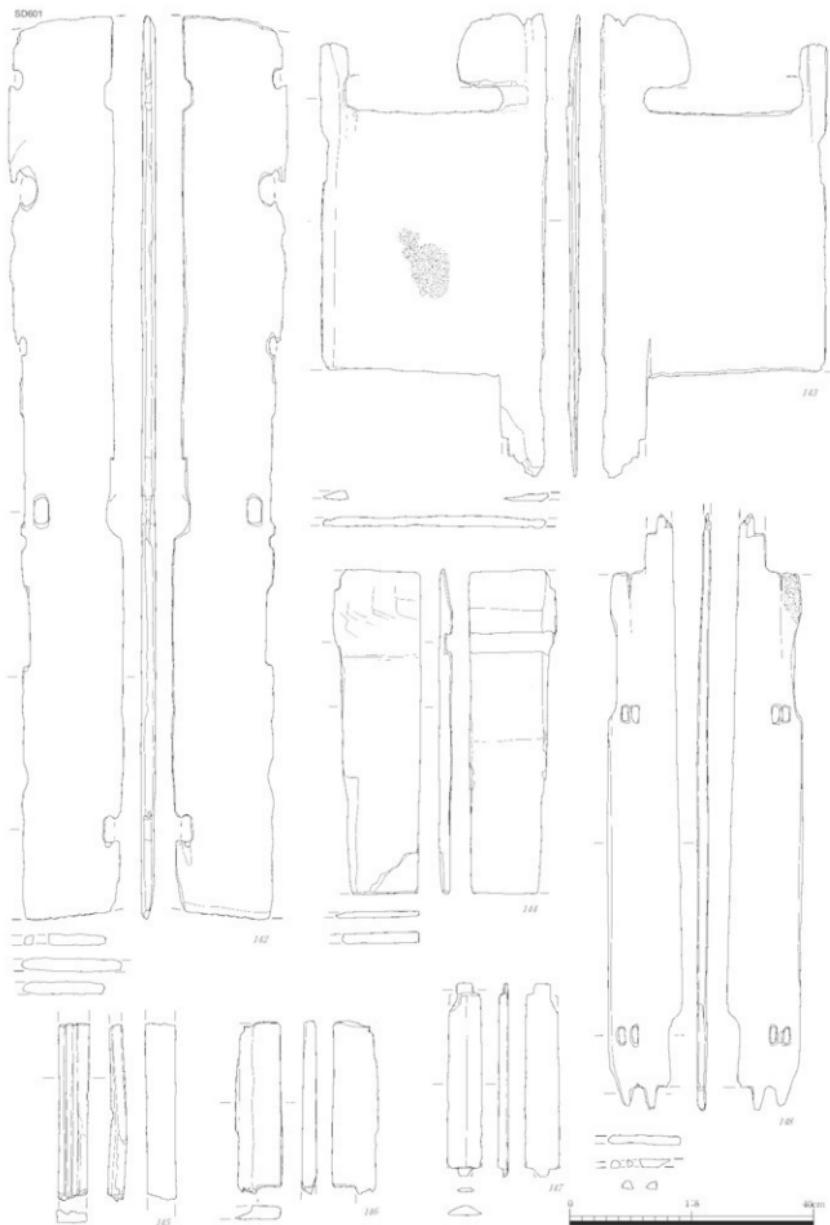


第182図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD601

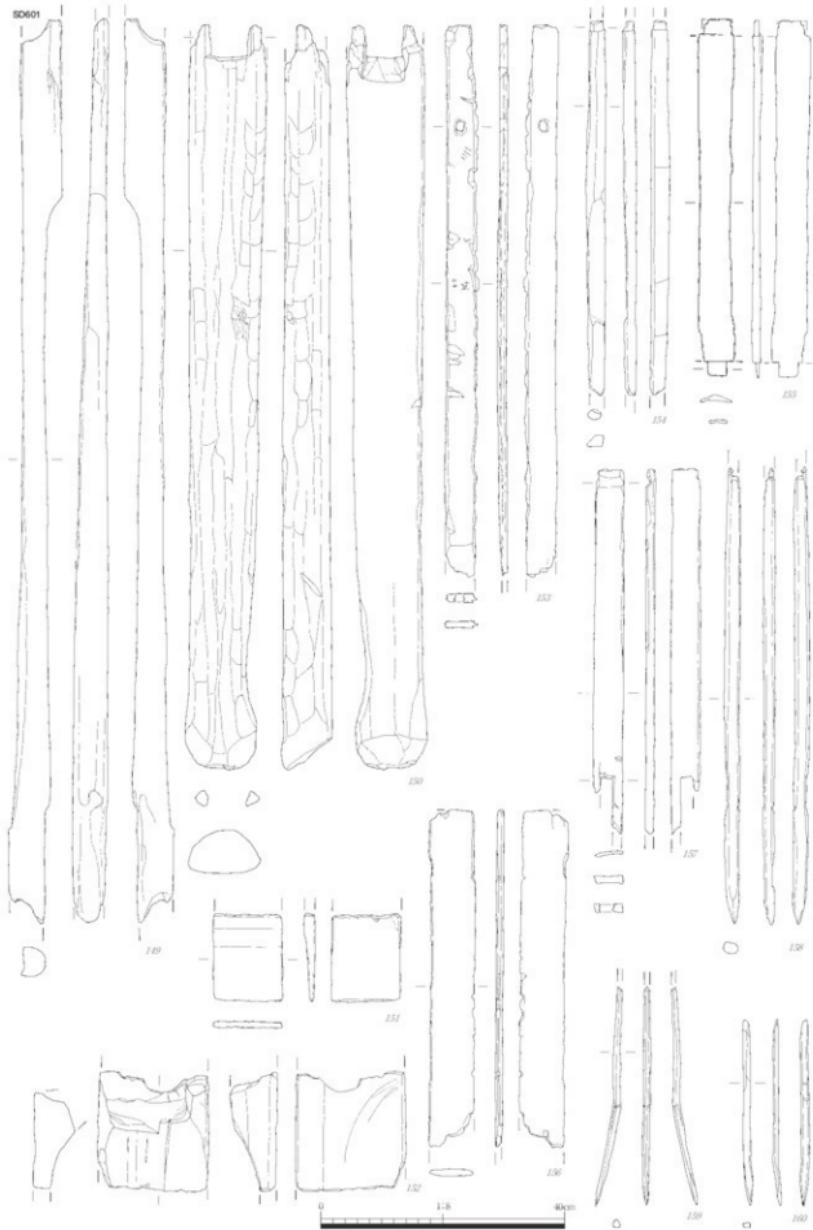


第183図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD601

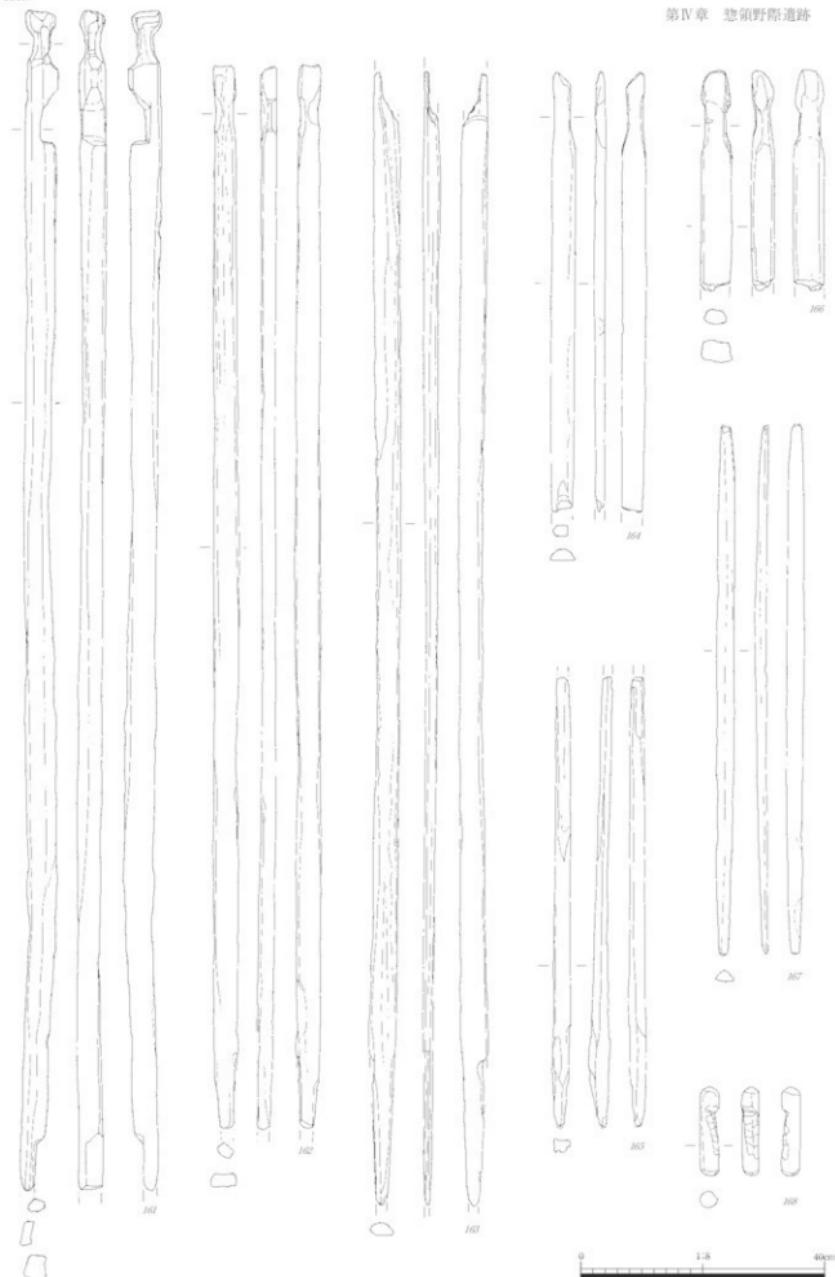




第185図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD601

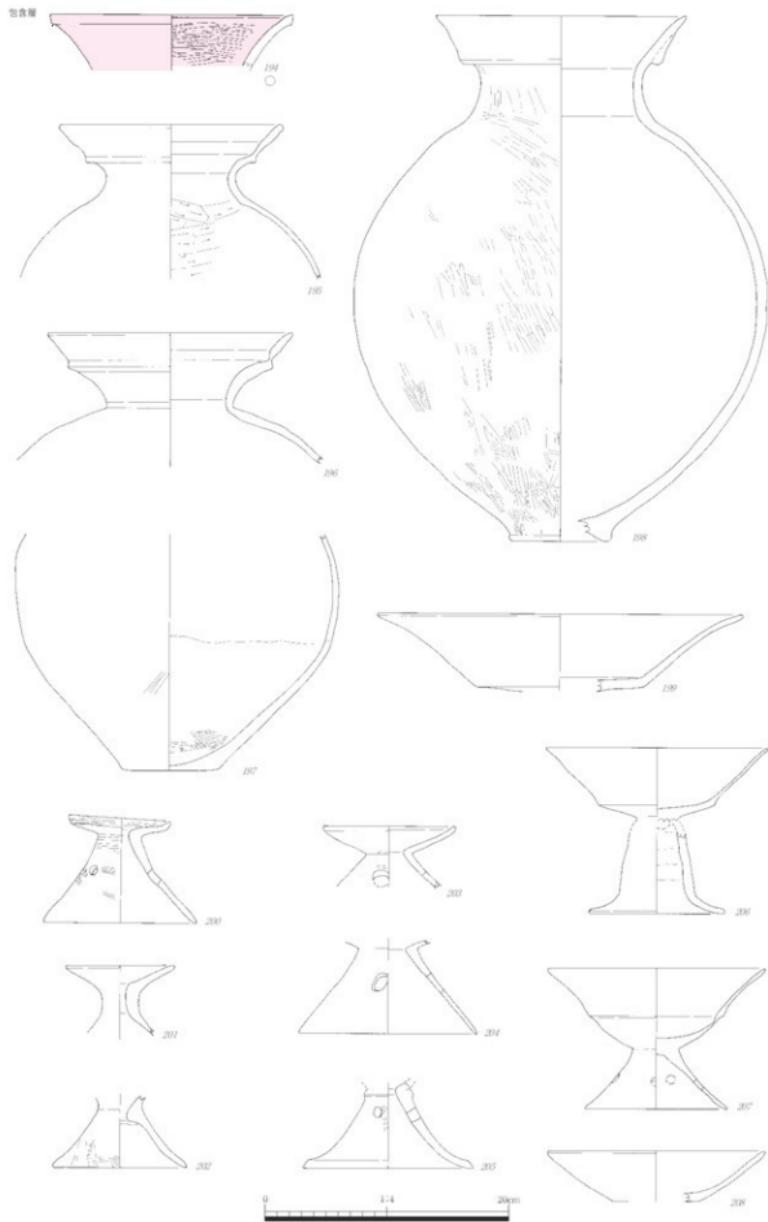


第186図 惣領野跡 遺物実測図 (1/8)
SD601

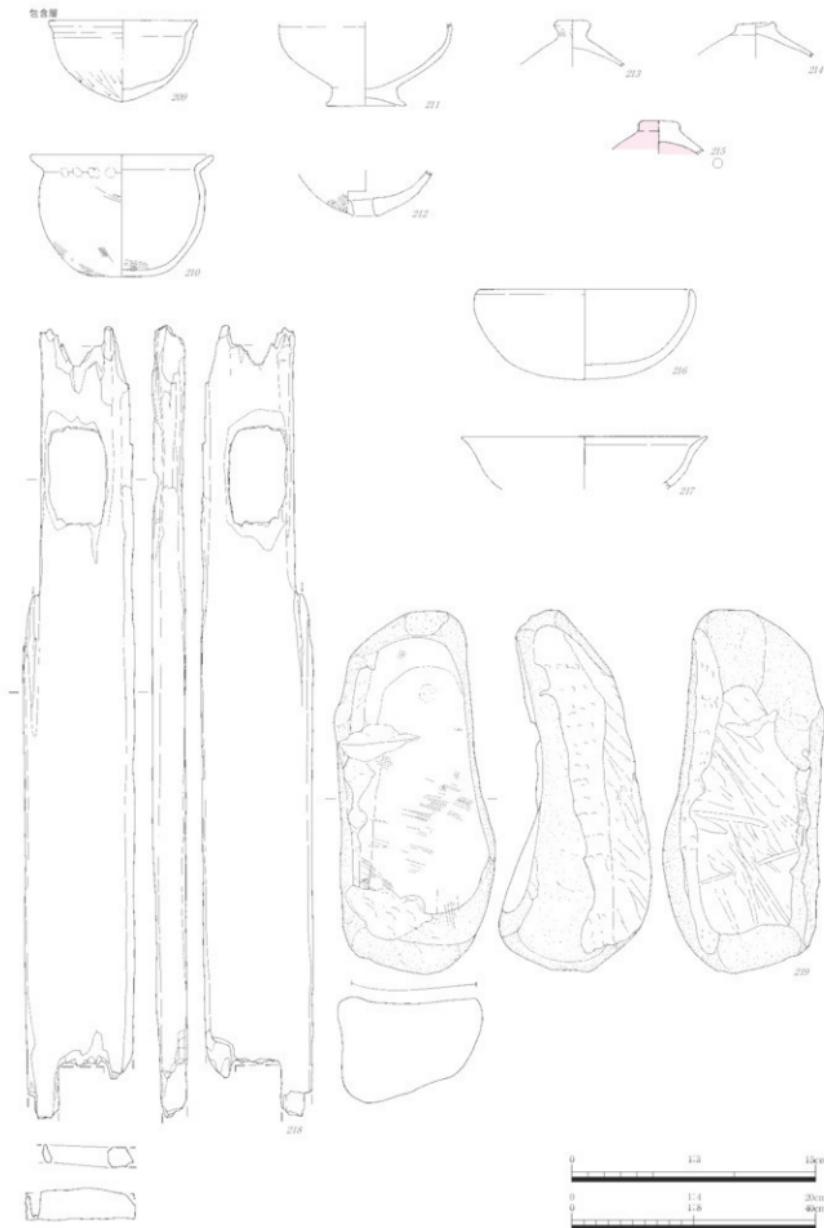


第187図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/8)
SD601

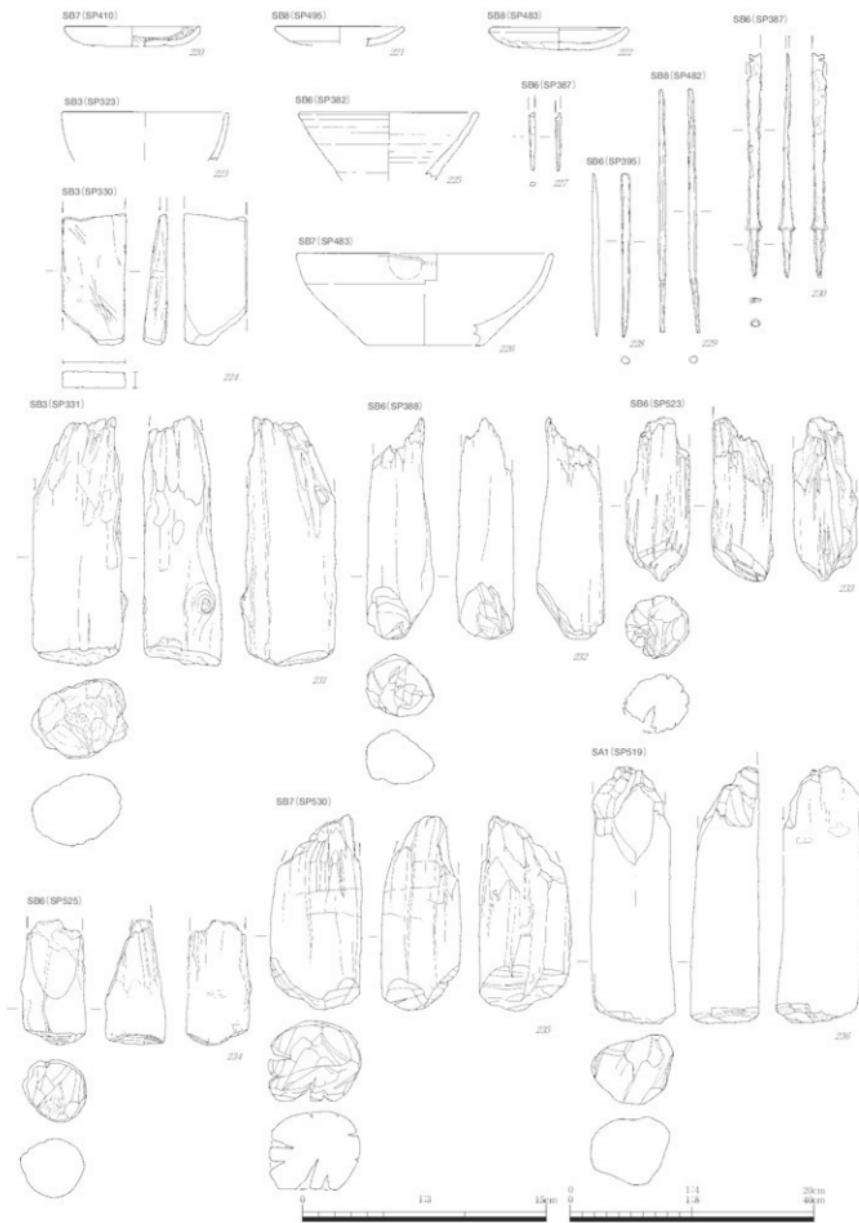
第188図 物領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
包含層



第189図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
包含層



第190図 惣領野跡 遺物実測図 (216・217・219 1/3, 209~215 1/4, 218 1/8)
包含層

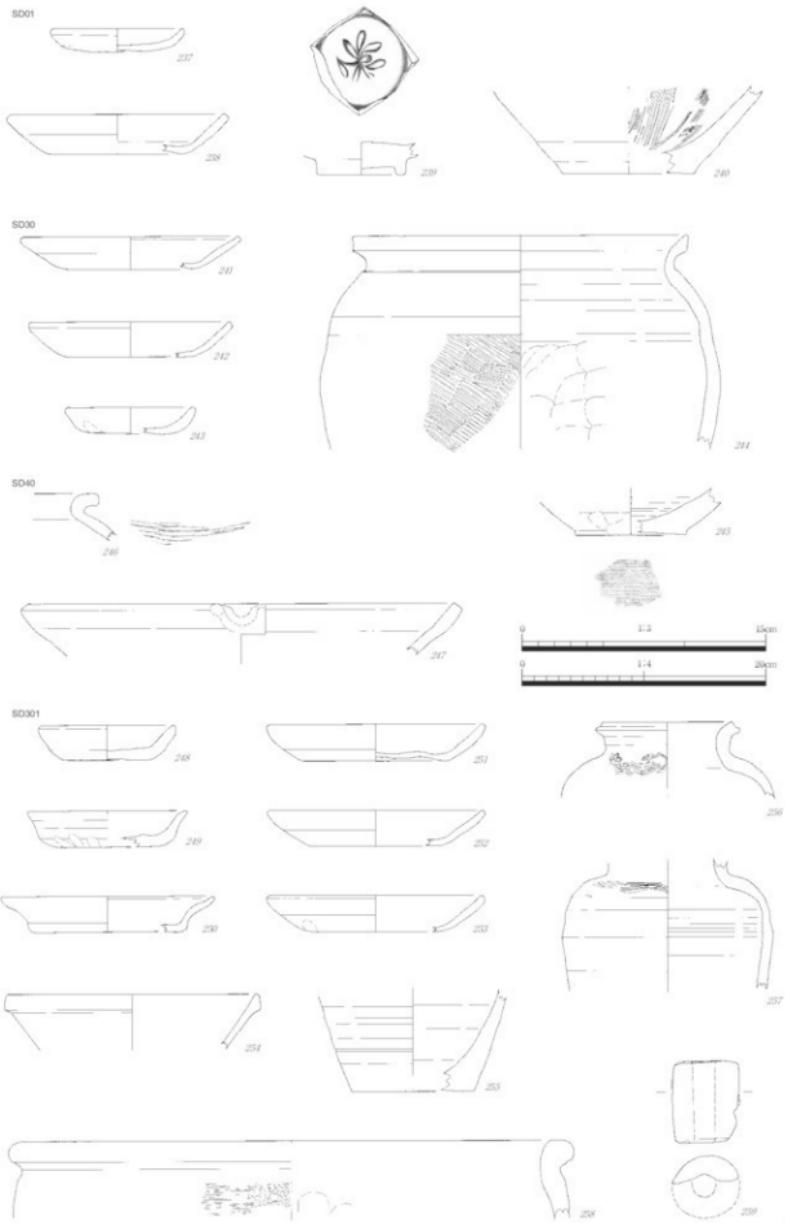


第191図 想領野際遺跡 遺物実測図 (220~224・230 1/3, 225~229 1/4, 231~236 1/8)

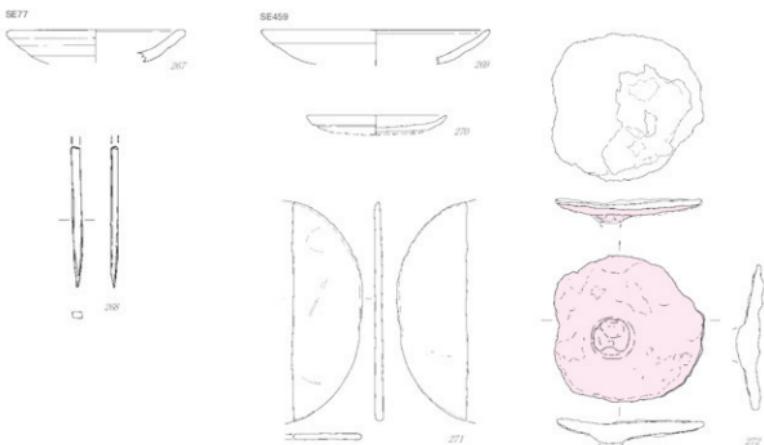
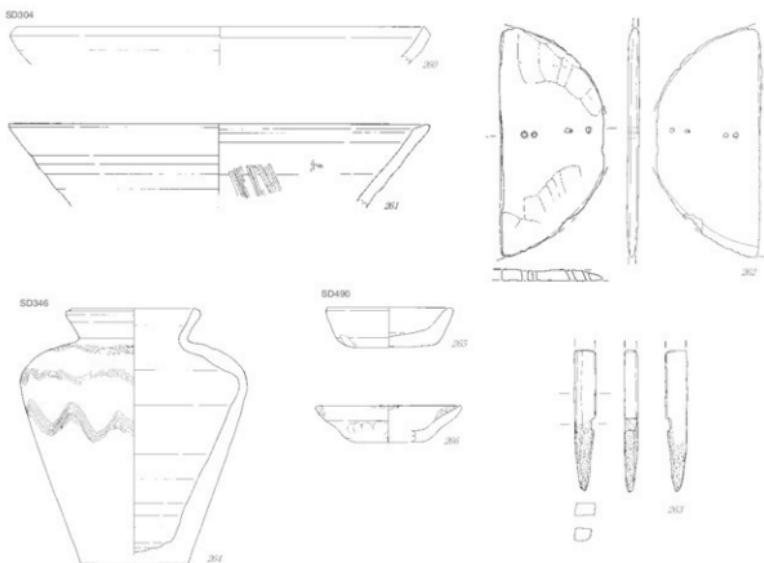
SB3 SP323(223) SP330(224) · SP331(231)

SB6 SP382(225) SP387(227 · 230) · SP388(228) · SP395(228) · SP523(233) · SP525(234)

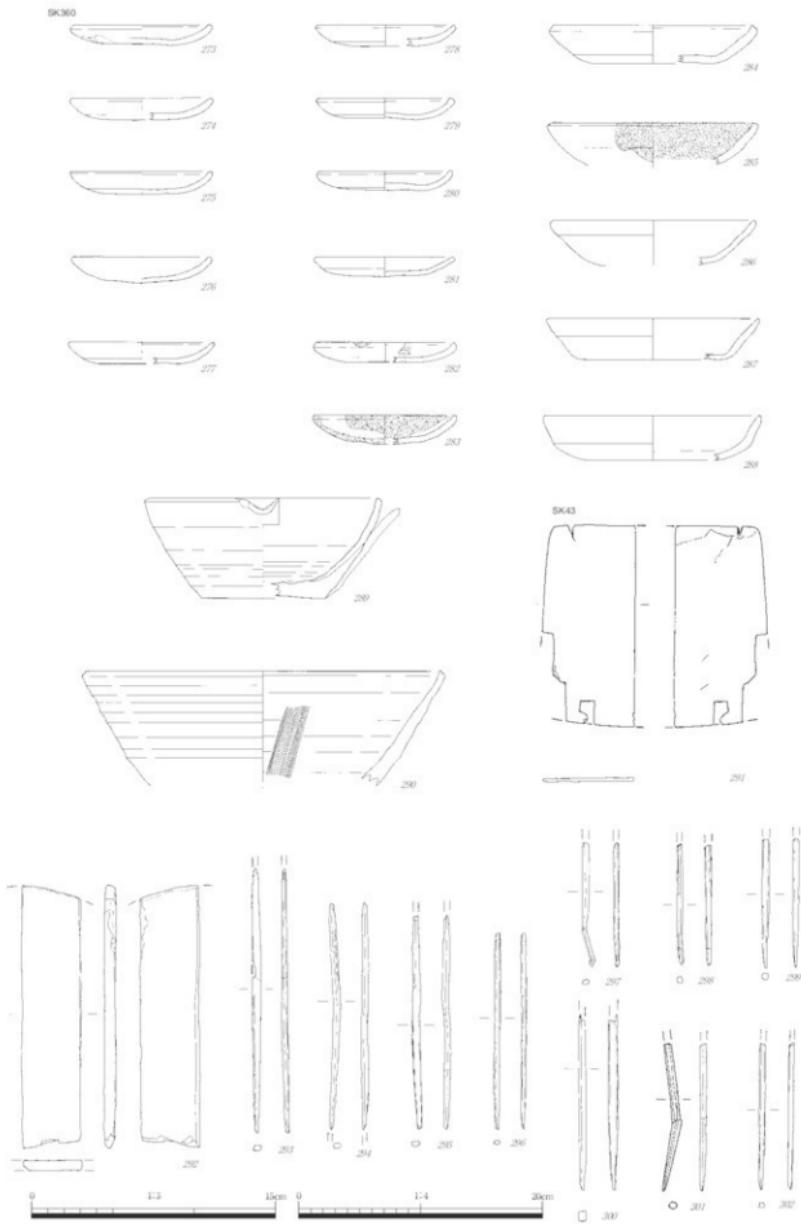
SB7 SP410(220) SP530(235) SB8 SP482(229) SP483(222 · 226) · SP495(221) SA1 SP519(236)



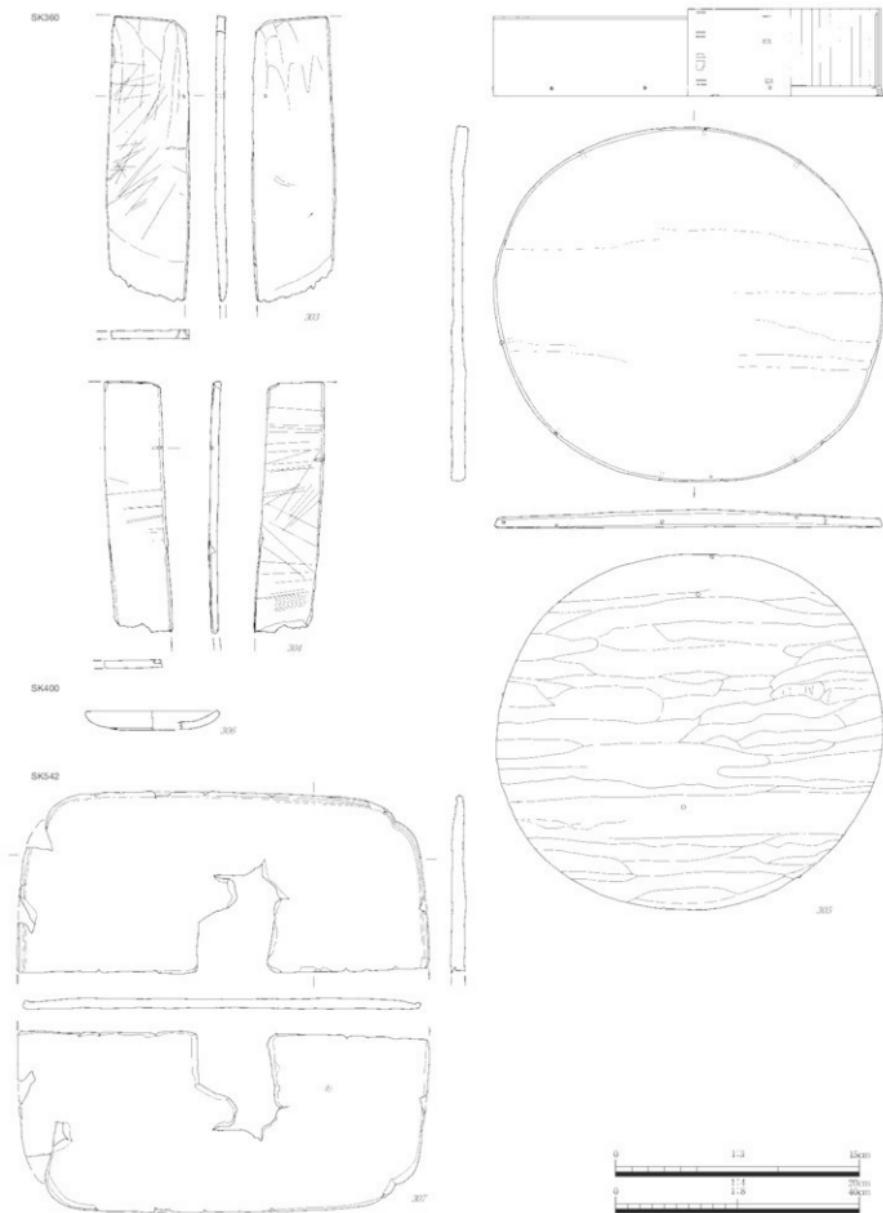
第192図 惣領野跡 遺物実測図 (237~239・241~243・248~254・259 1/3, 240・244~247・255~258 1/4)
SD1(237~240) SD30(241~245) SD40(246~247) SD301(248~259)



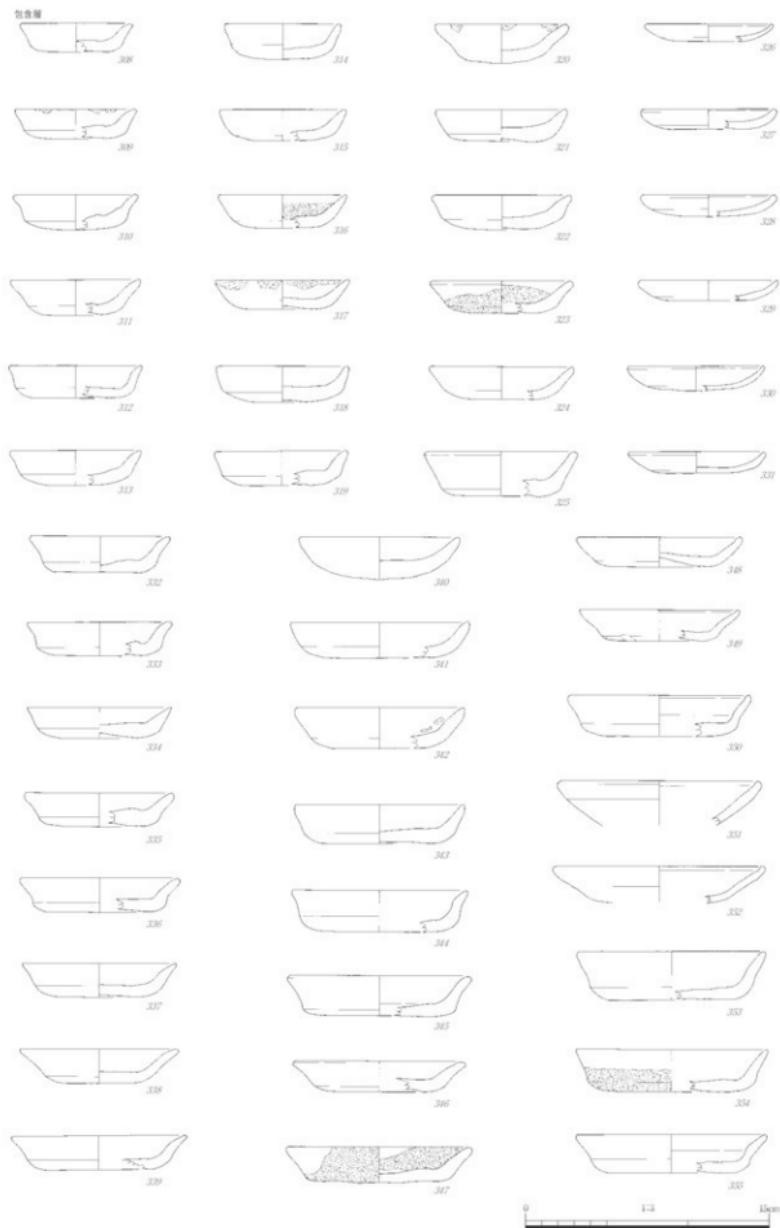
第193図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (265~267・269~270・272 1/3, 260~264・268・271 1/4)
SD304(260~263) SD346(264) SD490(265~268) SE77(267, 268) SE459(269~272)



第194図 惣領野跡 遺物実測図 (273~288 1/3, 289~302 1/4)
SK43(291) SK360(273~290・292~302)

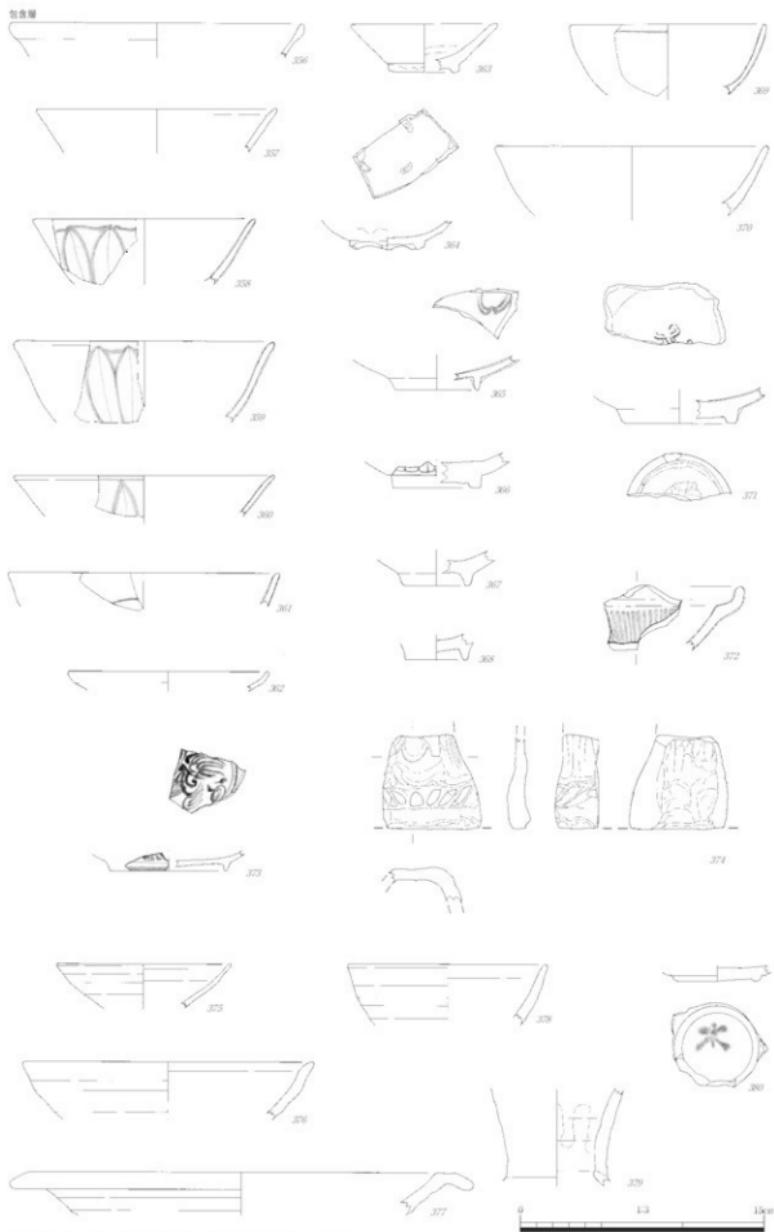


第195図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (306 1/3, 303・304・307 1/4, 305 1/8)
SK360(303~305) SK400(306) SK542(307)

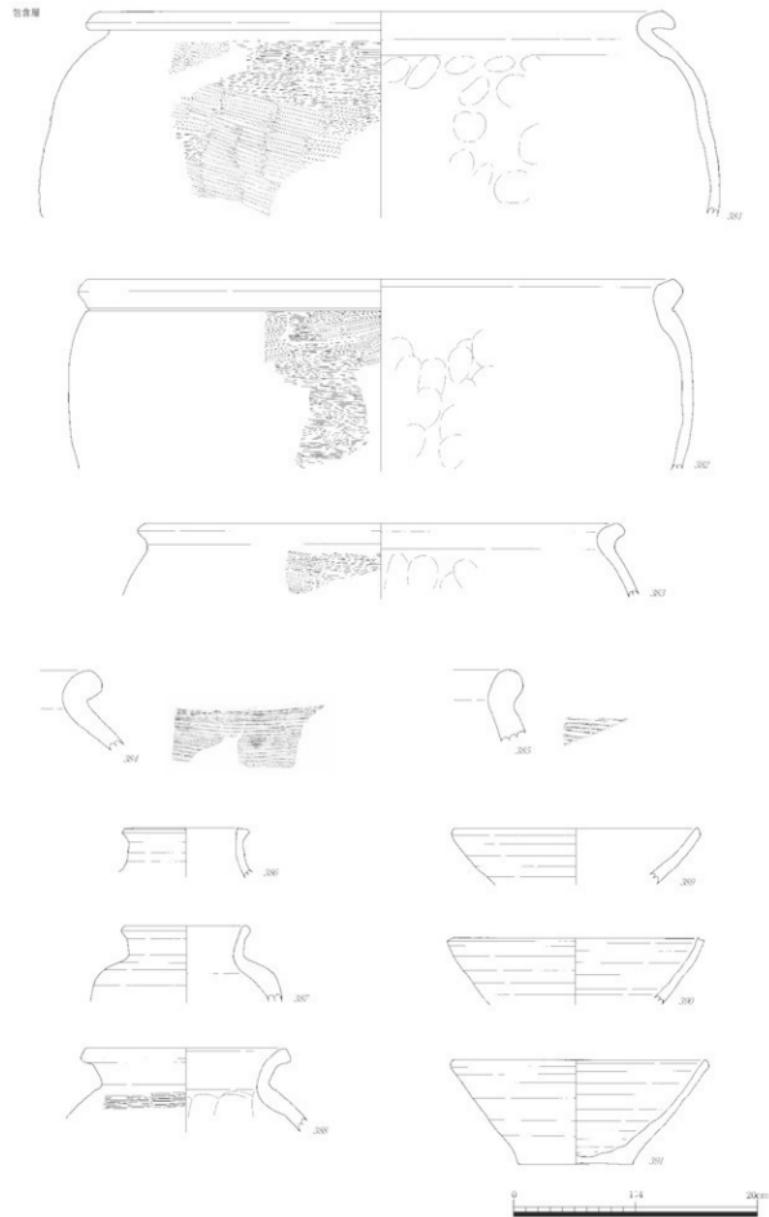


第196図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層

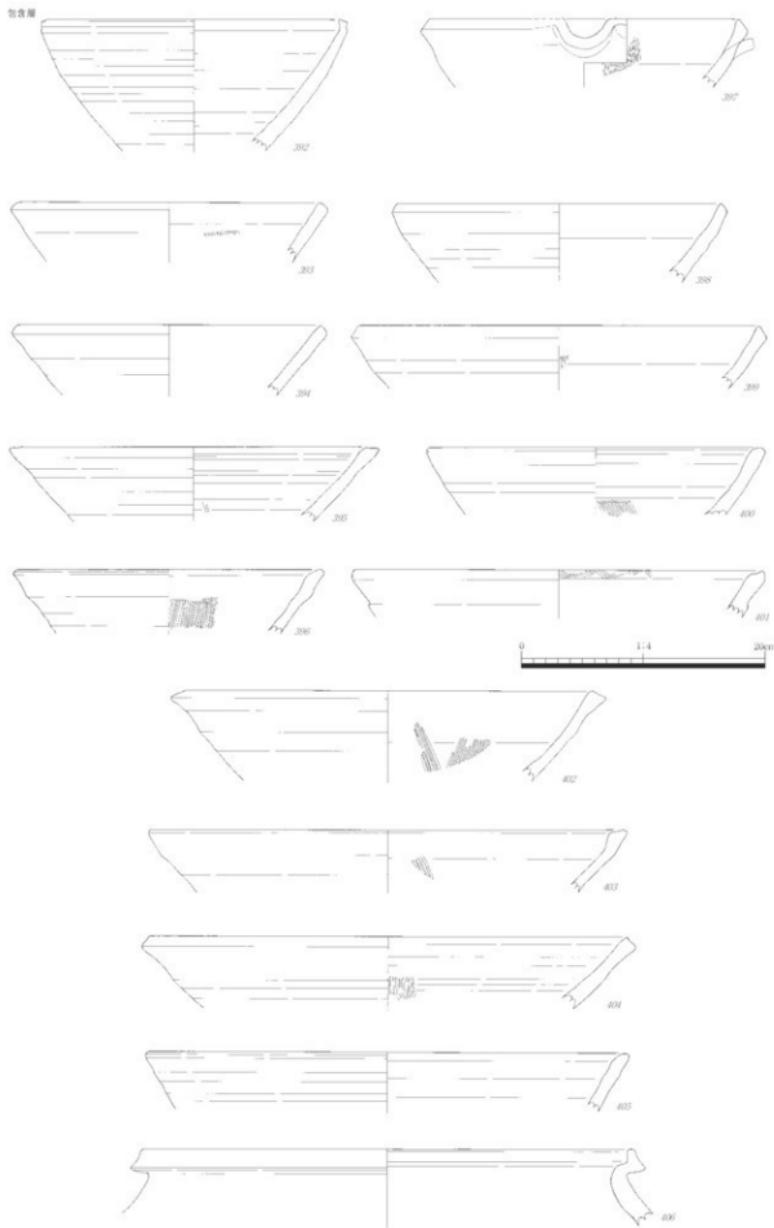
0 1.0 10cm



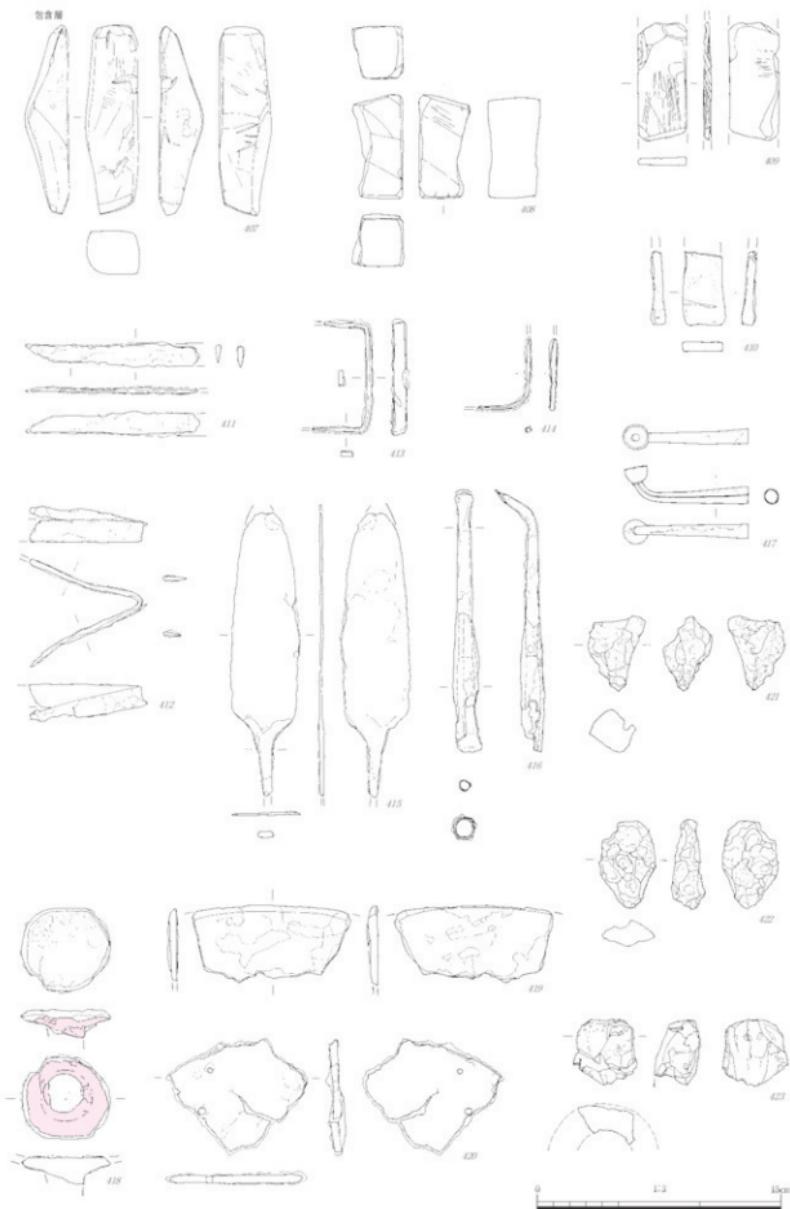
第197図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層



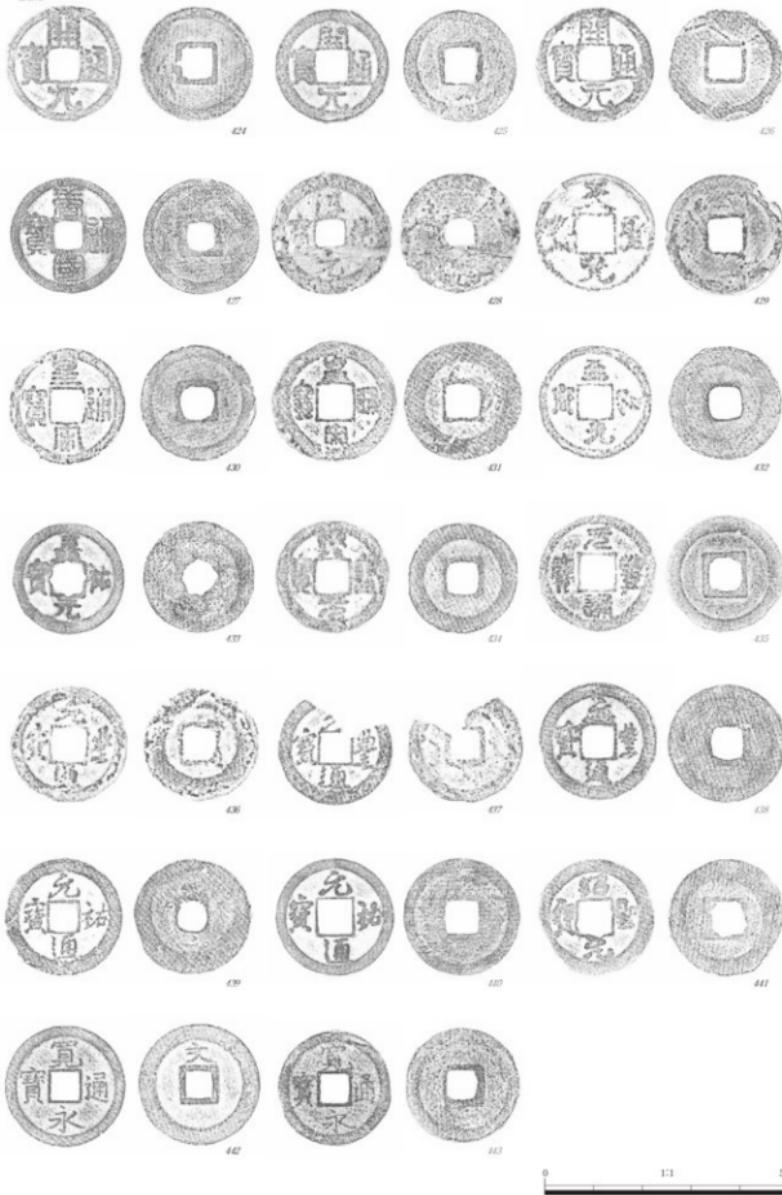
第198図 惣領野跡遺跡 遺物実測図 (1/4)
包含層



第199図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/4)
包含層

第200図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/3)
包含層

包含層

第201図 惣領野際遺跡 遺物実測図 (1/1)
包含層

第17表 惣領野際遺跡 建物一覧

建物	種別	幅行(m)	梁行(m)	面積 (m ²)	棟方値	柱穴規格 (cm)	柱穴規格 深さ(cm)	柱間距離 (cm)	柱間距離 深さ(cm)	出土遺物	時間	詳細時期	辨図	写真 図版
S81	東西棟 腰柱	2間	4.11	1間	3.67	1508	N-87°-E	0.20-0.38	0.25-0.46	202-223	367		中世	158
S82	東西棟 腰柱	2間	3.87	1間	3.35	1296	N-87°-E	0.23-0.37	0.31-0.38	172-206	331-338		中世	158
S83	東西棟 蛇柱	3間	5.71	2間	4.19	2392	N-3°-E	0.18-0.44	0.22-0.42	175-202	195-220	中世土師器, 鉄器(223), 柱(231), 磁板, 磁石(224)	中世 13C-14C	158 118
S84	東西棟 蛇柱	3間	6.45	(2間)	4.46	2877	N-3°-E	0.22-0.40	0.23-0.38	199-224	207	中世土師器	中世 13C-14C	158 118
S85	東西棟 蛇柱	1間	2.63	1間	2.32	615	N-77°-W	0.17-0.29	0.24-0.40	254-275	231-234	中世土師器, 柱	中世	158 118
S86	南北棟 蛇柱	4間	9.89	3間	7.58	7497	N-8°-E	0.27-0.59	0.15-0.40	179-304	189-325	土師器, 中世土師器, 鉄銅 (225), 磁板, 磁(227-228), 柱(232-234), 板材, 木材, 瓦器(230)	中世	159 118
S87	東西棟 蛇柱 (片端)	4間	8.27	4間	8.22	67.98	N-13°-E	0.22-0.87	0.08-0.51	191-227	199-269 (前136-173)	中世土師器(220), 柱(233), 鐵板	中世	160 118
S88	南北棟 蛇柱	5間	10.87	4間	8.25	89.68	N-2°-E	0.20-0.40	0.10-0.46	182-222	200-233	中世土師器(221-222), 珠(226), 青呂, 磁(229), 柱, 磁板, 磁石	中世	161 119
S89	東西棟 蛇柱	2間	4.72	2間	4.34	20.48	N-72°-W	0.17-0.40	0.08-0.34	203-261	208-229	鐵板	中世	162 120

第18表 惣領野際遺跡 柱穴一覧(1)

建物	造構	旧通情番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	辨図	写真 図版
				長さ	幅	深さ				
S81	SP87	A-SP87	円	0.26	0.24	0.25				
	SP88	A-SP88	円	0.30	0.29	0.44				
	SP89	A-SP89	円	0.38	0.30	0.46				
	SP112	A-SP112	円	0.26	0.25	0.26				
	SP113	A-SP113	円	0.21	0.20	0.27				
S82	SP33	A-SP33	椭円	0.37	0.32	0.38				
	SP34	A-SP34	円	0.37	0.24	0.32				
	SP35	A-SP35	円	0.31	0.28	0.36				
	SP36	A-SP36	円	0.26	0.24	0.32				
	SP37	A-SP37	円	0.28	0.23	0.34				
	SP38	A-SP38	円	0.28	0.28	0.31				
S83	SP306	B-SP06	円	0.23	0.18	0.33				
	SP313	B-SP13	円	0.24	0.20	0.22				
	SP317	B-SP17	椭円	0.44	0.27	0.42	柱			158
	SP318	B-SP18	円	0.33	0.28	0.31	中世土師器			
	SP320	B-SP20	円	0.25	0.25	0.27				
	SP223	B-SP23	円	0.33	0.24	0.26	中世土師器, 鉄器(223)	樹種同定, 掘分析		
	SP329	B-SP29	円	0.35	0.30	0.25	鐵板			158
	SP330	B-SP30	円	0.39	0.31	0.32	磁石(224)	石材鑑定		
	SP331	B-SP31	円	0.40	0.30	0.31	柱(231)	樹種同定, 放射性炭素年代		
	(SP335)	B-SP35	円	0.24	0.23	0.16				
	(SP340)	B-SP40	椭円	0.24	0.15	0.25				
	(SP341)	B-SP41	円	0.27	0.23	0.20				
S84	SP309	B-SP09	円	0.24	0.22	0.58	中世土師器			158
	SP315	B-SP15	椭円	0.34	0.25	0.26				158
	SP225	B-SP25	円	0.37	0.31	0.36				158
	SP334	B-SP34	円	0.27	0.25	0.42				158
	SP336	B-SP36	円	0.38	0.34	0.29				
	SP338	B-SP38	円	0.34	0.34	0.35				
	SP343	B-SP43	円	0.40	0.35	0.23		>SK344		
S85	SP311	B-SP11	円	0.22	0.17	0.24				158
	SP312	B-SP12	円	0.20	0.20	0.28	中世土師器			158
	SP332	B-SP32	円	0.28	0.26	0.40				158
	SP342	B-SP42	円	0.29	0.26	0.24	柱			158
S86	(SP359)	B-SP59	椭円	0.53	0.46	0.41	土師器			
	SP361	B-SP61	隅丸方	0.42	0.36	0.35	鐵板			159
	SP362	B-SP62	円	0.30	0.29	0.23	鐵板, 板材			159 120
	SP367	B-SP67	円	0.33	0.30	0.22				
	SP368	B-SP68	円	0.52	0.34	0.15	鐵板			
	SP381	B-SP81	円	0.47	0.43	0.29		<SD347		
	SP382	B-SP82	円	0.36	0.33	0.32	珠(225)			
	SP384	B-SP84	円	0.29	0.27	0.18				
	SP385	B-SP85	円	0.42	0.31	0.28	柱			159
	SP386	B-SP86	椭円	0.42	0.30	0.27	鐵板			

第18表 惣領野跡遺跡 柱穴一覧(2)

建物	造構	旧造構番号	平面形	規格(m)			出土遺物	特記	挿図	写真 図版
				長さ	幅	深さ				
SB6	SP287	B-SP87	円	(0.42)	0.36	0.28	土師器。中世土師器。箸(227), 瓦板, 鉄錐か盤(230)	<SD347, 樹種同定, 金属分析	159	
	SP288	B-SP88	円	0.55	0.42	0.27	柱(232)	樹種同定, 放射性炭素年代	159	
	SP289	B-SP89	円	0.32	0.30	0.24	瓦板			
	SP290	B-SP90	円	0.59	0.46	0.38	瓦板	<SP391	159	
	(SP391)	B-SP91	椭円	0.40	0.39	0.41	中世土師器, 瓦板	>SP390, <SD347, 樹種同定	159	120
	SP292	B-SP92	円	0.47	0.39	0.31	瓦板			
	SP293	B-SP93	円	0.48	0.32	0.22	中世土師器, 瓦板, 板材, 椅材		159	
	SP294	B-SP94	—	—	—	—		<SD347, 下層で位置のみ確認		
	SP295	B-SP95	円	0.52	0.43	0.40	箸(228), 瓦板	樹種同定		
	SP296	B-SP96	円	0.32	0.27	0.27	瓦板, 板材		159	
SB7	SP223	B-SP223	—	—	—	—	柱(233)	下層で柱の位置のみ確認, 樹種同定, 放射性炭素年代		
	SP225	B-SP225	—	—	—	—	柱(234)	下層で柱の位置のみ確認, 樹種同定, 放射性炭素年代		
	SP228	B-SP228	—	—	—	—	瓦板	下層で瓦板の位置のみ確認		
	SP229	B-SP229	—	—	—	—	瓦板か	下層で位置のみ確認		
	(SP350)	B-SP50	椭円	0.42	0.30	0.47	瓦板		160	
	(SP353)	B-SP53	円	0.20	0.19	0.33				
	(SP357)	B-SP57	円	0.32	0.32	0.37				
	(SP358)	B-SP58	円	0.37	0.33	0.19				
	(SP371)	B-SP71	円	0.34	0.25	0.28	中世土師器, 柱		160	
	SP276	B-SP76	円	0.25	0.22	0.17	瓦板	樹種同定, 放射性炭素年代		
SB8	SP278	B-SP78	円	0.37	0.29	0.08	瓦板か			
	SP280	B-SP80	円	0.29	0.28	0.20	柱		160	
	SP297	B-SP97	椭円	0.27	0.27	0.26	瓦板			
	SP298	B-SP98	円	0.40	0.40	0.18	瓦板, 柱	樹種同定	160	
	SP404	B-SP104	椭円	0.33	0.25	0.31				
	SP405	B-SP105	円	0.34	0.29	0.22	中世土師器, 瓦板		160	120
	SP406	B-SP106	円	0.40	0.33	0.21	瓦板		160	
	SP407	B-SP107	円	0.32	0.29	0.18	瓦板		160	120
	SP408	B-SP108	円	0.34	0.33	0.19				
	SP410	B-SP110	円	0.28	0.26	0.26	中世土師器(220)			
SB9	SP412	B-SP112	円	0.30	0.26	0.15	瓦板			
	SP413	B-SP113	円	0.37	0.33	0.17				
	SP414	B-SP114	円	0.29	0.29	0.16		断面に瓦板の痕跡残す		
	SP419	B-SP119	円	0.31	0.27	0.14				
	SP451	B-SP151	円	0.30	0.29	0.35				
	SP452	B-SP152	椭円	0.87	0.45	0.51	中世土師器			
	SP514	B-SP214	円	0.28	0.26	0.20				
	SP515	B-SP215	円	0.41	0.38	0.18	瓦板			
	SP516	B-SP216	円	0.34	0.28	0.24	中世土師器, 瓦板か			
	SP530	B-SP230	—	—	—	—	柱(235)	下層で柱の位置のみ確認, 樹種同定, 放射性炭素年代		
SB10	SP531	B-SP231	—	—	—	—	柱	下層で柱の位置のみ確認		
	(SP536)	B-SP236	—	—	—	—	瓦板	下層で瓦板の位置のみ確認		
	SP537	B-SP237	—	—	—	—	瓦板	下層で瓦板の位置のみ確認		
	SP538	B-SP238	—	—	—	—	瓦板	下層で瓦板の位置のみ確認		
	SP541	B-SP241	—	—	—	—	瓦板	下層で瓦板の位置のみ確認		
	SP460	B-SP160	円	0.31	0.24	0.11	珠洲			
	SP462	B-SP162	円	0.22	0.20	0.20				
	SP463	B-SP163	円	0.30	0.27	0.13				
	SP464	B-SP164	円	0.26	0.26	0.16				
	SP465	B-SP165	円	0.28	0.28	0.27				
SB11	SP467	B-SP167	椭円	0.25	0.20	0.32			161	
	SP468	B-SP168	椭円	0.40	0.27	0.10				
	SP469	B-SP169	円	0.30	0.29	0.31				
	SP470	B-SP170	円	0.30	0.30	0.24				
	SP471	B-SP171	円	0.30	0.30	0.40				
	SP472	B-SP172	円	0.27	0.26	0.32	中世土師器		161	
	SP473	B-SP173	円	0.31	0.29	0.42	漆器	樹種同定, 漆分析		
	SP474	B-SP174	椭円	0.38	0.23	0.22				
	SP481	B-SP181	円	0.40	0.23	0.19				
	SP482	B-SP182	円	0.34	0.28	0.45	中世土師器, 珠洲, 箸(229), 瓦板	樹種同定	161	
SB12	SP483	B-SP183	円	0.33	0.30	0.46	中世土師器(222), 珠洲(226), 砂石		161	
	SP484	B-SP184	円	0.31	0.29	0.24	柱			
SB13	SP493	B-SP193	円	0.27	0.27	0.37				

第18表 惣領野際遺跡 柱穴一覧(3)

建物	造構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真 図版
				長さ	幅	深さ				
SD8	SP494	B-SP194	円	0.26	0.26	0.12				
	SP495	B-SP195	円	0.21	0.20	0.27	中世土器器(221)			
	SP496	B-SP196	円	0.26	0.25	0.30			161	
	SP497	B-SP197	円	0.23	0.20	0.10	柱	樹樁同定	161	
	SP510	B-SP210	円	0.23	0.21	0.20				
SD9	SP440	B-SP140	円	0.28	0.27	0.10				
	SP443	B-SP143	円	0.33	0.29	0.15	礎板			162
	SP444	B-SP144	椭円	0.36	0.30	0.23				
	SP445	B-SP145	椭円	0.29	0.17	0.11				
	SP446	B-SP146	円	0.37	0.31	0.08	礎板	>SD401	162	121
SA1	SP447	B-SP147	円	0.40	0.38	0.13	礎板	>SD401	162	121
	SP448	B-SP148	円	0.32	0.26	0.15		>SD401		
	SP449	B-SP149	円	0.33	0.30	0.23				
SA1	SP478	B-SP178	円	0.33	0.28	0.38			161	
	SP479	B-SP179	円	0.33	0.27	0.34				
	SP519	B-SP219	—	—	—	柱(236)	下層柱根の位置のみ確認、樹樁同定、放射性炭素年代			
SA2	SP499	B-SP199	円	0.21	0.18	0.18			161	
	SP500	B-SP200	円	0.28	0.23	0.18				
	SP507	B-SP207	円	0.24	0.23	0.15				
	SP508	B-SP208	円	0.16	0.15	0.09		<SD501		

第19表 惣領野際遺跡 溝・自然流路一覧

造構	旧遺構番号	種類	規模(m)			出土遺物	時期	特記	挿図	写真 図版
			幅	深さ						
SD1	A-SD01	溝	2.64~3.00	0.82		須恵器、中世土器器(237・238)、中国製青磁(239)、珠洲(240)、木製品、鉄洋	中世	>SD30・SD40	156・163	
SD30	A-SD30	溝	0.76~2.42	0.39		中世土器器(241~243)、珠洲(244・245)	中世	>SD50、<SD1・SD30	156・157・163	
SD40	A-SD40 B-SD02	溝	1.12~1.77	0.52		珠洲(246・247)	中世	>SD50、<SD1	156・157・163	
SD50	A-SD50	溝	0.74~3.74	0.76		土器器、須恵器、珠洲	中世	<SD30・SD40	156・164	
SD201	A-SD201	自然流路	6.50~9.96	1.36		繩文土器(1~21)、弥生土器(32~48)、木製品(49~70)、石製品(75~29)	繩文晚期～弥生後期	>SD250、樹樁同定、石材鑑定	150・152	116
SD235	A-SX228 A-SX234 A-SX235 A-SX236 A-SX238	自然流路	2.10~7.50	0.40		弥生土器(71・72)	繩文晚期～弥生後期か		150・153	
SD250	A-SD250	自然流路	1.12~(1.96)	0.14		繩文土器(22~24)	繩文以降	<SD201	153	116
SD301	B-SD01	溝	3.12~3.80	0.79		土器器、中世土器器(248~253)、中国製白磁(254)、珠洲(255~259)、越中亂戸、土鍾(259)、板材、棒材、骨	中世(鍾戸～墓町)	>SD30、骨同定	157・164	118
SD304	B-SD04	溝	0.58~4.10	0.29		土器器、中世土器器、珠洲(260~261)、木製品(262~263)	中世	樹樁同定	157・164	
SD346	B-SD46	溝	0.20~0.30	0.06		珠洲(264)	中世		157・164	121
SD347	B-SD47	溝	0.80~1.60	0.28		中世土器器、珠洲	中世(鍾戸)	>SP281・SP387・SP391・SP394(SB6)・SD403	157・159・164	
SD401	B-SD101	自然流路	0.80~4.98	0.18		土器器、中世土器器、珠洲、棒材	中世	>SD458、<SP446・SP448・SB91・SD347	157・165	
SD458	B-SD158	溝	0.40~0.50	0.24			中世	<SD401・SD488	157・165	
SD488	B-SD188	溝	0.50~1.59	0.27		中世土器器、中国製青磁、珠洲	中世	>SD458	157・165	
SD489	B-SD189	溝	0.50~1.10	0.23		珠洲	中世		157・165	
SD490	B-SD190	自然流路	(9.10)	0.25		土器器、中世土器器(265~266)、珠洲、骨等	中世		157・165	
SD501	B-SD201	溝	0.50~0.99	0.22			中世	>SP508(SA2)	157・165	
SD601	B-SD301	自然流路	4.40~8.10	1.83		土器器、木製品(130~168)	古墳前期	樹樁同定、年輪年代、放射性炭素年代	151・154	117
SD618	B-SD318	溝	0.40~0.44	0.14		土器器	古墳前期		151・154	
SD642	B-SD342	溝	0.50~0.56	0.28		土器器(86~90)	古墳前期	>SD643	151	117
SD643	B-SD343	自然流路	5.60~8.00	0.20		土器器(88~91・102・112)	古墳前期	<SD642	151・154	
SD644	B-SD344	溝	1.30~2.02	0.32		土器器(103~128)	古墳前期		151・154	

第20表 惣領野際遺跡 井戸一覧

遺構	旧遺構番号	平面形	規模 (m)			出土遺物	時期	詳織時期	特記	辨図	写真 図版
			長さ	幅	深さ						
SE77	A-SE77	円	1.25	1.22	1.59	中世土師器(267), 署(268), 井戸枠	中世	13C前半	樹種同定, 放射性炭素年代	166	
SE123	A-SE123	円	1.45	1.41	1.33	珠洲, 種実	中世	13C前半	放射性炭素年代	166	
SE459	B-SE159	不整	2.35	1.14	0.41	中世土師器(269), 珠洲, 塗器皿(270), 円形板(271), 曲物, 鉄錠(272)	中世		>SK513, 樹種同定, 測分析, 金属分析	166	121

第21表 惣領野際遺跡 土坑・柱穴一覧

遺構	旧遺構番号	種類	平面形	規模 (m)			出土遺物	時期	特記	辨図	写真 図版
				長さ	幅	深さ					
SK43	A-SK43	土坑	方	2.50	2.44	0.66	中世土師器, 中国製青磁, 折敷底板(291)	中世	樹種同定	167	
SK66	A-SK66	土坑	椭円	1.10	0.90	0.65		中世		167	
SK68	A-SK68	土坑	椭円	0.90	0.76	0.44	土師器	中世		167	
SK76	A-SK76	土坑	椭円	0.86	0.62	0.57		中世		167	
SK264	A-SK264	土坑	円	0.65	—	0.28	円石(30・31)	中世	石材鑑定	150・ 152・153	
SK316	B-SK16	土坑	円	0.94	0.77	0.51		中世		167	
SP321	B-SP21	柱穴	円	0.27	0.27	0.23	柱	中世	S B3・4範囲内, 樹種同定	157	
SK344	B-SK44	土坑	不整	2.33	2.05	0.10		中世	<SP343(SB4)	167	
SK360	B-SK60	土坑	椭円	2.10	1.70	0.47	中世土師器(273・288), 珠洲(289・290), 署(293・302), 曲物側板, 物底板(303・305), 円形板か(292), 塗器, 板材, 柄材	中世	樹種同定, 放射性炭素年代	168	121
SK400	B-SK100	土坑	円	1.20	1.03	0.44	中世土師器(306), 柄材	中世	樹種同定	168	
SP403	B-SP103	柱穴	円	0.26	0.25	0.26	柱	中世	S B6近辺, 樹種同定	157	
SK454	B-SK154	土坑	不整	2.75	2.28	0.36	中世土師器, 珠洲	中世		167	
SP485	B-SP185	柱穴	円	0.39	0.37	0.30	柱	中世	樹種同定	157	
SK512	B-SP212	土坑	円	0.28	0.27	0.24		中世		157・165	
SK513	B-SK213	土坑	不整	1.06	0.46	0.49	珠洲	中世	<SK459	166	121
SP518	B-SP218	柱穴	円	0.18	0.17	0.15	柱	中世	S B7範囲内, 樹種同定	157	
SP521	B-SP221	柱穴	—	—	—	—	柱	中世	下層で柱根の位置のみ確認, 樹種同定, 放射性炭素年代	157	
SP535	B-SP235	柱穴	—	—	—	—	柱	中世	下層で柱根の位置のみ確認, S B7近辺, 樹種同定	157	
SK542	B-SK242	土坑	椭円	0.67	0.47	0.27	漆器蓋(307), 塗器楕	中世	樹種同定, 測分析	168	121
SK547	B-SK247	土坑	円	0.94	0.76	0.50		中世		168	
SK610	B-SK310	土坑	円	1.42	1.32	0.10				155	
SK613	B-SK313	土坑	椭円	1.53	1.19	0.15	土師器			155	
SK615	B-SK315	土坑	円	1.22	1.02	0.10	土師器			155	
SK616	B-SK316	土坑	円	1.42	1.10	0.09	土師器			155	
SK617	B-SK317	土坑	不整	2.16	2.10	0.12	土師器(129)			155	
SK620	B-SK320	土坑	不整	1.41	1.32	0.08	土師器			155	147

表第22物領野際遺跡土器・陶磁器・土製品一覽(1)

物類野際遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽(2)

第22表 物領野際遺跡・土器・陶磁器・土製品一覽(3)

表 222 牆領野際遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(4)

第22表 物領野際遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(5)

22表 惣領野際遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(6)

第22表 芬領野際遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(7)

編號	器物名	性質	出土地点	種類	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	周長	表面形態	胎土の性質	胎土の色	釉色	備考
1507-277	138	燒土	XAD160 住居跡	縦口	直筒	26.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1507-278	138	燒土	XAD160 住居跡	縦口	直筒	21.0	12.0	中腹	16C-	337.0	灰白色	7.5Y7/2		
1507-379	138	燒土	127-1 住居跡	縦口平底	直筒	22.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1507-380	138	燒土	XAD161 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-381	136	燒土	XAD162 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-382	136	燒土	XAD163 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-383	136	燒土	XAD164 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-384	136	燒土	XAD165 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-385	136	燒土	XAD166 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-386	136	燒土	XAD167 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-387	136	燒土	XAD168 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-388	136	燒土	XAD169 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-389	137	燒土	XAD170 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-390	137	燒土	XAD171 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1508-391	137	燒土	XAD172 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-392	137	燒土	XAD173 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-393	137	燒土	XAD174 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-394	137	燒土	XAD175 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-395	137	燒土	XAD176 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-396	137	燒土	XAD177 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-397	137	燒土	XAD178 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-398	137	燒土	XAD179 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-399	137	燒土	XAD180 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-400	137	燒土	XAD181 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-401	137	燒土	XAD182 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-402	137	燒土	XAD183 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-403	137	燒土	XAD184 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-404	137	燒土	XAD185 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-405	137	燒土	XAD186 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-406	136	燒土	XAD187 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-407	136	燒土	XAD188 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-408	136	燒土	XAD189 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-409	136	燒土	XAD190 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-410	136	燒土	XAD191 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-411	137	燒土	XAD192 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-412	137	燒土	XAD193 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-413	137	燒土	XAD194 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-414	137	燒土	XAD195 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-415	137	燒土	XAD196 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-416	136	燒土	XAD197 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-417	136	燒土	XAD198 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-418	136	燒土	XAD199 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-419	136	燒土	XAD200 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		
1509-420	136	燒土	XAD201 住居跡	縦口	直筒	20.0	12.0	中腹	16C-	337.1	灰白色	7.5Y7/2		

第23表 惣領野跡 遺跡一覧(1)

掲番	遺物	写真 図版	通構	出土地点	種類	法量(cm)			材質	木取引	備考
						長さ	幅	厚さ			
173	49	147	SD201	X102Y53	羽物槌	163	(12.7)	1.7	スギ	羽物	樹種同定1
173	50	116-147	SD201	X93Y46	羽物槌	259	(13.5)	2.2	スギ	羽物	内面黒色塗彩 樹種同定2
173	51	148	SD201	X116Y30	円形板	293	(15.4)	2.0	スギ	板目	樹種同定3
173	52	148	SD201	X110Y30	杓子形	398	8.6	1.7	スギ	板目	樹種同定4
173	53	148	SD201	X115Y47	柄	(104)	(3.9)	0.8	ヤマグワ	底が板目	樹種同定5
174	54	149	SD201	X118Y30	櫛	(99.8)	(10.8)	5.2	スギ		二次被熱 樹種同定6
174	55	149	SD201	X102Y53	舟形容器	(43.7)	(6.0)	1.3	スギ	底が板目	樹種同定7
174	56	149	SD201	X104Y53上層	不明部材	(54.6)	6.4	2.2	スギ	追査	樹種同定8
174	57	149	SD201	X115Y50	不明部材	235	3.6	0.7	スギ	追査	樹種同定9
174	58		SD201	X93Y43	棒材	(93.4)	2.5	2.4	スギ	削出丸棒	樹種同定10
174	59	150	SD201	X105Y30上層	板柾	(38.5)	(7.7)	1.6	スギ	板目	樹種同定11
174	60	149	SD201	X94Y47中層	棒材	1424	20	1.8	スギ	削出丸棒	樹種同定12
174	61	149	SD201	X93Y46上層	不明部材	(32.2)	(4.1)	0.9	スギ	板目	樹種同定13
175	62	150	SD201	X112Y49	不明部材	629	8.8	3.1	スギ	追査	一面黒色付着 二次被熱 樹種同定14
175	63	150	SD201	X115Y47	不明部材	612	10.4	2.0	スギ	板目	樹種同定15
175	64	150	SD201	X111Y47	不明部材	(55.8)	(16.2)	2.6	スギ	追査	樹種同定16
175	65	150	SD201	X98Y53中層	建築部材	(75.0)	19.2	2.4	スギ	板目	樹種同定17
175	66	150	SD201	X98Y53中層	建築部材	(76.8)	20.1	2.2	スギ	板目	樹種同定18
176	67	151	SD201	X115Y30	板柾	1365	20.0	2.5	スギ	追査	樹種同定19
176	68	151	SD201	X116Y30	板柾	962	23.4	3.6	スギ	板目	樹種同定20
176	69	151	SD201	X112Y49中層	板柾	242	17.9	4.1	スギ	板目	樹種同定21
176	70	151	SD201	X96Y52中層	原材	(40.0)	11.8	8.6	サクラ属	分割材(ミカン割)	二次被熱 樹種同定22
182	E30	117-152	SD601	X44-49Y66-70下層	櫛	1131	68.7	6.1	スギ	底が板目	樹種同定23 年輪年代1
183	E31	153	SD601	X43-47Y61-65下層	櫛(盤)	(66.0)	(17.1)	4.7	スギ	底が板目	樹種同定24
183	E32	153	SD601	X43-47Y61-65下層	櫛	(73.6)	(34.6)	4.1	スギ	底が追査	樹種同定25 年輪年代3
183	E33	153	SD601	X47-62Y71-75下層	櫛	(87.8)	(40.2)	4.8	スギ	底が板目	樹種同定26
184	E34	154	SD601	X43-46Y56-60下層	角柾	1769	7.8	5.4	スギ	分割材	樹種同定27
184	E35	154	SD601	X47-62Y71-75下層	角柾	1455	(5.8)	3.0	スギ	分割材	樹種同定28
184	E36	154	SD601	X44-49Y66-70下層	角柾	(107.0)	7.8	4.0	スギ	分割材	樹種同定29
184	E37	154	SD601	X43-47Y61-65下層	板柾	(101.0)	6.0	4.2	スギ	追査	樹種同定30
184	E38	154	SD601	X47-62Y71-75下層	角柾	(74.3)	6.5	3.8	スギ	分割材	樹種同定31
184	E39	154	SD601	X43-47Y61-65下層	板柾か	(20.1)	2.8	1.2	スギ	板目	樹種同定32
184	E40	154	SD601	X47-62Y71-75下層	板柾	(68.1)	8.8	1.1	スギ	板目	樹種同定33
184	E41	154	SD601	X47-62Y71-75下層	角柾	71.0	6.4	5.5	スギ	削出丸棒	樹種同定34
185	E42	155	SD601	X44-49Y66-70	不明部材(板柾)	1484	(19.0)	2.4	スギ	板目	樹種同定35
185	E43	156	SD601	X47-62Y71-75下層	不明部材(板柾)	(76.1)	(37.3)	1.6	スギ	板目	二次被熱 樹種同定36 年輪年代2
185	E44	155	SD601	X43-47Y61-65下層	指物	531	(14.5)	2.0	スギ	板目	樹種同定37 年輪年代4
185	E45	155	SD601	X43-47Y61-65下層	不明部材	(29.0)	5.0	3.0	スギ	板目	樹種同定38
185	E46	156	SD601	X43-47Y61-65下層	不明部材	(28.4)	(7.7)	2.3	スギ	板目	樹種同定39
185	E47	155	SD601	X43-47Y61-65下層	不明部材	31.6	5.7	1.5	スギ	板目	樹種同定40 放射性炭 素年代IAAA-80566
185	E48	155	SD601	X44-49Y66-70	等	(97.5)	12.3	1.7	スギ	追査	二次被熱 樹種同定41
186	E49	157	SD601	X43-47Y61-65下層	棒材	(149.1)	8.6	5.5	スギ	板目	樹種同定42
186	E50	157	SD601	X43-47Y61-65下層	不明部材	(122.3)	13.4	7.3	スギ	分割材(ミ カン割)	樹種同定43
186	E51	157	SD601	X47-62Y71-75下層	指物	14.5	11.8	1.8	スギ	板目	樹種同定44
186	E52	159	SD601	X47-62Y71-75下層	椅子	(196)	18.2	7.8	キハダ	板目	樹種同定45
186	E53	156	SD601	X47-62Y71-75下層	不明部材	90.4	5.3	1.2	スギ	板目	樹種同定46
186	E54	156	SD601	X43-47Y61-65下層	不明部材	(61.1)	3.1	2.0	スギ	分割材	樹種同定47
186	E55	155	SD601	X47-62Y71-75下層	柄	58.4	(5.9)	0.8	スギ	追査	樹種同定48 放射性炭 素年代IAAA-80565
186	E56	156	SD601	X47-62Y71-75下層	編台	(55.9)	(7.6)	0.9	スギ	板目	樹種同定49
186	E57	156	SD601	X47-62Y71-75下層	不明部材	(59.7)	5.0	1.5	スギ	板目	樹種同定50
186	E58	157	SD601	X47-62Y71-75下層	刺突具	(72.8)	3.3	1.6	スギ	削出角材	樹種同定51
186	E59	157	SD601	X43-47Y61-65下層	刺突具	(35.7)	1.2	1.2	スギ	削出丸棒	樹種同定52
186	E60	157	SD601	X44-49Y66-70下層	刺突具	30.4	1.2	0.8	スギ	板目	樹種同定53
187	E61	158	SD601	X47-62Y71-75下層	建築部材(垂木)	(193.1)	5.4	4.0	スギ	分割材	樹種同定54
187	E62	158	SD601	X43-47Y61-65下層	建築部材(垂木)	174.0	4.0	2.5	スギ	分割材	樹種同定55
187	E63	158	SD601	X47-62Y71-75下層	建築部材(垂木)	(185.5)	5.0	2.7	スギ	分割材	樹種同定56

第23表 惣領野際遺跡 木製品一覧(2)

排番	遺物	写真 図版	造構	出土点	種類	法量(cm)			材質	木取り	備考
						長さ	幅	厚さ			
187	164	159	SD601	X43~47 Y61~65下層	建築部材 (垂木分)	(71.9)	4.0	1.9	スギ	板目	樹種同定57
187	165	159	SD601	X43~47 Y61~65下層	建築部材 (垂木分)	(73.6)	2.9	3.3	スギ	分割材	樹種同定58
187	166	159	SD601	X43~46 Y56~60下層	建築部材 (垂木分)	(36.2)	5.1	3.7	スギ	削出角材	樹種同定59
187	167	159	SD601	X47~62 Y71~75下層	棒材	(86.7)	2.9	2.0	スギ	分割材	樹種同定60
187	168	155	SD601	X43~46 Y56~60下層	木鍤か	14.6	3.1	2.9	コナラ属 アカガシ モク	芯持丸木	樹種同定61
190	218	159		X22Y66Ⅲ層	雕紋し	(130.2)	(18.3)	5.4	スギ	板目	樹種同定62
191	223	160	SP323 (SB3)		漆器桿	口径 10.0	器高 (3.0)		ケヤキ	横木地(板 目取)	紀黒色系漆 樹種同定 63 漆分析No.3
191	227	161	SP387 (SB6)		箸	(47)	0.4	0.3	スギ	削出角棒	樹種同定64
191	228	161	SP395 (SB6)		箸	133	0.6	0.5	スギ	削出角棒	樹種同定65
191	229	161	SP482 (SB8)		箸	199	0.6	0.5	スギ	削出角棒	樹種同定66
191	231	163	SP331 (SB3)		柱	(40.6)	14.5	11.4	クリ	芯持丸木	樹種同定67 放射性炭 素年代IAAA-70537
159・232	163	SP388 (SB6)			柱	(36.2)	11.0	8.7	クリ	芯持丸木	樹種同定68 放射性炭 素年代IAAA-70541
191	233	163	SP523 (SB6)		柱	(26.7)	10.4	9.5	クリ	芯持丸木	樹種同定69 放射性炭 素年代IAAA-70539
191	234	164	SP525 (SB6)		柱	(20.3)	10.4	9.6	スダジイ	芯持丸木	樹種同定70 放射性炭 素年代IAAA-70538
191	235	164	SP530 (SB7)		柱	(31.9)	15.0	13.0	キハダ	芯持丸木	樹種同定71 放射性炭 素年代IAAA-70535
191	236	164	SP519 (SA1)		柱	(41.9)	13.0	11.2	スダジイ	芯持丸木	樹種同定72 放射性炭 素年代IAAA-70536
193	262	160	SD304	X63Y73	円形板	(18.8)	(8.5)	0.9	スギ	板目	樹種同定73
193	263	160	SD304	X63Y73	棒材	(11.6)	1.7	1.1	スギ	板目	二次被熱 樹種同定74
193	268		SE77	底面	箸	(11.5)	0.7	0.6	スギ	板目	樹種同定75
193	270	160	SE459	No.2	漆器皿	口径 8.4	器高 1.0		ブナ属	横木地(板 目取)	紀黒色系漆 樹種同定 76 漆分析No.2
166・271	121・160	SE459	No.3	円形板	(17.9)	(5.8)	0.5	スギ	板目	樹種同定77	
193	291	SK43		X85Y47底面	折敷底板	16.5	(7.7)	0.4	ヒノキ	板目	樹種同定78
194	292	160	SK360		円形板か	(21.5)	(4.8)	0.9	スギ	板目	樹種同定79
194	293	161	SK360	X49~50 Y72	箸	(21.7)	0.7	0.5	スギ	削出角棒	樹種同定80
194	294	161	SK360	X49~50 Y72	箸	18.5	0.6	0.5	モミ属	削出角棒	樹種同定81
194	295	161	SK360	X49~50 Y72~73	箸	(17.5)	0.6	0.4	スギ	削出角棒	樹種同定82
194	296	161	SK360	X49~50 Y72	箸	17.1	0.5	0.5	スギ	削出角棒	樹種同定83
194	297	161	SK360	X49~50 Y72 No.18	箸	(10.2)	0.6	0.4	スギ	削出角棒	樹種同定84
194	298	161	SK360	X49~50 Y72	箸	(9.9)	0.5	0.4	スギ	削出角棒	樹種同定85
194	299	161	SK360	X49~50 Y72	箸	(10.5)	0.5	0.5	スギ	削出角棒	樹種同定86
194	300	161	SK360	X49~50 Y72~73	箸	(14.4)	0.8	0.8	スギ	削出角棒	樹種同定87
194	301	161	SK360	X49~50 Y72~73	箸	(12.1)	0.6	0.6	スギ	削出角棒	樹種同定88
194	302	161	SK360	X49~50 Y72	箸	(12.0)	0.5	0.4	スギ	削出角棒	樹種同定89
168・303	121・160	SK360	X49~50 Y72 No.13	曲物底板	(23.4)	(6.8)	0.8	スギ	板目	樹種同定90 放射性炭 素年代IAAA-70534	
195	304	160	SK360		曲物底板	(20.6)	(5.6)	0.6	スギ	板目	樹種同定91
168・305	121・162	SK360	X49~50 Y72	曲物	63.7	58.1	2.3	スギ	道板	樹種同定92	
168・307	121・162	SK542		漆器蓋	(14.9)	(31.6)	0.8	ケヤキ	板目	紀黒色系漆 一部炭化 樹種同定93 漆分析No. 1	

第24表 惣領野際遺跡 石製品一覧

番号	遺物	写真 図版	造構	出土地点	種類	法量 (cm・g)				材質	備考
						長さ	幅	厚さ	重さ		
171	25	142	SD201	X115Y50下層	打製石斧	(10.4)	4.8	1.7	123.79	石英斑岩	石材鑑定No 1
171	26	142	SD201	X95Y51下層	打製石斧	(11.7)	10.3	2.6	410.89	安山岩	石材鑑定No 2
171	27	142	SD201	X107Y49中層	磨製石斧	(8.2)	6.1	3.0	232.53	安山岩	石材鑑定No 3
171	28	142	SD201	X98Y53下層	磨製石斧	11.0	5.2	2.6	209.33	角閃岩	石材鑑定No 4
171	29	142	SD201	X96Y53下層	磨製石斧	(7.6)	4.1	1.4	65.34	透閃石岩	石材鑑定No 5
152 - 30	143	SK264	No2		凹石	(40.4)	(35.7)	7.5	11,200.00	シルト岩	石材鑑定No 6
153 -											
171											
152 - 31	143	SK264	No1		凹石	(35.4)	(28.6)	7.9	13,700.00	シルト岩	石材鑑定No 7
153 -											
171											
178	81	144		X90Y43Ⅲb層	打製石斧	19.3	8.4	2.9	624.00	石英斑岩	石材鑑定No 8
178	82	144		X87 - 88Y47Ⅲb層	打製石斧	14.3	12.4	1.4	291.56	安山岩	石材鑑定No 9
178	83	145		X90Y41Ⅲb層	石錘	10.5	10.6	1.5	221.67	砂岩	石材鑑定No 10
178	84	144		X90 - 93Y57 - 60Ⅲb層	打製石斧	11.4	11.1	2.5	356.28	石英斑岩	石材鑑定No 11
178	85	145		X81Y46Ⅲc層	砾石	23.2	13.9	7.4	4,500.00	シルト岩	石材鑑定No 12
190	219	145		排水溝	砾石	22.2	9.5	8.5	1,580.00	砂岩	石材鑑定No 13
191	224	146	SP330(SB3)		砾石	(8.0)	3.8	1.4	53.70	粘板岩	石材鑑定No 14
200	407	146		X31Y67Ⅱ層	砾石	11.5	3.2	2.7	118.75	流紋岩	石材鑑定No 15
200	408	146		X33Y66Ⅱ層	砾石	6.3	3.1	3.2	86.39	流紋岩	石材鑑定No 16
200	409	146		X27Y79Ⅱ層	砾石	(7.2)	(3.0)	0.5	18.09	粘板岩	石材鑑定No 17
200	410	146		X89Y47Ⅱa層	砾石	(4.5)	2.6	0.9	11.63	流紋岩	石材鑑定No 18

第25表 惣領野際遺跡 金属製品一覧

番号	遺物	写真 図版	造構	出土地点	種類	法量 (cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
191	230	139	SP387(SB6)		鍔か鑿	(13.5)	0.7	0.7	12.78	金屬分析No 8
166 - 272	121 - 140	SE450			鉄錐	(9.2)	(9.0)	1.4	165.12	外面ベンガラ付着 金属分析No 16
200	411	139		X47Y53Ⅱa層	刀子	(10.3)	1.4	0.3	13.64	金屬分析No 1
200	412	139		X46Y73Ⅱ層	刀子	7.2	1.4	0.4	19.13	金屬分析No 10
200	413	139		X81Y58Ⅱa層	鍔	7.0	(3.5)	0.3	16.87	金屬分析No 2
200	414	139		X101Y48Ⅱa層	釘	(4.5)	(3.5)	0.2	4.14	金屬分析No 3
200	415	139		X49Y78Ⅱ層	植か刀子	(17.2)	4.1	0.4	54.95	金屬分析No 9
200	416	139		X26Y70Ⅱ層	櫛櫛カンナカ	(15.9)	1.3	1.3	45.78	金屬分析No 7
200	417			X41Y72Ⅱ層	環首(雁首)	7.6	1.0	0.1	7.10	
200	418	140		X38Y77Ⅰ層	鉄錐	(5.2)	(5.0)	(1.6)	79.62	外面ベンガラ付着 金属分析No 17
200	419	140		X49Y72Ⅱ層	羽茎	(9.7)	(4.6)	0.6	78.22	金屬分析No 18
200	420	140		X19Y77Ⅱ層	鉄錐	8.1	6.8	0.5	87.48	金屬分析No 19
200	421			X102Y57Ⅱa層	鉄津	4.6	3.5	3.6	35.90	金屬分析No 4
200	422			X39Y61Ⅱ層	鉄津	5.3	3.5	2.0	36.89	金屬分析No 13
201	424	141		X31Y75Ⅱ層	鉄(開元通寶)	2.3	2.3	0.1	2.48	845年初鋤
201	425	141		X55Y64Ⅱ層	鉄(開元通寶)	2.3	2.3	0.1	2.40	845年初鋤
201	426	141		X105Y56Ⅱa層	鉄(開元通寶)	2.4	2.4	0.1	2.71	845年初鋤
201	427	141		X47Y63Ⅱ層	鉄(唐國通寶)	2.4	2.4	0.1	3.17	959年初鋤
201	428	141		X25Y77Ⅰ層	鉄(淳化元寶)	2.4	2.4	0.1	1.94	990年初鋤
201	429	141		X51Y68Ⅱ層	鉄(天聖元寶)	2.5	2.5	0.1	3.30	1023年初鋤
201	430	141		X93Y44Ⅱa層	鉄(皇宋通寶)	2.4	2.4	0.1	2.99	1039年初鋤
201	431	141		X68Y59Ⅰ層	鉄(皇宋通寶)	2.4	2.4	0.1	2.73	1039年初鋤
201	432	141		X92Y44Ⅱa層	鉄(至和元寶)	2.3	2.3	0.1	3.46	1054年初鋤
201	433	141		X47Y63Ⅱ層	鉄(嘉祐通寶)	2.3	2.3	0.1	3.28	1056年初鋤
201	434	141		X36Y77Ⅱ層	鉄(熙寧元寶)	2.3	2.3	0.1	3.48	1068年初鋤
201	435	141		X41Y71Ⅱ層	鉄(元豐通寶)	2.4	2.4	0.1	2.64	1078年初鋤
201	436	141		X46Y73Ⅱ層	鉄(元豐通寶)	2.3	2.3	0.1	3.00	1078年初鋤
201	437	141		X41Y76Ⅱ層	鉄(元豐通寶)	2.3	2.3	0.1	2.30	1078年初鋤
201	438	141		X89Y47Ⅰ層	鉄(元豐通寶)	2.4	2.4	0.1	2.98	1078年初鋤
201	439	141		X70Y70Ⅱ層	鉄(元祐通寶)	2.4	2.4	0.1	2.81	1086年初鋤
201	440	141		X47Y63Ⅱ層	鉄(元祐通寶)	2.4	2.4	0.1	3.66	1086年初鋤
201	441	141		X102Y60Ⅱa層	鉄(紹聖元寶)	2.4	2.4	0.1	2.27	1094年初鋤
201	442	141		X96Y44Ⅰ層	鉄(寛永通寶)	2.5	2.5	0.1	3.33	1668年～1869年初鋤
201	443	141		X114Y35Ⅰ層	鉄(寛永通寶)	2.3	2.3	0.1	2.60	1668年～1869年初鋤

写 真 図 版



2



3



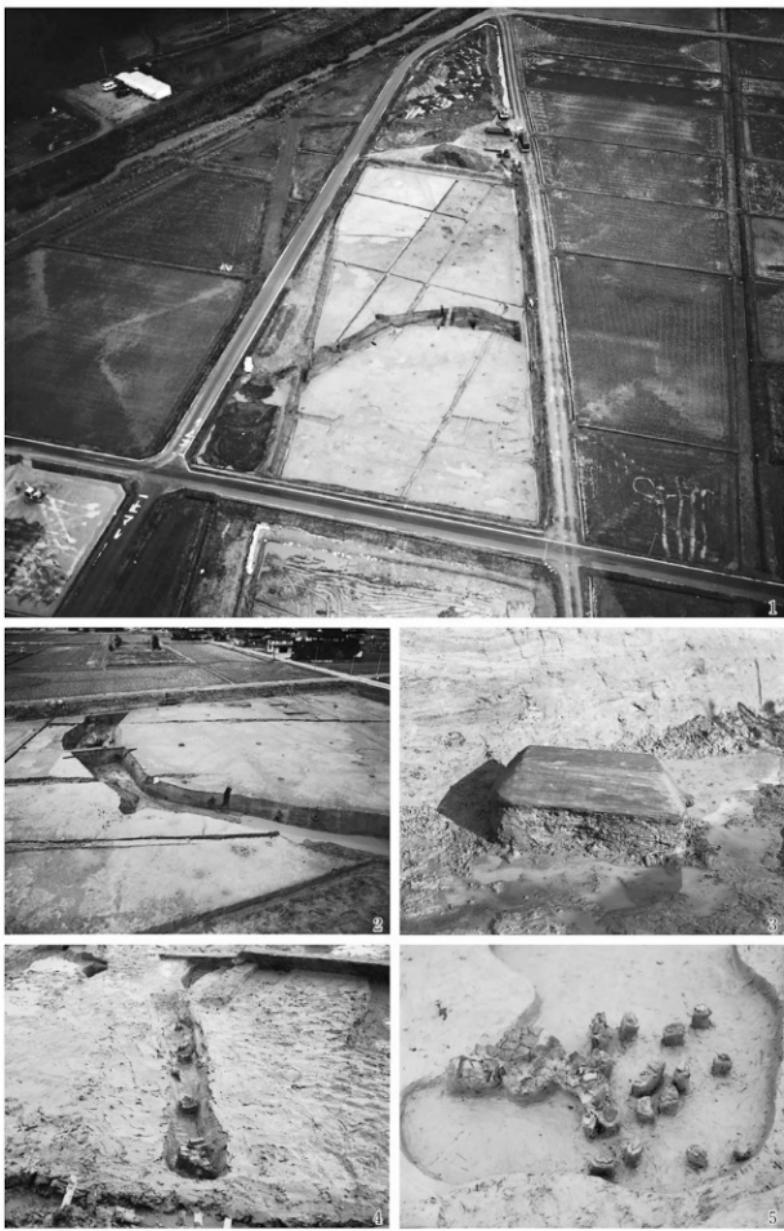
4



5

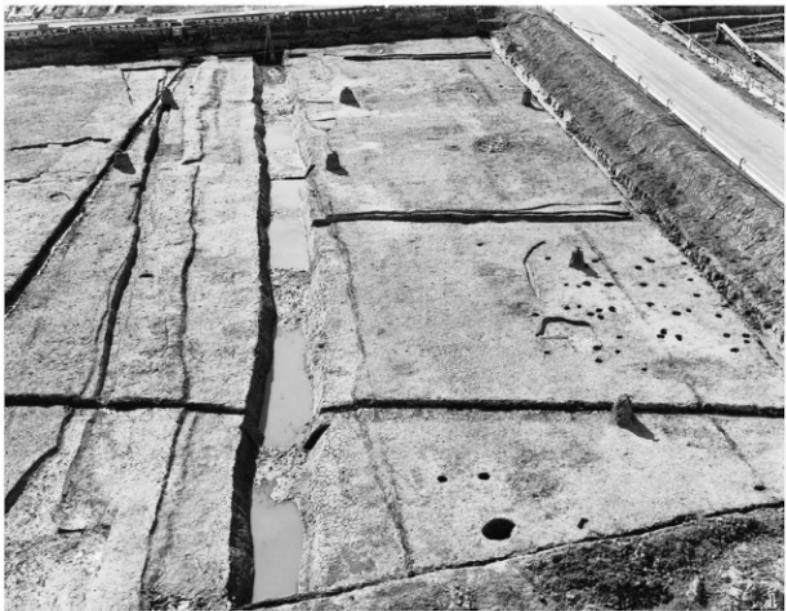
惣領野跡 (縄文・弥生時代)

1. A地区全景(北から)
2. SD250縄文土器出土状況(西から)
3. SD250縄文土器出土状況(東から)
4. SD201弥生土器(42)出土状況(南西から)
5. SD201鉢物桶(50)出土状況(南西から)



惣領野際遺跡（古墳時代）

1. B地区全景(北から) 2. SD601(東から) 3. SD601槽(I30)出土状況 4. SD642土師器出土状況(西から)
5. SK620土師器出土状況(南から)

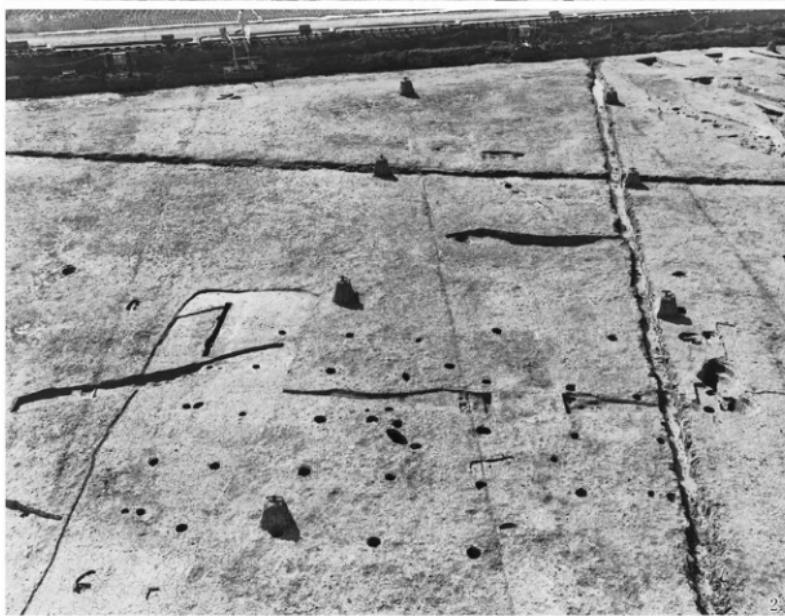


惣領野際遺跡 堀立柱建物・溝(中世)

1. SB3～SB5・SD301(東から) 2. SB6・SB7(北から)



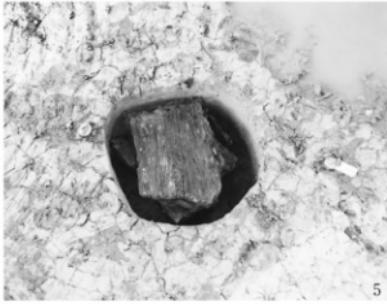
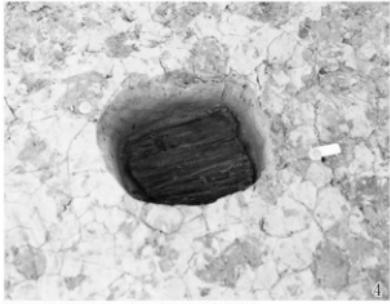
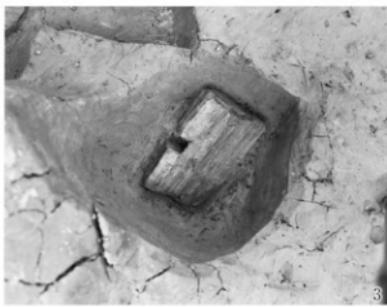
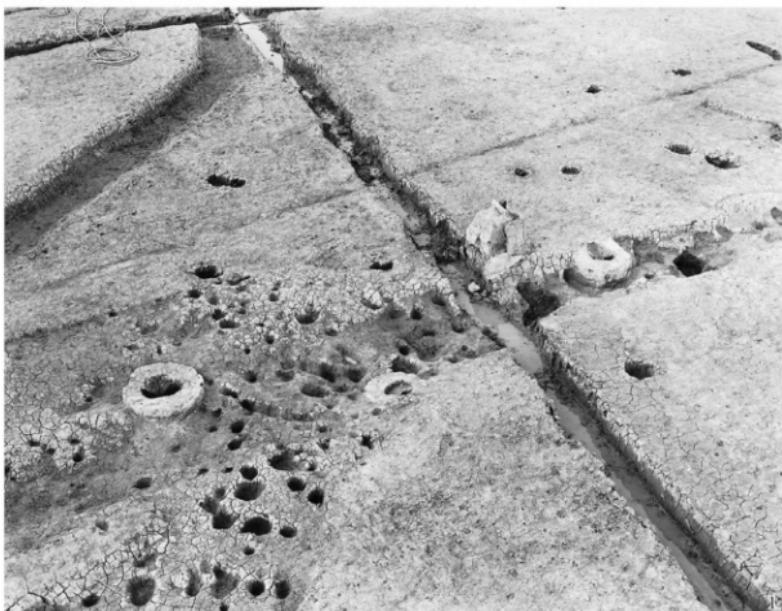
1



2

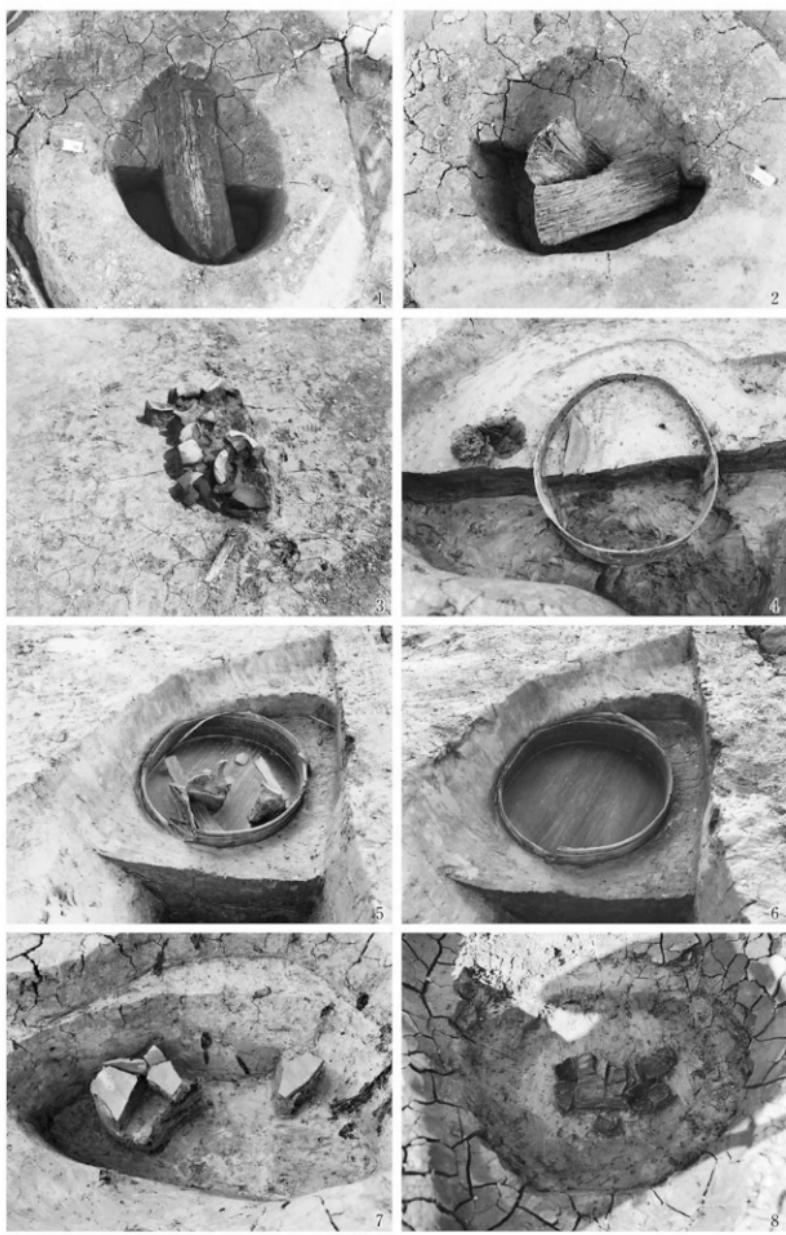
惣領野跡 堀立柱建物(中世)

1. SB8(北東から) 2. SB8(東から)



惣領野際遺跡 堀立柱建物(中世)

1. SB9(南西から) 2. SB6 SP362礎板出土状況(南から) 3. SB6 SP391礎板出土状況(南から)
4. SB7 SP405礎板出土状況(南から) 5. SB7 SP407礎板出土状況(南から)

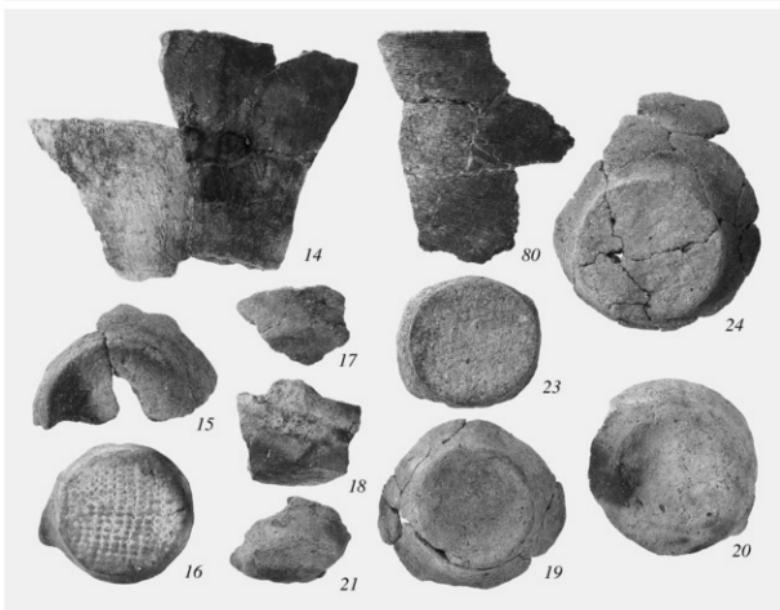
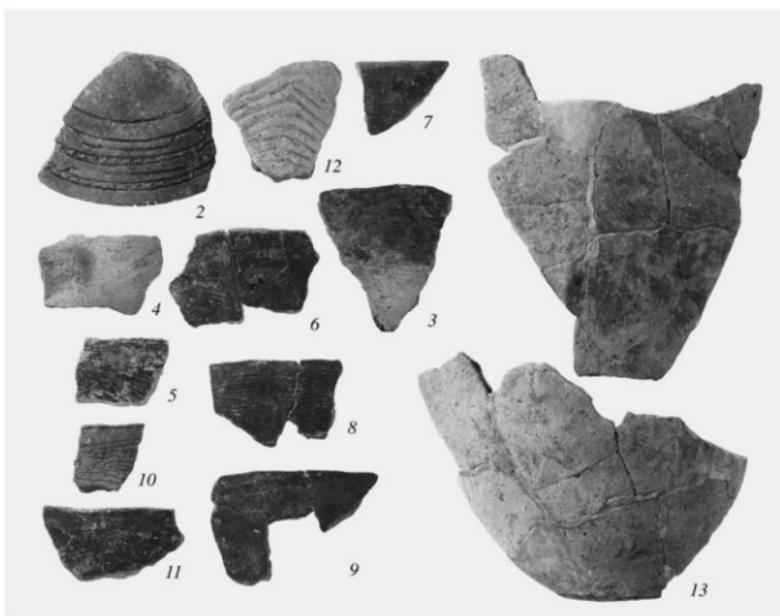


惣領野際遺跡 堀立柱建物・溝・井戸・土坑(中世)

1. SB9 SP446 磚板出土状況(南から) 2. SB9 SP447 磚板出土状況(南から) 3. SD346 珠洲(264)出土状況(西から)
4. SE459 曲物他遺物出土状況(南から) 5・6. SK360 曲物(305)他遺物出土状況(東から)
7. SK513 珠洲出土状況(南から) 8. SK542 漆器盆(307)出土状況(南から)



惣領野跡遺跡 土器(縄文時代)
SD201(I) SD250(22) 包含層



惣領野跡 土器(縄文時代)

SD201(2~21) SD250(23~24) 包含層



71



77



40



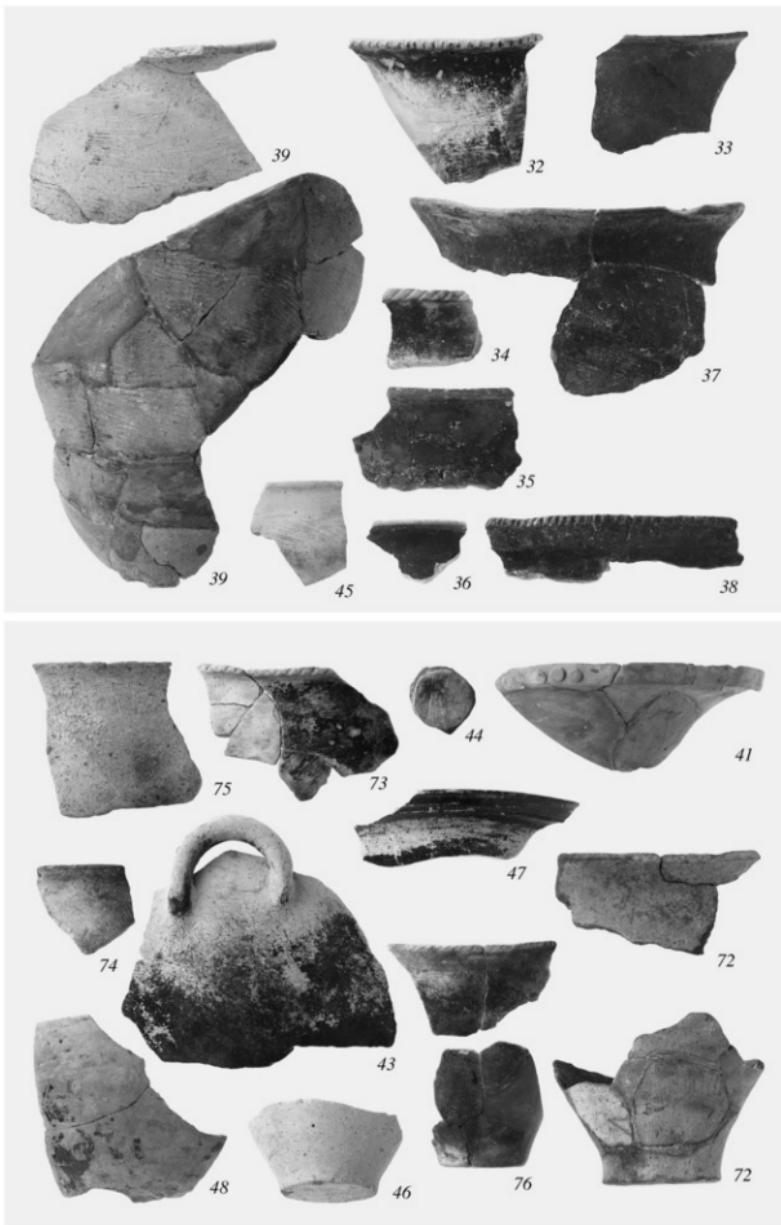
78



42

惣領野跡遺跡 土器(弥生・古墳時代)

SD201(40・42) SD235(71) 包含層



惣領野跡遺跡 土器(弥生・古墳時代)

SD201(32~39・41・43~48) SD235(72) 包含層



103



104



109



127



108



117

惣領野跡 遺跡 土器(古墳時代)
SD644



122



120



121



88



123



126

119

惣領野跡遺跡 土器(古墳時代)

SD642・SD643(88) SD644(119~123, 126)



183



198



177



195



193



196



207



206

惣領野跡遺跡 土器(古墳時代)

包含層



200



210



204



209



205



211

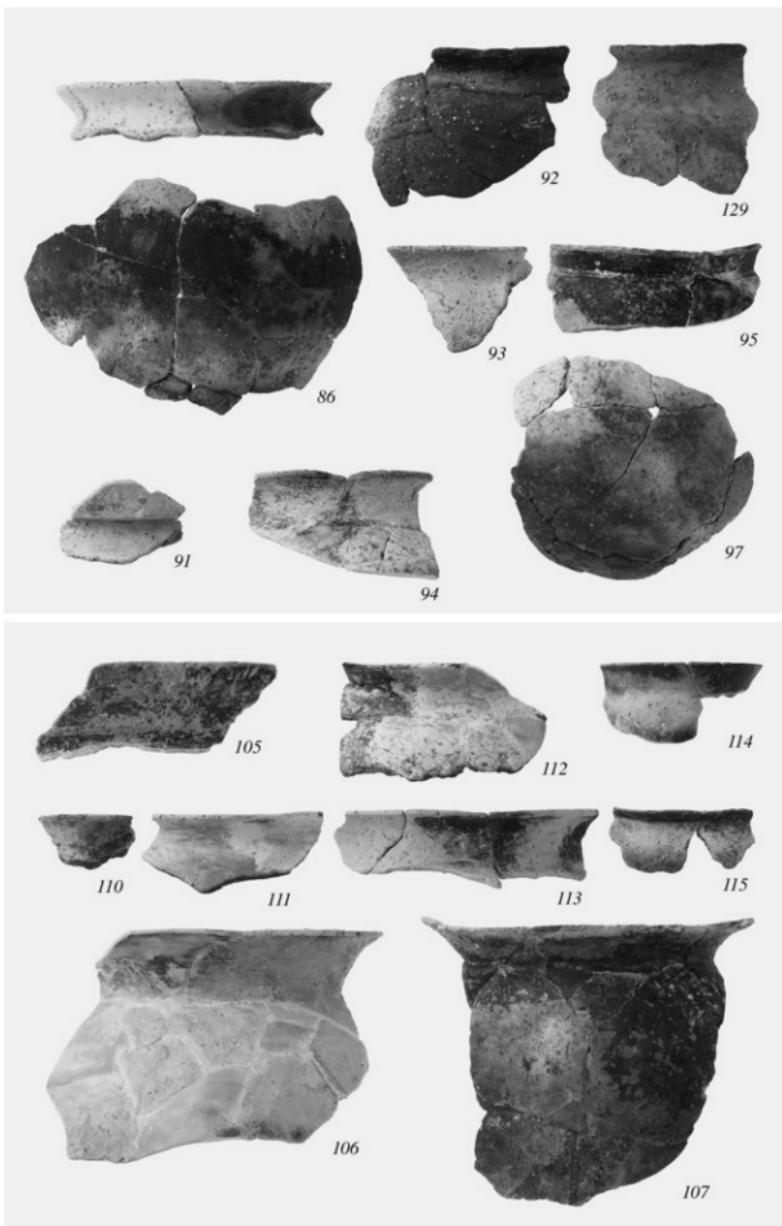


202



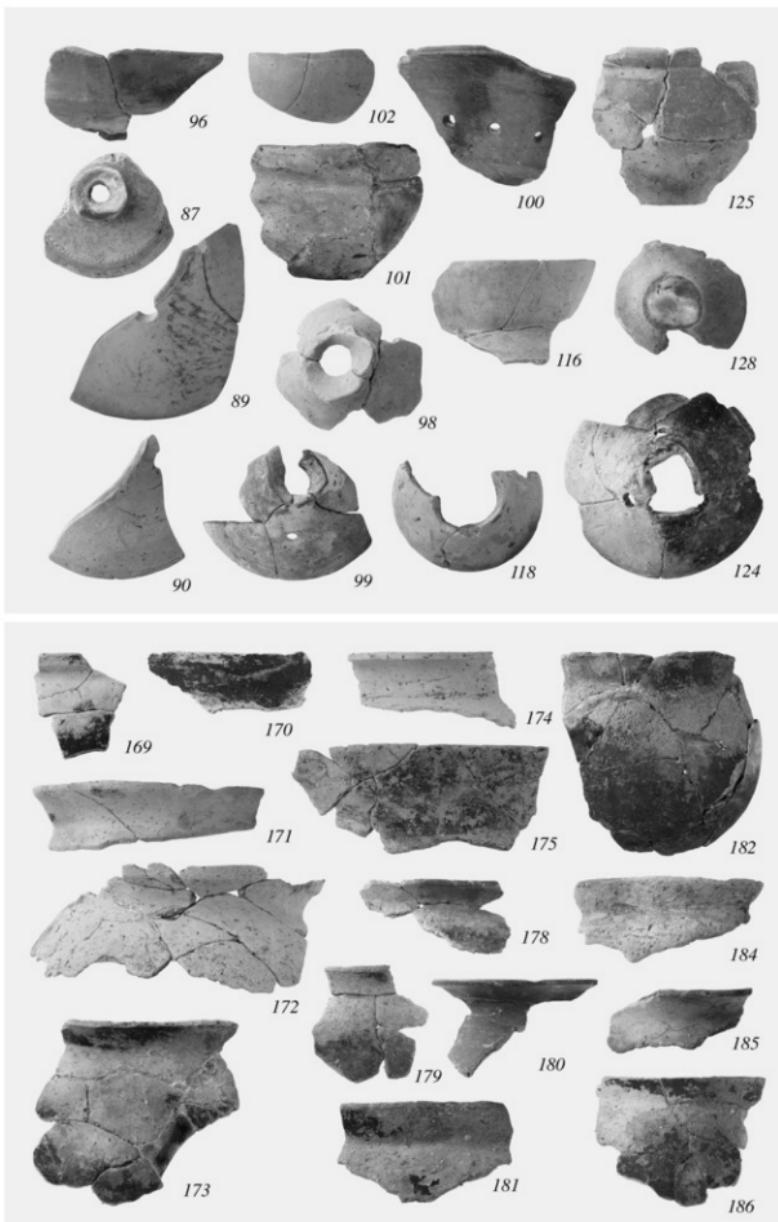
216

惣領野跡遺跡 土器(古墳時代)
包含層



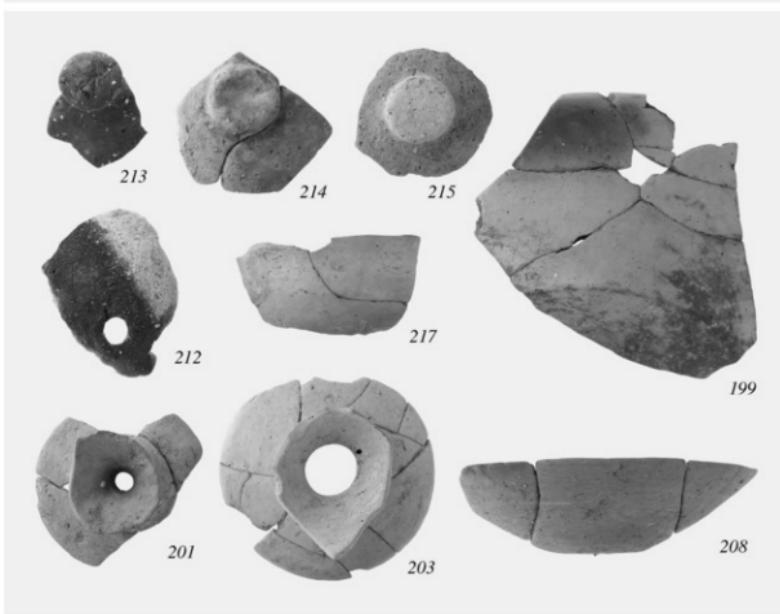
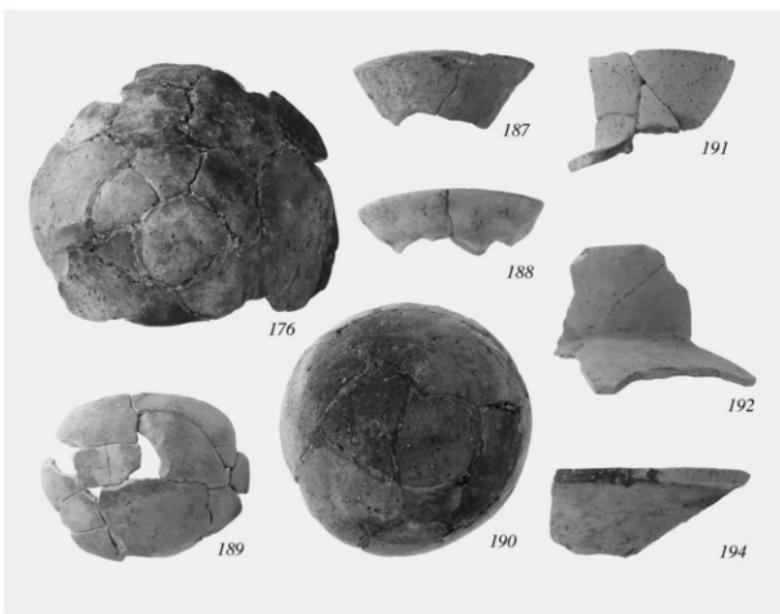
惣領野跡 土器(古墳時代)

SD642(86) SD643(91~95・97) SD643・SD644(112) SD644(105~107・110・111・113~115) SK617(129)

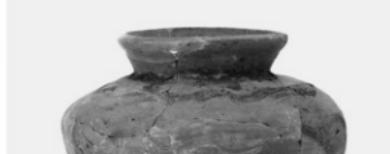
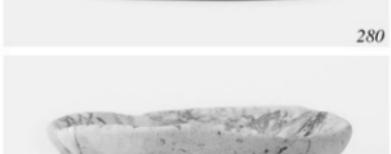
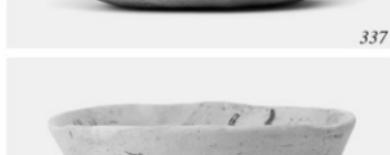


惣領野跡遺跡 土器(古墳時代)

SD642(87・89・90) SD643(96・98~102) SD644(116・118・124・125・128) 包含層

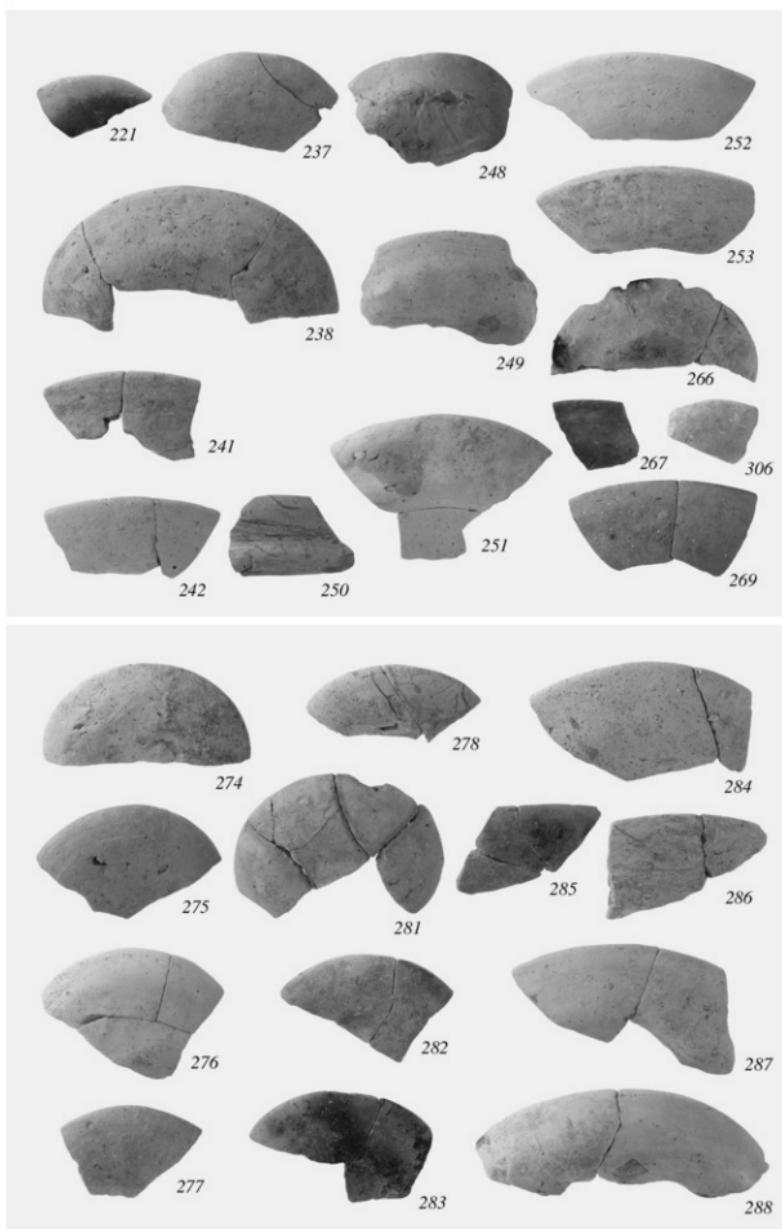


惣領野跡遺跡 土器(古墳時代)
包含層



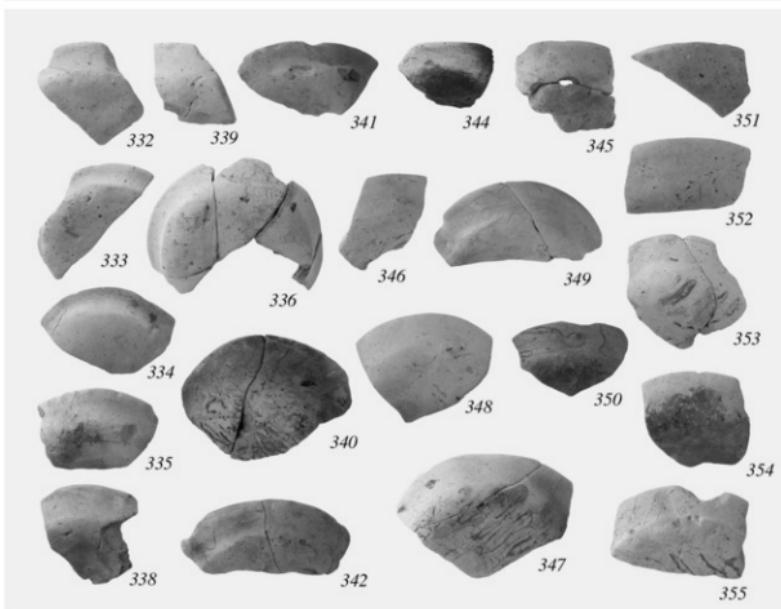
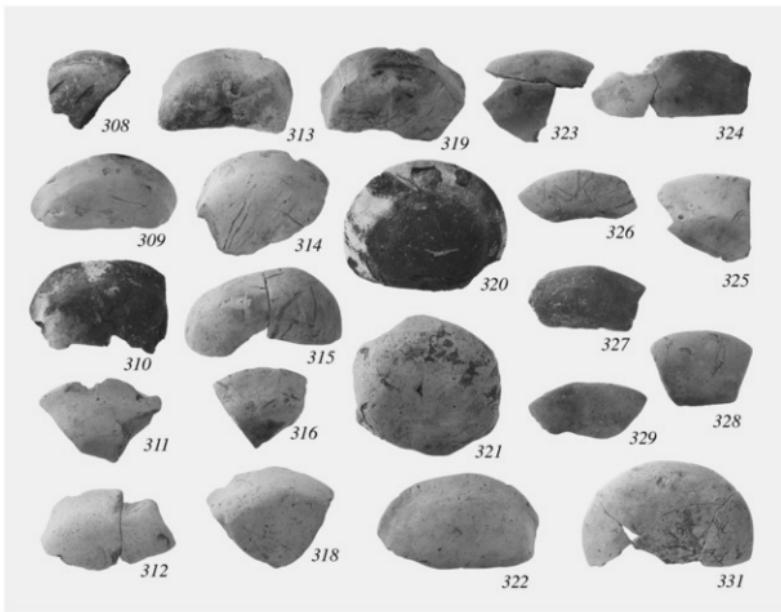
惣領野跡遺跡 土器(中世)

SB7 SP410(220) SB8 SP483(222) SD30(243) SD346(264) SD490(265) SK360(273・279・280) 包含層



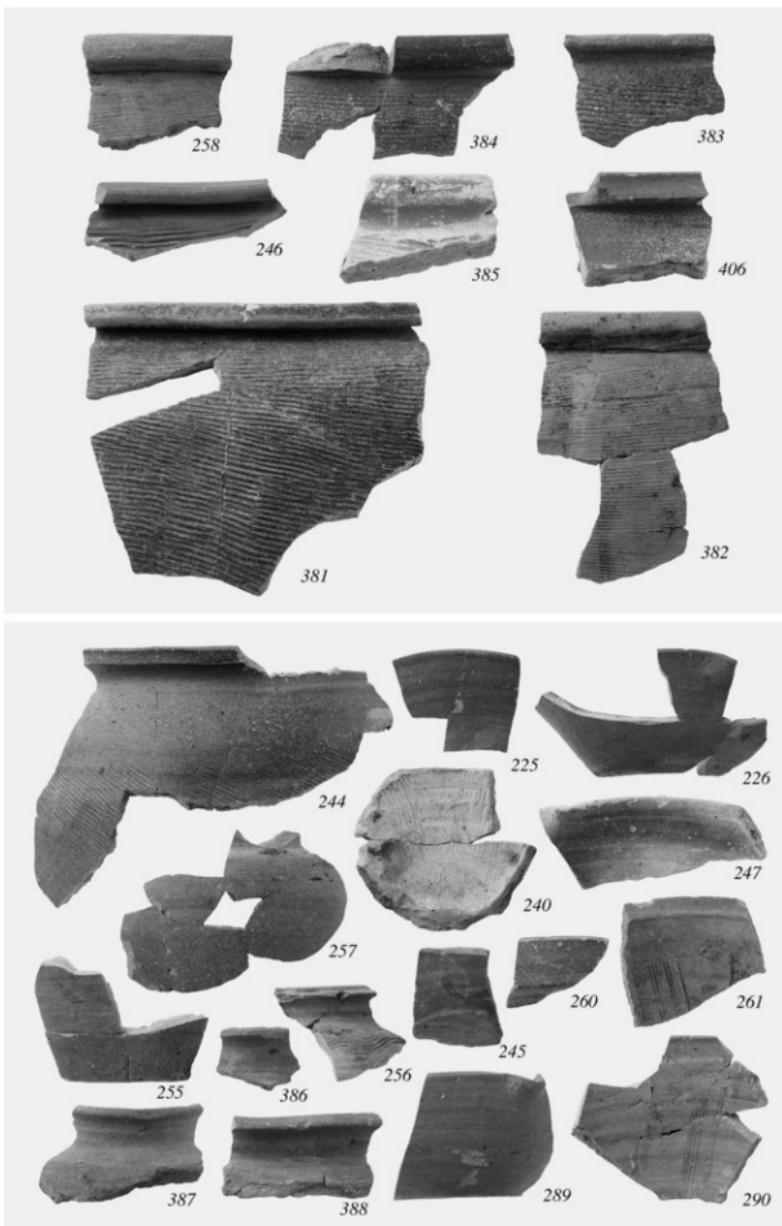
惣領野跡遺跡 土器(中世)

SB8 SP495(221) SD1(237・238) SD30(241・242) SD301(248～253) SD490(266) SE77(267) SE459(269)
SK360(274～278・281～288) SK400(306)



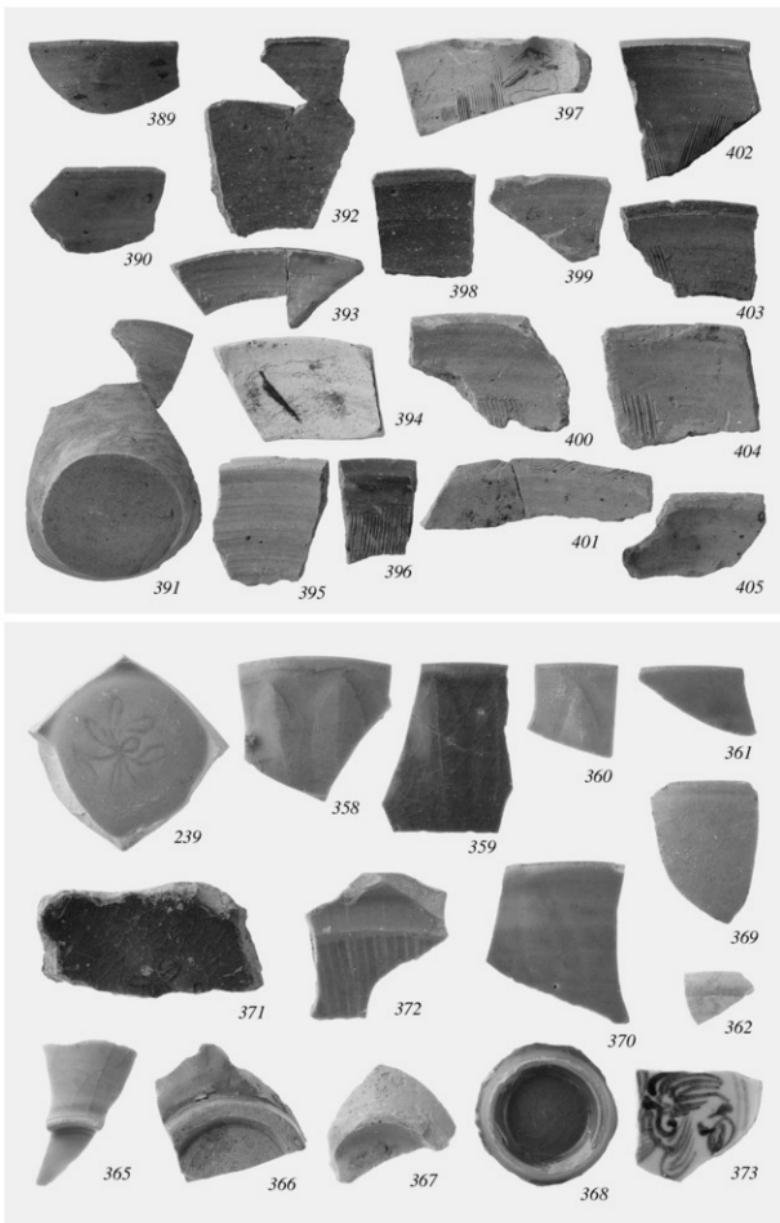
惣領野跡遺跡 土器(中世)

包含層



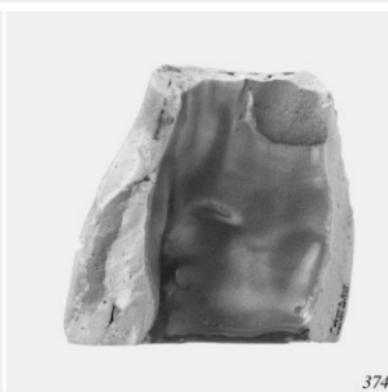
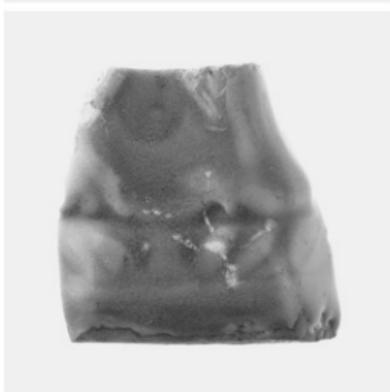
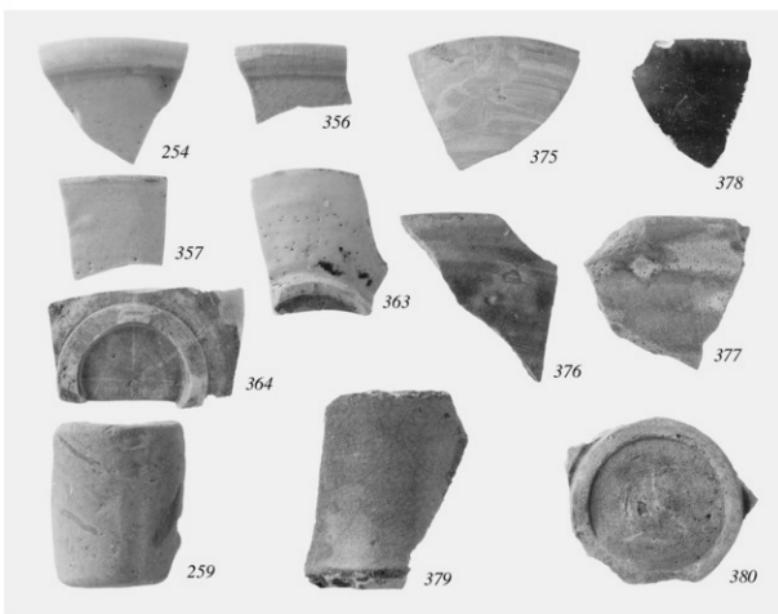
惣領野跡遺跡 土器(中世)

SB6 SP382(225) SB8 SP483(226) SD1(240) SD30(244・245) SD40(246・247) SD301(255～258)
SD304(260・261) SK360(289・290) 包含層



惣領野跡遺跡 土器・陶磁器(中世)

SD1(239) 包含層



惣領野跡 遺跡 土器・陶磁器・土製品(中世)
SD301(254・259) 包含層



411

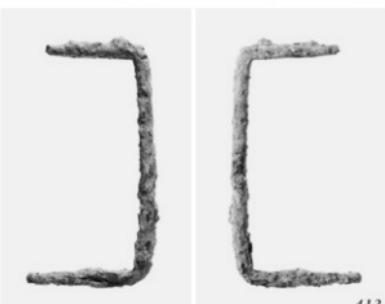
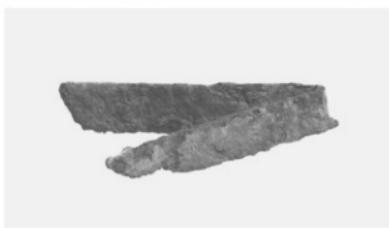


230



415

416



413



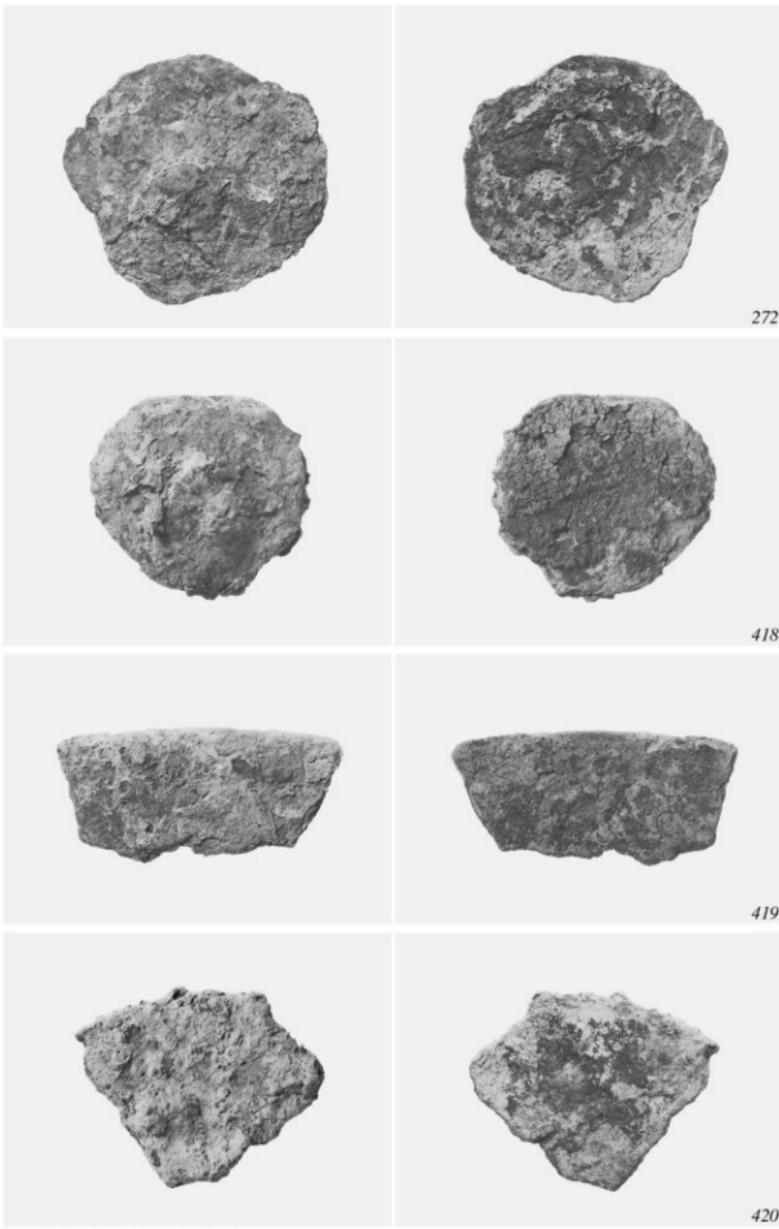
412



414

惣領野跡遺跡 金属製品(中世)

SB6 SP387(230) 包含層



惣領野跡 金属製品(中世)

SE459(272) 包含層



438



442



443



431



428



441



426



425



424



429



430



427



434



435



432



433



439



440



436



437



438



442



443



431



428



441



426



425



424



429



430



427



434



435



432



433



439



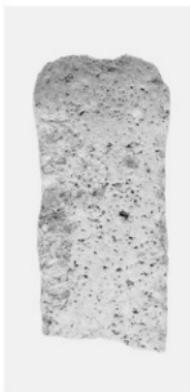
440



436



437



25

27



28

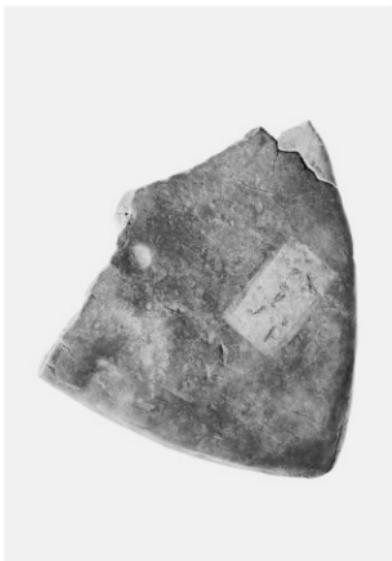
29



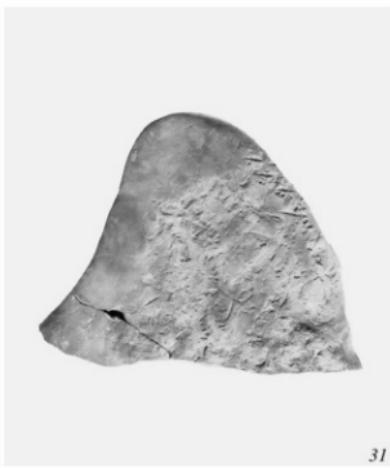
26

惣領野跡遺跡 石製品(縄文時代)

SD201

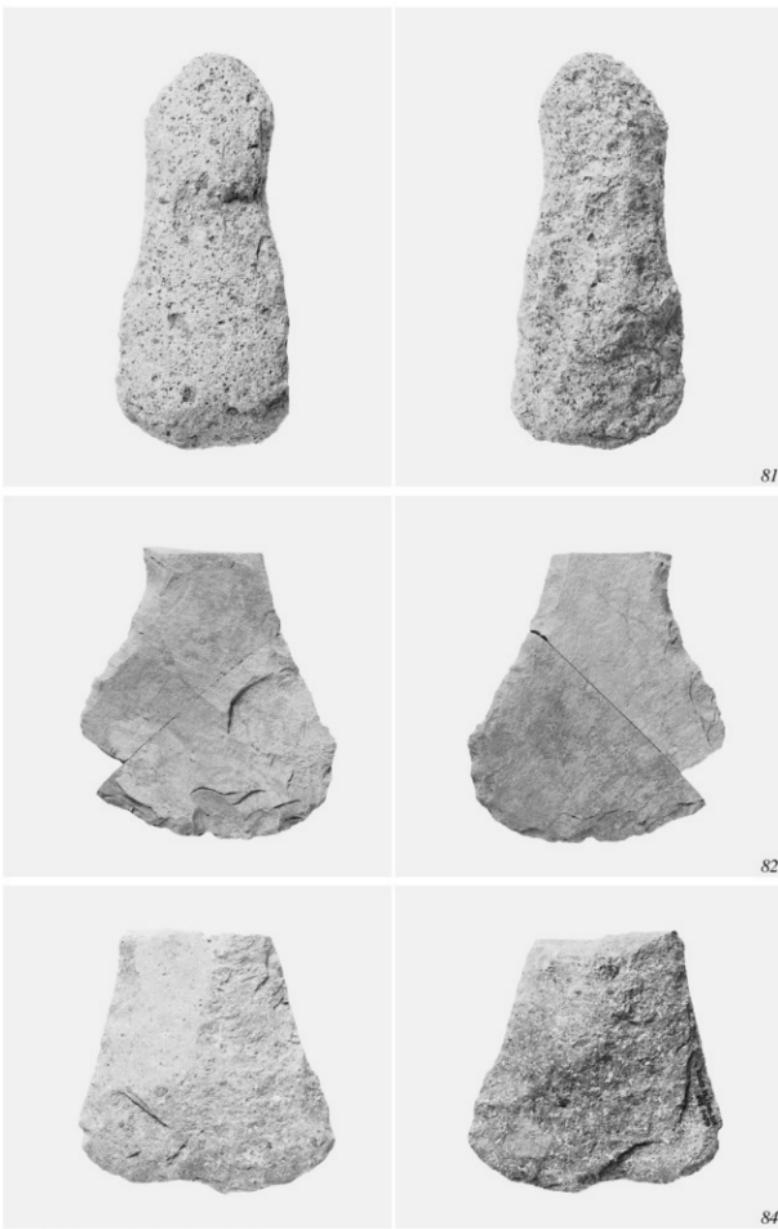


30

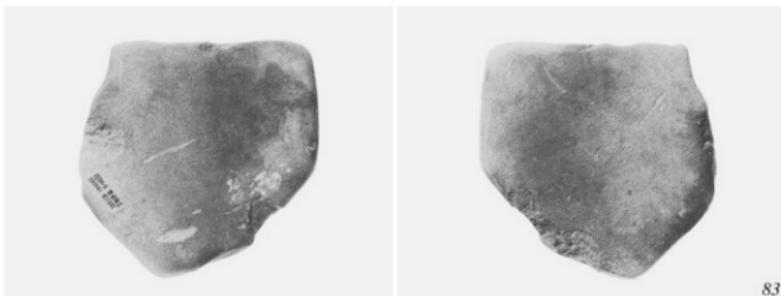


31

惣領野跡遺跡 石製品(縄文時代)
SK264



惣領野跡遺跡 石製品(縄文時代)
包含層



83

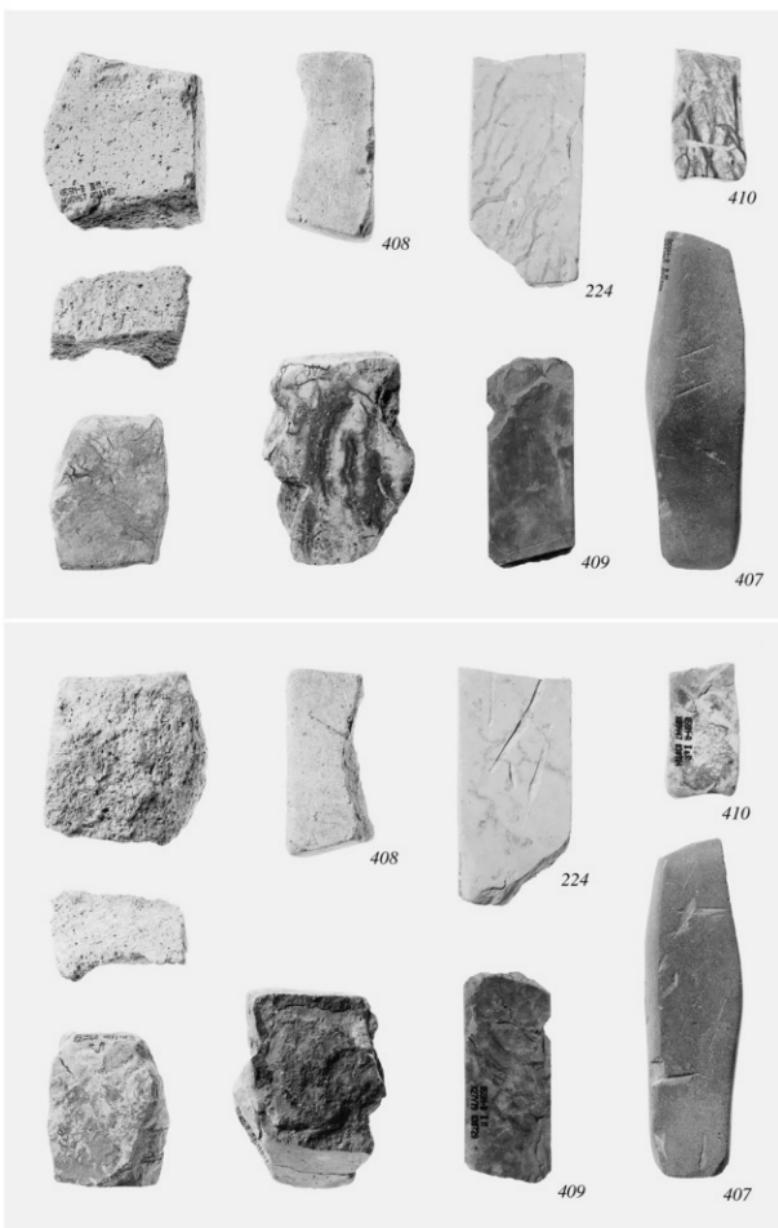


85



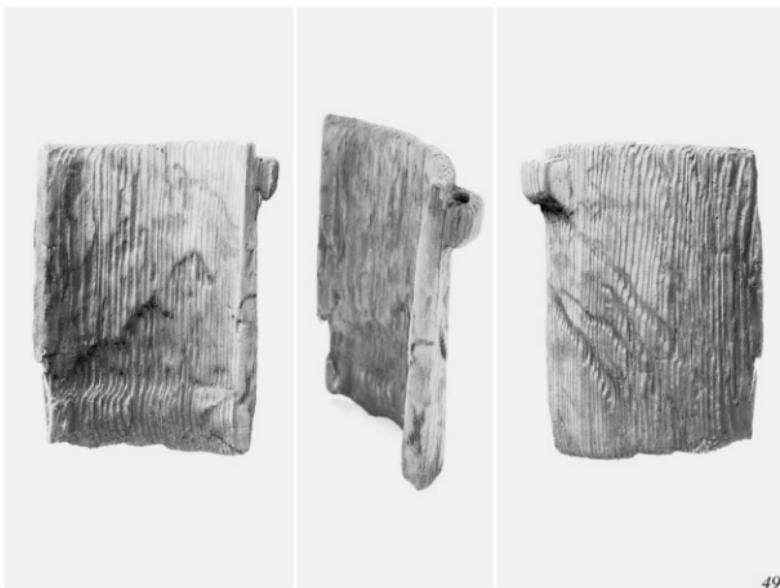
219

惣領野跡遺跡（縄文～古墳時代）
包含層

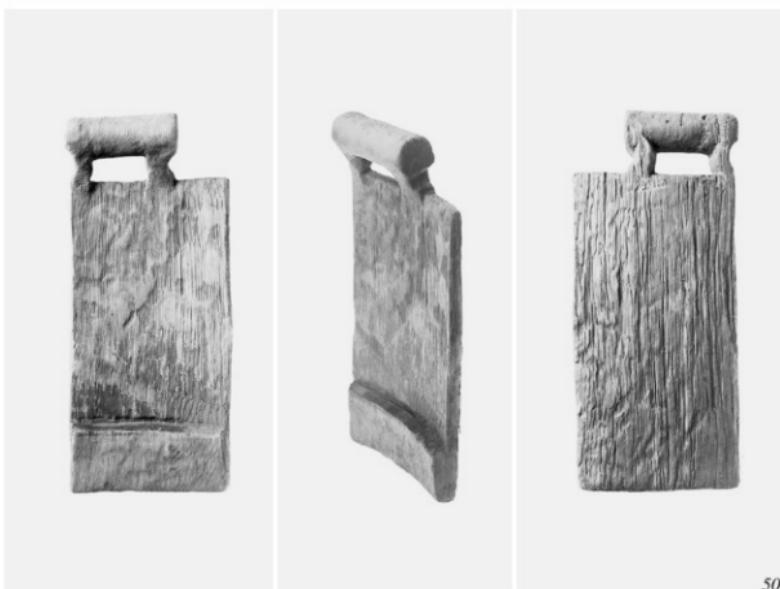


惣領野跡遺跡 石製品(中世)

SB3 SP330(224) 包含層



49

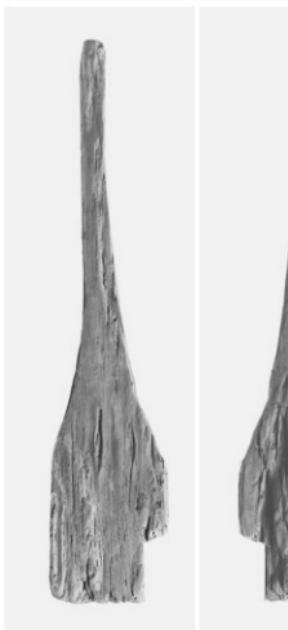


50

惣領野跡遺跡 木製品(弥生時代)
SD201



51



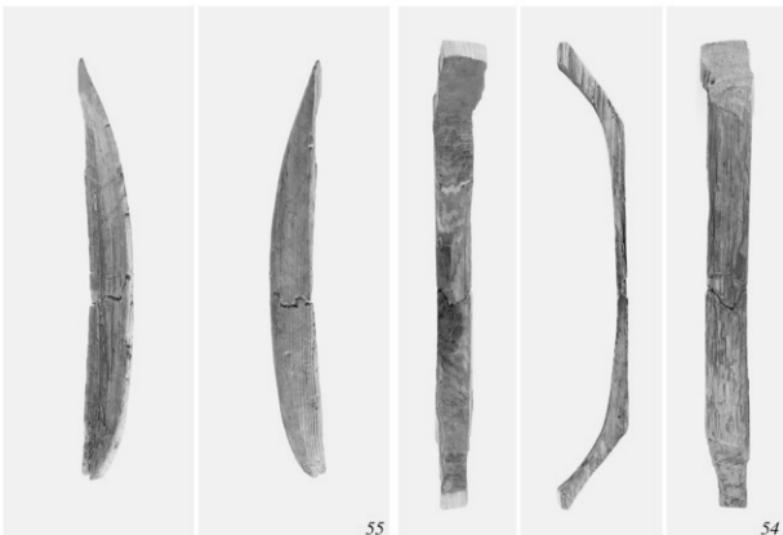
52



53

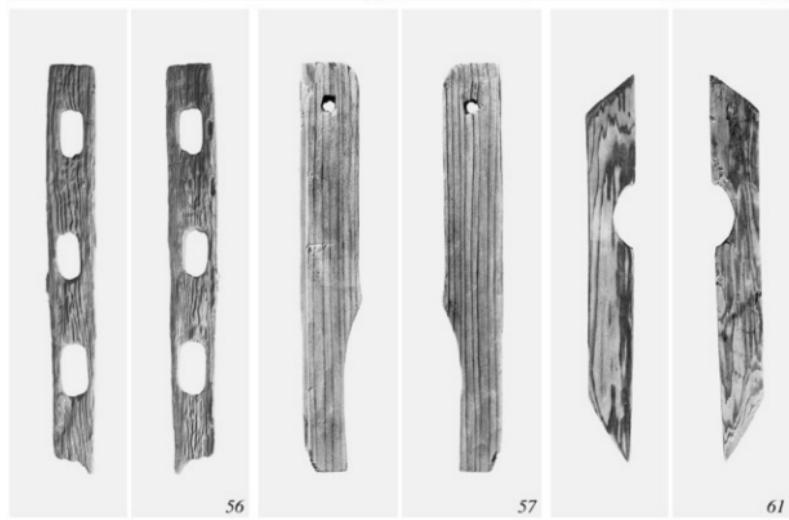
惣領野跡遺跡 木製品(弥生時代)

SD201



55

54



56

57

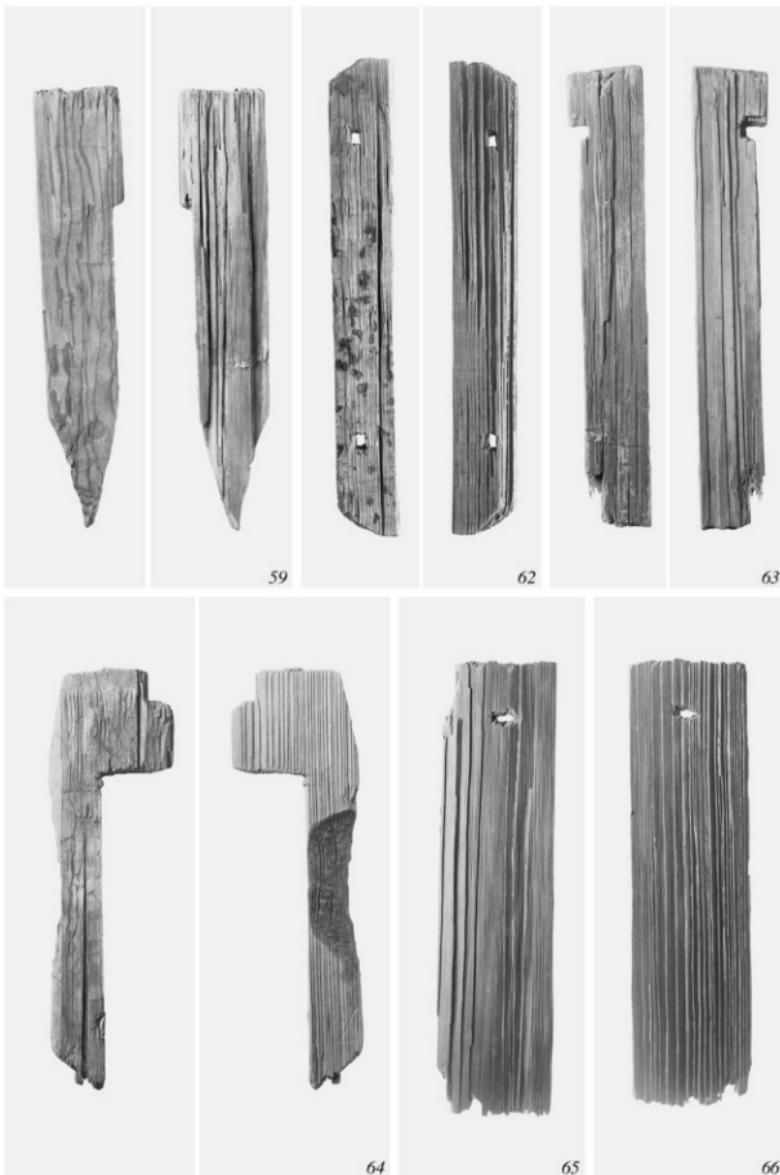
61



60

惣領野跡遺跡 木製品(弥生時代)

SD201



惣領野跡遺跡 木製品(弥生時代)

SD201



68



67



70



69



惣領野跡遺跡 木製品(弥生時代)

SD201



惣領野跡遺跡 木製品(古墳時代)
SD601



131



132



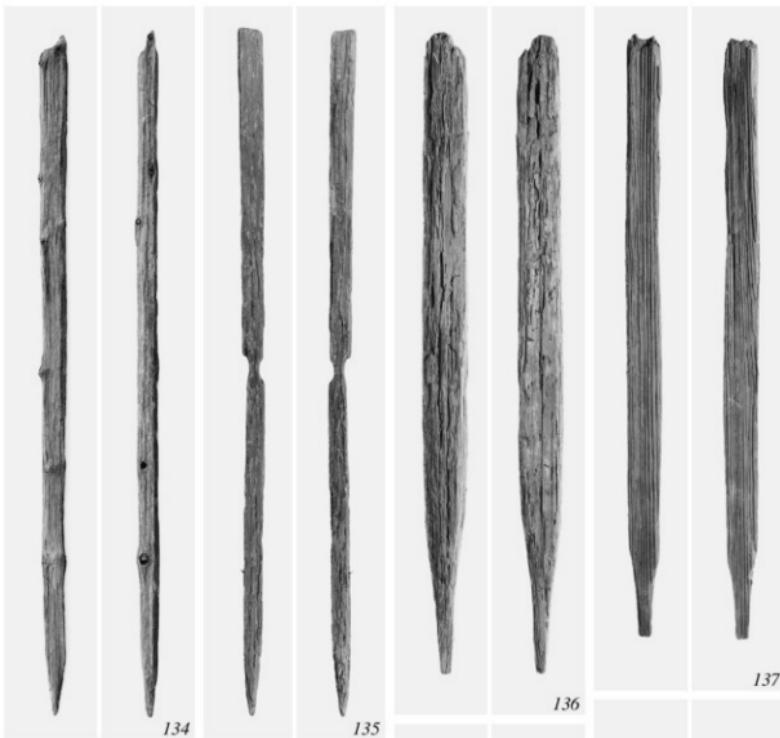
133



惣領野跡 遺跡 木製品(古墳時代)
SD601



132

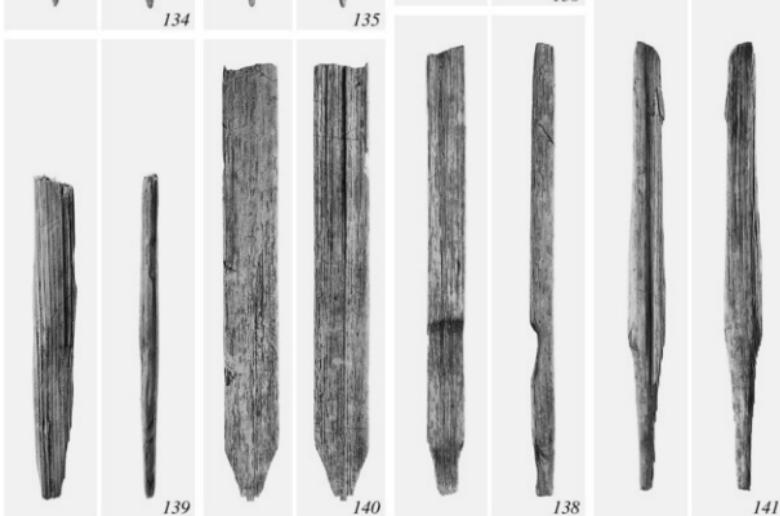


134

135

136

137



138

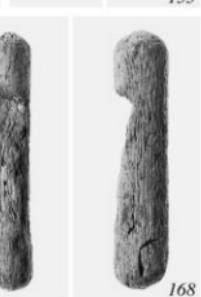
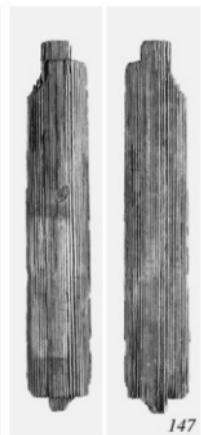
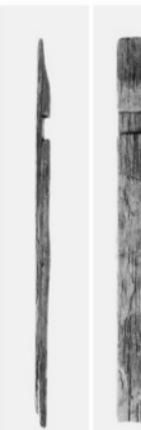
139

140

141

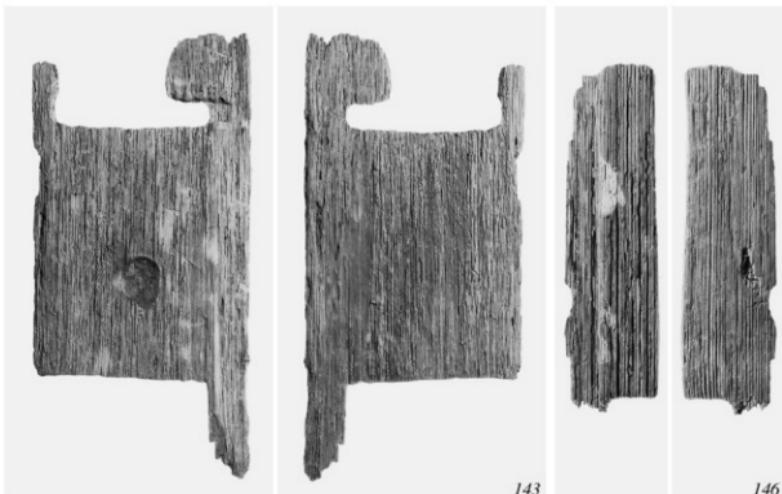
惣領野跡 遺跡 木製品(古墳時代)

SD601



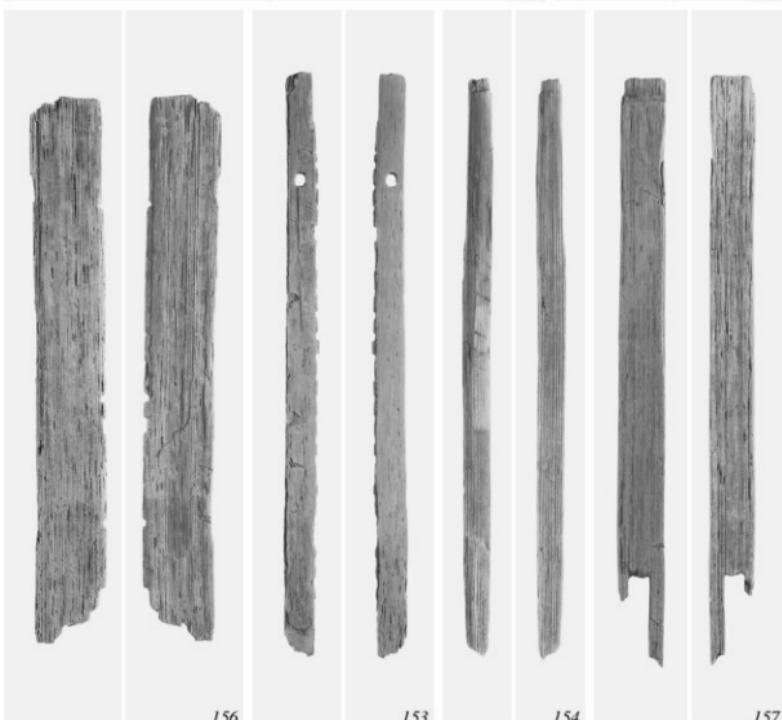
惣領野跡遺跡 木製品(古墳時代)

SD601



143

146



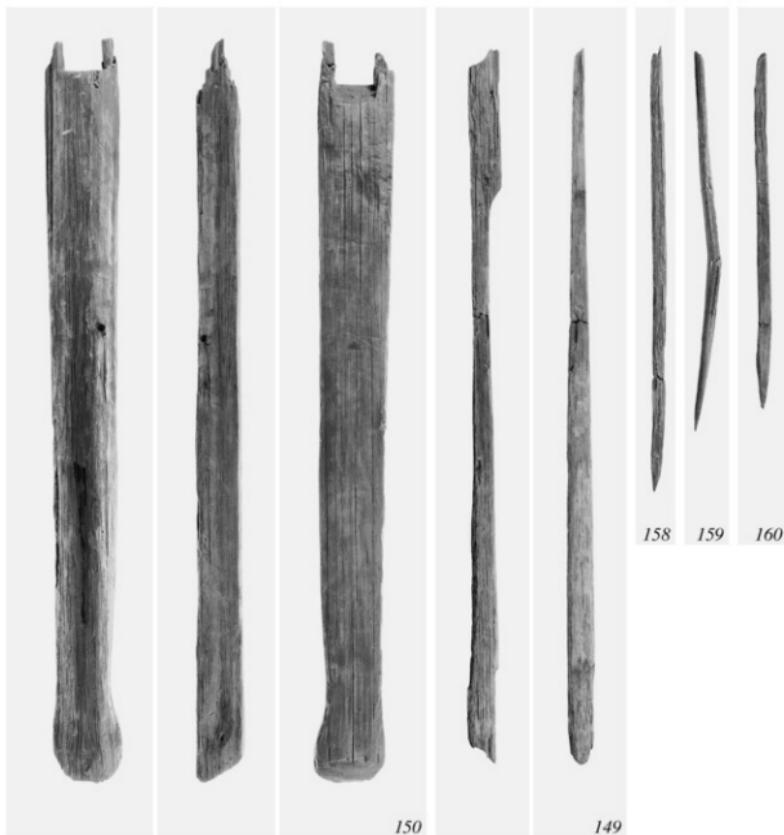
156

153

154

157

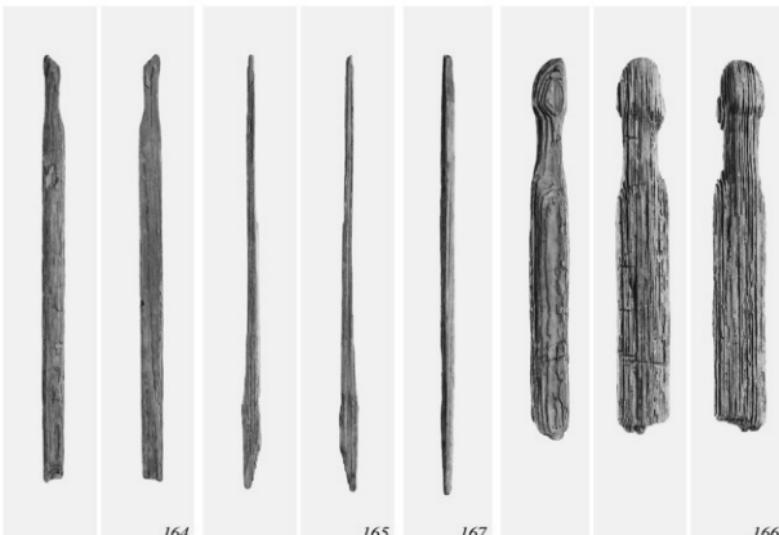
惣領野跡 木製品(古墳時代)
SD601



惣領野跡遺跡 木製品(古墳時代)
SD601



161
162
163
164
165
166
惣領野跡遺跡 木製品(古墳時代)
SD601



164

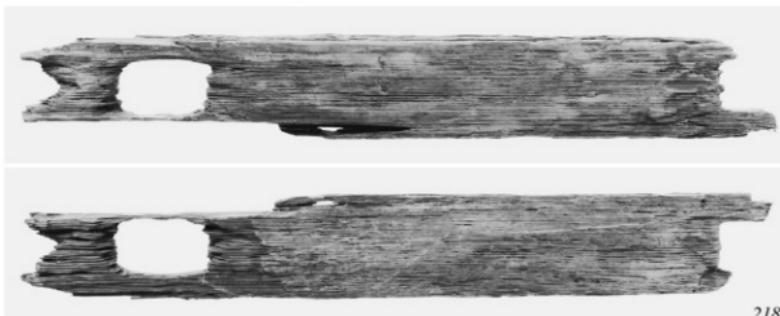
165

167

166



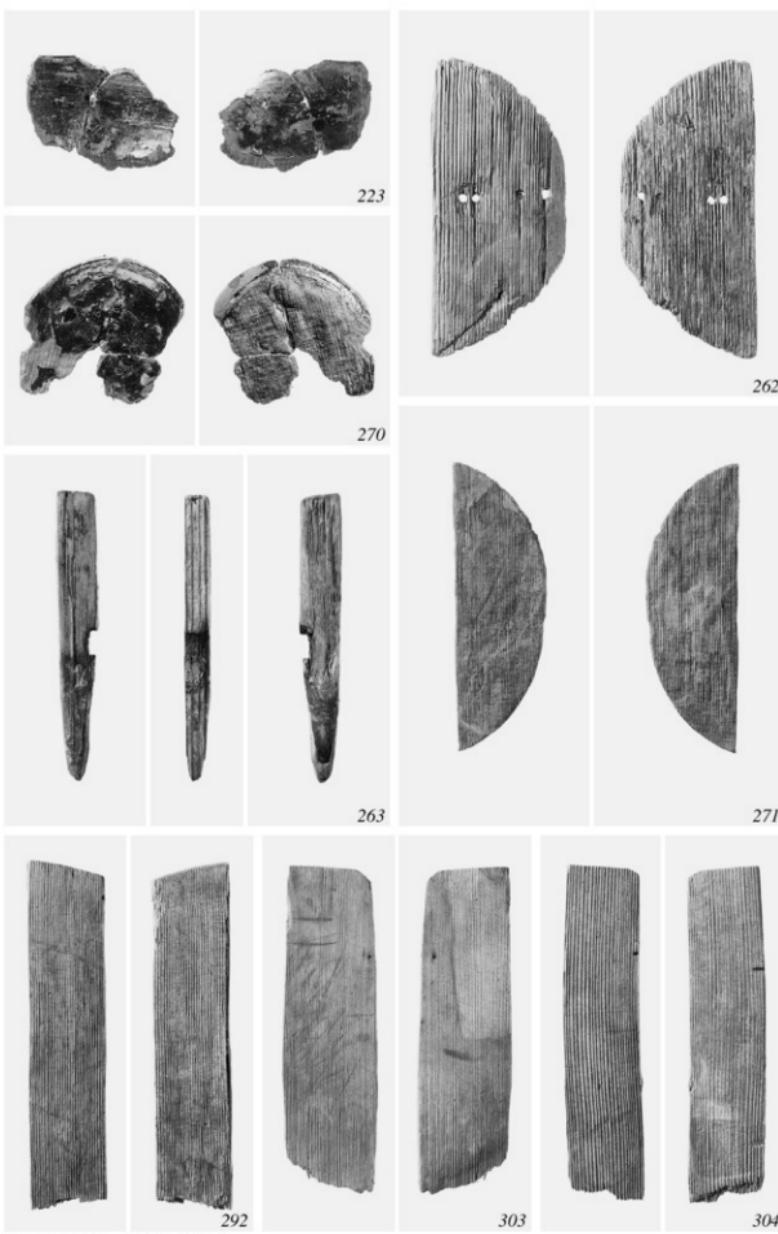
152



218

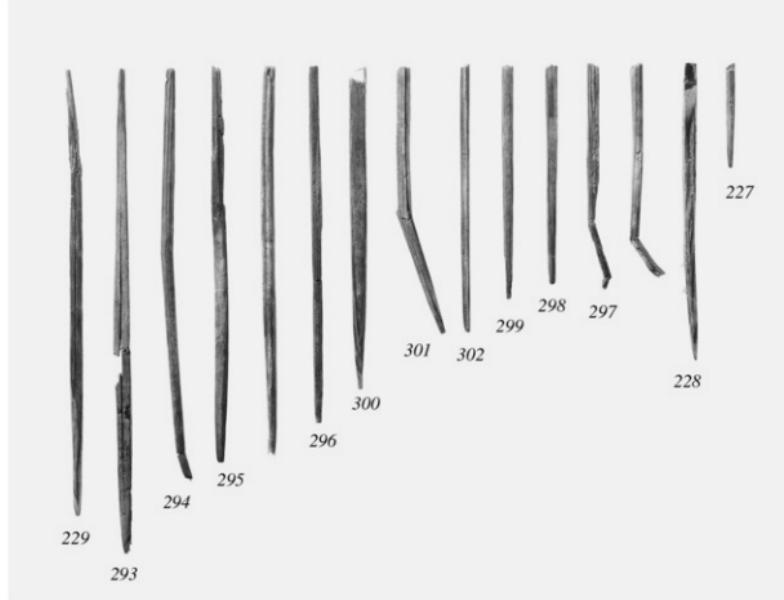
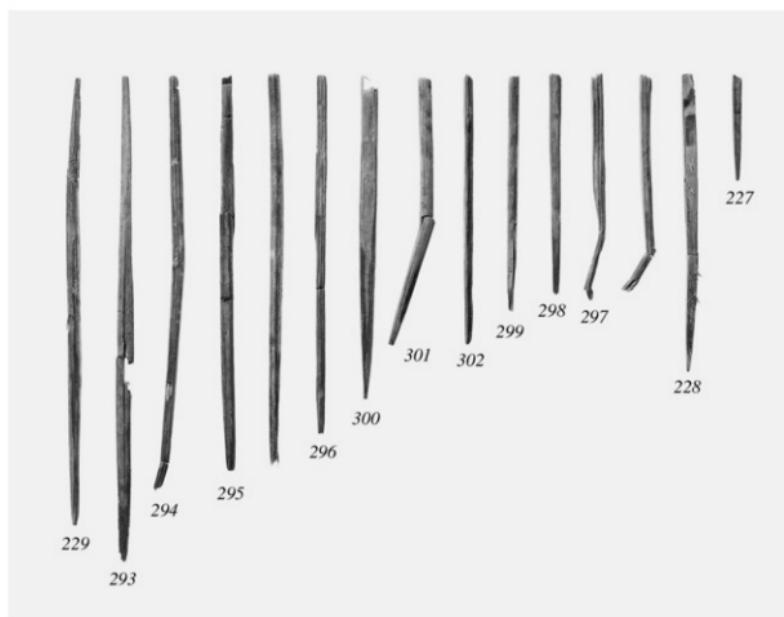
惣領野跡遺跡 木製品(古墳時代)

SD601(152・164~167) 包含層



惣領野跡遺跡 木製品(中世)

SB3 SP323(223) SD304(262・263) SE459(270・271) SK360(292・303・304)



惣領野際遺跡 木製品(中世)

SB6 SP387(227) SB6 SP395(228) SB8 SP482(229) SK360(293~302)



307



305

惣領野跡遺跡 木製品(中世)

SK360(305) SK542(307)



231



232



233

惣領野跡遺跡 木製品(中世)

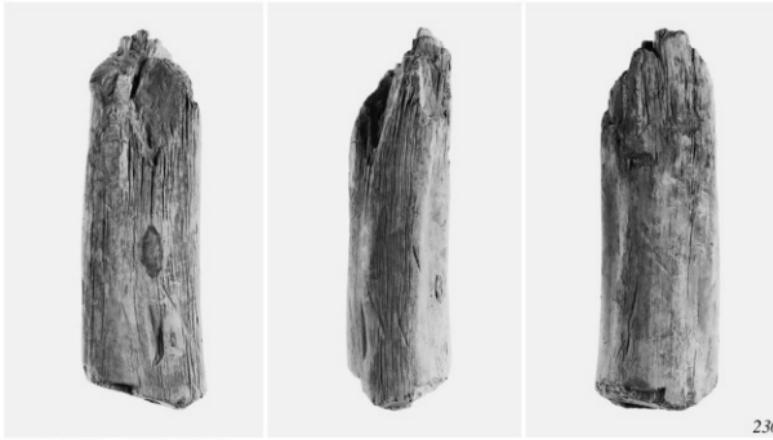
SB3 SP331(231) SB6 SP388(232) SB6 SP523(233)



234



235



236

惣領野跡遺跡 木製品(中世)

SB6 SP525(234) SB7 SP530(235) SA1 SP519(236)

2010（平成22）年2月25日 印刷
2010（平成22）年3月19日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第45集

惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告

～能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅹ～
(第二分冊)

編集・発行 財團法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印 刷 ヨシダ印刷株式会社
(本社) 〒921-8546 石川県金沢市御影町19-1
TEL 076-241-2141
(富山営業所) 〒939-8213 富山市里郷447-1 7番2号J102
TEL 076-493-3321